338
338-8
1200501394791
8
M

ナ 2827

ガリヴァー旅行記

小人國大人國

文學士
近藤敏三郎譯

336
8

東京
精華堂發行

338-8

旅行記（ガリヴァート）

小人國大人國

明治
44. 1. 25
内交

KUNBO

ガリヴァー旅行記解説

英國十八世紀前半の散文興隆時代の文壇に、諷刺家として盛名を馳せたヂョナサン・スヰフトは一千六百六十七年に生れ、一千七百四十五年に沒した、其の傑作『ガリヴァー旅行記』に筆を着けたのは彼が五十七歳の時で、實に以後十三年の歳月を費した苦心の大作である、批評家ショウの評した如く、實に人間全躰を諷刺した空前の作物である、其の結構の奇拔なる、其の觀察の鋭利なる、其の描寫の周到なる、其の諷刺の深刻なる、其の滑稽の巧妙なる、其の文章の簡潔なる、此の著あるが爲めに當時の最も驚嘆すべぎ人物として、又最も創才ある文豪として、赫々たる芳名を英文學史の幾頁に殘し、今に至る迄大人小兒の差別なく愛讀されるのである、エドマンド・ゴッスなる人は彼を評

して、彼は世界の好奇心の目的物であると云つた一語は、蓋し評し得て餘蘊なしと云ふべきであらう。

緒言

ガリヴァー旅行記は英吉利のジョージ第一世時代の社界を諷刺した寓意小説である、然し其の諷刺を去つて單に冒險譚或ひはお伽噺として讀むも、奔放自在の想像を馳せて滑稽諧謔を擅にし、人間界の醜惡劣等なる方面を餘蘊なく描破した手際は、一種の興味ある印象を讀者の胸に刻むことが出來る、これ作者の芳骸は土と化したけれど、作物の壽は永久に若くして歐米の少年子弟に愛讀せらるゝ所以である。

原書は此の小人國（リリプート）の卷と大人國（ブロブデングナック）の卷との外に、飛揚國（ラピユータ）の卷と賢馬國（フーイヌム）の卷との前後四卷より成つてゐるが、後の二卷は餘りに諷刺寓意が多くて少年の讀物に適せぬので、遺憾ながら割愛することゝした。

本書は斯くの如く少年の讀物である、故に前二卷の中と雖も省略し

た箇所が四つ五つある、大意のみを採つた箇所が一つ二つあるのは諒とせられたい。

尙ほ英國十八世紀前半の文壇を飾つた名作の來歷に就いては、次ぎに掲げた解說で御承知ありたい。

明治四十四年一月

譯者識

ガリヴァー旅行記

小人國大人國

文學士 近藤敏三郎譯

第一編 小人國

第一節

俺の父といふのは全體ノッチンガムシャアーに猫の額程な地面を持つてゐた人で、俺は其の五人あつた息子の内で、三番目に生れた腕白者だつたのだ、それでも親は天晴な學者にでも仕上げる積りだつたか、俺が十四歳の時にケンブリッヂのエマニュエル專問學校へ入れて呉れた、其校で三年間といふものは隨分勉强もしたのだ、

然し何をいふにも貧乏世帶の無理算段で仕方もないが、俺の學資金といつたらお話にならぬ程慨然なものであつた、這麽譯で到底勉強もして居られんので、俺は當時倫敦で有名の外科醫ゼームス・ベーッ氏の弟子となり、其家に四年間厄介になつてゐた、けれど時折は父から僅な小遣錢は送つて呉れた、然し俺は一生醫者になつて人の脈を握りたくもなし、折が來たら海外へ踏出して、乘るか反るか運試しでもするのが自分の身上だと日頃から思つてゐたから、其の方に必要な航海學や數學の研究に重からぬ財布の底をはたいて仕舞つた。

斯ういふ事情で俺はベーッ氏の家を出て一旦故郷に歸り、父や叔父のジョンや其他の親戚にもいろ〳〵心を打明けて相談し、改めて四十磅といふ纏つた金と、一年に三十磅づつ送つて貰ふ約束をしてレイデンへ笈を負ふて勉強することゝなつた、此處で俺は二年と七ケ月間專心醫術の勉強に腐心した、其といふのも長い航海でもする際には是非とも心得ておかねばならぬと氣付いたからである。

レイデンから歸ると間もなく、二年と七ケ月間の苦學空しからず、親切な先師ベーッ氏の推薦で、俺は當時アブラハム・バンネルといふ少佐が船長をしてゐたスワロー號乘組の外科醫となり、レバントへも一二度航海し、猶は其他の地へも乘廻して二年半の月日は經つてしまつた。

船から下りて故郷へ歸つた時、俺は生涯倫敦へ居を定めて暮さうと決めた、といふのはベーッ氏がいろ〳〵利害を說いて勤めても下さり、且つ澤山な病家先まで讓つて呉れたからである、で、オールド・ジュリー街に小さな醫院を開いて人々の治療に應じてゐた、其後何時迄も獨身者ではと忠告して呉れた人があつたから、機商エドモンド・バートンと呼ぶ人の二番娘メリー・バートンを妻にした、メリーは實に四百磅といふ大枚な持參金附きの花嫁であつたのだ。

が、柳の下に何時も泥鰌はゐぬと譬喩の如く、ベーッ氏には二年の後死別れる、頼る親友は少なし、醫院の方も追々玄關は荒れてくる、且つ俺は多くの同業者のや

うに拙い手術を平氣で大切な患者に施すのは如何も良心が咎めるので、家妻や二三の知己とも相談した結果、再び海上に運命を任さうと決心した、で、俺は以前のやうに船の乘組醫となつて、前後六年間に隨分知らぬ土地へ纜を繫ぎ、其の間東西兩印度へも航海して多少は財産も蓄へることが出來た。

俺は何時も自分の左右に澤山な書物を積んでおいて、暇さへあれば古今の名著に眼を曝し、又上陸さへすれば其地の人民の態度性情等を觀察し、出來得る丈け其の國語をも研究して見たが、這麽場合には自分の記臆力が人に勝れてゐたのが少なからず好都合であつた。

けれど最後の航海の時、俺は何時迄斯うしてゐても前途に光明がないと思はれたので、急に海が厭になり、斷然又倫敦に歸つて家妻や家族と一緒に樂しい家庭を作つて暮すことにして、專ら水夫の患者を治療する考へで其から其へと居を移して玄關を張つては見たが、相變らず鴉の嘴と目的は齟齬つて思ふやうにゆかず、遂に

は俺も我を折つて石の上にも三年と、其の三年といふもの熟として棚の牡丹餅を待つてゐたが、待てば海路の日和とやら。幸ひ南洋航海のアンテロープ號の船長ウキリアム・ブリチャードといふ人から至極都合の好い申込みがあつたので、俺は渡頭に船と早速二つ返辭で乘組員となつた。船は一千六百九十九年五月四日にブリストルの港を出帆した、そして最初のうちは前途に幸榮の輝いた愉快な航海であつた。

此の航海中の冒險談を此處で詳細に述べて讀者を煩はすのは俺の目的でないから搔撮んで話すが、船が東印度へと波を蹴つて行く途中、烈しい暴風雨を喰つてヴァン・デーメンス・ランドの西北方へと吹き流された、當時の觀測に依ると南緯三十度二分の處である、其迄には乘組の中十二人は過激な勞働と粗惡な食物との爲めに哀れや船中で非業な死を遂げてゐる、殘る者とても弱り切つて唯氣息が通つてゐる許である。

時は丁度十一月五日、其の土地では焦られる程暑い夏の初めである、焼けた釜で

も頭から被せられたやうなドンヨリした天候に、綿のやうに疲れてゐる船員は熱い太息を吐いてゐると、船から直先に岩があるのを見付けたけれど、折しも風が恐ろしく強かつたので手も足も出ず、アッといふ間に船を眞一文字に其上へ乘り上げたから堪らん、潮は魔の如き巨口を開けて喧噪い物の碎ける音と共に船を呑んでしまつた、俺を合せて六人の者は喫驚して端艇を下して飛び乘り、腕も折れよと漕ぎに漕いで四里許りは命からゞ逃げたが、何分今迄に氣力も體力も悉皆消耗し盡した連中だから、最早一寸も漕ぐことは出來なくなつた、仕方がないので皆橈を捨てゝ腑の抜けた身體を船中に重ね合ひ、波のまに〳〵運命を天に任せてゐた所が、ものゝ三十分も經つたかと思ふ頃突然北の方角から一陣の疾風が襲つて來て、又もや生命の綱の端艇を轉覆して了つた、重ね〳〵の災難に遇つた連中は如何した事やら、岩にヤットの事で嚙付いた者もあつた、船に其儘殘つて狼狽へてゐた者もあつたが、俺は其後の事は無論知らんが、皆慾然に魚腹に葬られて仕舞つたと言へば多分間

違ひはあるまい。

俺は助かるものなら助かつて見やうと懸命に風と潮とに從つて前へ〳〵と泳ぎ、時々足を下ろして見たが一向底には屆かなかつた、其内に最早勞れ切つて慾にも得にも殆んど悶くことも足掻くことも出來なくなつて、底の藻屑とならばなれと足を下ろすと、嬉や脊丈が立つ處へ來てゐた、其時は最早風も嘘を言つたやう和いでゐた、其處は遠淺であつたから上陸する迄に一哩近くも足を引摺つた。

扨陸の土を踏んだのは夜の八時頃かと思ふ、其處から半哩近くも奥の方へと進んだが、住家は愚か人つ子一人にも行遇はぬ、然しこれは當時疲勞と饑餓との爲めに斃れさでうあつた俺の目には留らなかつたのだかも知れぬ、兎に角氣が遠くなりさうな程弱り切つてゐたのと、端艇に乘る時急いでブランデー酒を一杯引掛けて來たのと、氣候が恐ろしく暑いのとで堪ゐられぬ程睡氣を催したから、短い軟な草の上に轉と横になり、臍の緒切つてから未だ覺へのない程前後も知らず熟睡してしま

つた。

やつと目の覺めたのは照付ける日足から推すと朝の九時頃らしい、俺は急いで起たうとしたが何した譯か身動きする事も出來ない、不思議な事もあればあるものと子細に見ると、俺が丁度仰向けに寢てゐた所を何時の間に爲たものか手も足も確り地上に結ひ付けてあるばかりか、俺の濃い長い髪も同じやうに結ひ付けてあつたからである、おまけに幾筋かの細い繩で雙方の腋下から腿へかけて縱横十文字に紮げてある樣子である、で、寢返する事も出來ず唯上より外見る事が出來ないのに、熾くやうに熱い日光は容赦なく照付けて眼珠が熔け出しさうだ、俺の身邊には何か蚊の鳴くやうな聲が澤山にするけれど、仰向きに寢ている哀しさには蒼空のみが目に入る許で振向くことも出來ない、少時すると何か活物が左の足の方から上つて來て、胸を越ゑて徐々進んで來たが、到頭頤の邊迄やつて來た、俺は如何な動物が匐匐つて來たのかと出來る丈け下目を使つて見ると、何と驚くではないか、身長六寸

よりは高くない人間の形をした活物が、甲斐々々しく手に弓矢を携ゑて、背には箭筒を負つてゐるのである。

呆氣にとられて此の小動物が何するかと見てゐると、同じ樣な連中が四十人餘もやつて來た樣子に俺も何だか氣味が惡くなり、思はず知らず大きな聲で怒鳴つたら連中は喫驚仰天して倉皇と逃去つたが、後から聞けば二三の者は俺の身體から飛降りたが爲めに怪我をしたとの事であつた、けれど連中は直ちに又取つて返し、其内の一人は俺の顏が判然と見ゑる所まで勇敢に進んで來て、左も感嘆に堪ゑぬといつた風に手と目とを上げて明瞭した聲でヘキナデグルと叫ぶと、他の者達も異口同音に繰返し〳〵叫んだ、俺には其の言葉の意味が分る筈はない、横になつては居るものゝ此先如何な酷い目に遇ふも知れぬと、心中に不安の念が烈しかつたのは讀者も大方察しがつくことゝ信ずる、で、俺は出來る事なら起きて見やうと思つて悶くと、嬉しや左の手の繩が切れて杭まで拔けて來た、其を顏の所まで持ち上げて見て彼等

が如何な具合に結い付けたか〻分つたので、此度は頗る痛い思ひを忍んで左側に結い付けてあつた髪を力を籠めて引張つて見たら、其の爲めに多少絲が弛んで二寸許は横を振向くことが出來た、俺は早速手を差伸して彼等を一握にしてやらうと思つたら、皆蜘蛛の子を散らしたやうに逃げ去つて唯遠くから鋭い聲で叫んでゐる、其が止んで連中の一人が大聲にトルゴ、ホナックと喊いたと思ふと、百本餘の矢が宙を飛んで來て俺の左の手に針の樣に刺つた、歐羅巴人が高い所の敵を攻める時のやうに此の連中も盛んに宙へ矢を放つて、大概は俺の身體の上へ落ちたけれど、それでも顏へ落ちて來るのが有つたから早速左手で顏を覆ふた、少時して雨霰と降る矢の責苦がすんだ時、俺は悲哀と苦痛が胸に込上げて來て再び縛を解かうと悶いた所が、此度は前よりも激しい一齊射擊に遇つた、其内の二三人は俺の側迄やつて來て槍で突たけれど、運好く牛の皮の短表衣を着てゐたから蚤の螫した程にも傷は受けなかつた、俺は其時生半起きるより夜迄ジツト寢てさへゐれば、最早左の手だ

けは自由になるのだから全身を動かすのだとて骨の折れた事ではなし、よしんば幾丈の大軍が攻め寄せればとて這麼掌に入る程な人間なら、負かすに何の手間も暇も要るものかと思つたので圖太く横になつてゐると、彼等は俺が靜まつたのを見て矢を射るのを止めたが、耳の邊で噪々といふ聲が增したのから推すと益々連中が群集して來たことが分る、其内に耳から二間も離れてゐるかと思ふ所で一時間餘も何かコツ〳〵敲いてゐる音がするので、如何な眞似をするかと出來る丈け顏を捩向けて見ると、地面から一尺五寸位の高さに足場が出來、其に登る梯子も二三掛けてあつて上には四人の連中が容易に乘れる位の大いさであつた、すると其の足場の上から身分も地位もありさうな一人が長々の大演説を試みたが、俺には依前として馬の耳に念佛である、が、一寸斷つて置く、其の先生が大演説の始めにラングロー、デブル、サンと三度繰返して叫ぶと、五十人許の者がばら〳〵と俺の側に駈けて來て、頭の左側を結ひ付けた繩を切り離して呉れたので、俺は自由に右の方を振向く事が

出來たから、演說者の人物も身振も觀察し得られた、辯士は歳の可なりいつた人で側に侍る三人の從者よりは身長も餘程高く、俺の中指より少し高いかと見た、三人の從者の一人は小姓で主人の裾を握げて居り、他の二人は兩側に立つて主人が足場から落ちぬやうに身を支ねてゐた、先生は滔々として懸河の辯を振ひ、脅迫的の言辭や、扨は約諾、憐憫、親切な言葉をいろ〳〵列べ立てたらしい、俺は何でも抵抗さへせずば縛を解いてやると言ふのだなと察したから、最も謙遜的態度を採つて左の手と兩方の眼を太陽の方に上げ、我が眞心よりの服從は何卒此の身振で賢察を仰ぐと言はぬばかりに操人形の眞似をした後、船を去る數時間前から何一つ喉へは通さぬので飢くて堪らず、鹿爪らしい初對面の儀式には無論相應しくないとは百も承知であつたが、何分腹の虫が可愛さに餓死しさうな苦を忍ぶことが出來ず、何か食物を與へよと云ふ意を示す爲めに自分の指を幾度も唇へ當てざるを得なかつた、それでもブルゴ――後に分つたのだが演說者の名である――は俺の手眞似の意味を

能く汲取つて呉れ、早速足場から降りて來て梯子を俺の身體へ掛けるやうにと命令した。

そこで百人餘りの人數が各自に食物を一杯容れた桶を持つては梯子を登つて俺の口へと投込んで呉れた、△全體此の食物は俺が半死半生の體で此國へ漂着した時、窃に王樣へ御注進した者があつて、王は早速臣下に命じて調理せしめ、既に此處迄持ち運んで來て置いたのだと後に聞いた、それは兎に角料理はなか〳〵振つたもので、いろ〳〵な肉も使つてあつた樣だけれど、舌の先許では確に何々とは知り難い、羊の肩や足や腰などの肉も鹽梅よく調理してあつたらしかつたが、何分雲雀の羽根よりも未た小さかつたので、其奴を二つ三つ位と小銃の彈丸位しかない麪包を三つ位一口に食べて仕舞つた、百人餘の連中は絶間なく桶を擔つて來ては口の中へ食物を投込んで呉れたが、それでも俺が別段飽いた樣な顏もせんので、身體の巨大のと食慾の烈しいとには今更ながら魂消てゐたやうだつた。

それから俺は飲物が欲しいと云ふ手眞似をして見せたが、今の食べ加減を見た連中は、到底生優い分量では俺を滿足さすことは出來まいと困つた樣子であつたが、それでも機敏な彼等は何處からか素敵もない大樽を持つて來て、俺の身體の上へ巧みに投げ上げ、其を手の所迄轉がして來て始めて蓋を開けた、元より一合五勺餘位しかないのだから、俺は只一口に飲み乾して仕舞つたが、味は宛然香氣の强い葡萄酒の樣で其よりか一層旨かつた、で、彼等は又二度目の樽を運んで來たから其も一口に飲み乾して、今一樽呉れと手眞似をして見たが、最早俺に呉れる分は生憎持合が無かつた。

俺が此の人間並の飲食も彼等が目には神變不思議な一大奇蹟とでも見ねたらしく、彼等一同は喜び勇んで最初の樣にヘキナ、デグルと口々に叫びながら、俺の胸の上で跳ぶやら踊るやらの大騷ぎであつた、すると胸の上からボラック、メポラと叫んで俺の身邊に蠕々してゐる群集に道を避けろと注意しておき、俺に以前の二つの大

樽を見事投げて見よと手眞似で指圖した、で、俺が其の二つの樽を一緒に投げて遣ると、此國で所謂大樽が二つ空を切つて飛んで行く壯觀を見て、彼等は一齊にヘキナ、デグルと叫んで拍手喝采した、實を云へば俺は其時身體の上を我が物顏こ[illegible]してゐる四五十人の者共を一捉みにして、地べたへ拂ひ落して遣らうと思い[illegible]無かつたが、考へて見れば此の人達だとて何も惡意があつてする事でもな[illegible]俺は自分の名譽に懸けて服從を誓つたのだから、此の惡戯のみは思ひ止ま[illegible]に尙ほ深く考へて見れば、彼等に慈悲の心があればこそ、莫大な入費を惜ま[illegible]にして呉れたのである、故に其の恩義に報ゆるだけの責任を感ぜねばならぬ、其[illegible]又俺の目から取るにも足らぬ一寸法師と見ゐる丈け、それ丈け彼等の目からは俺が山程にも見ねやう、其の山の俺が片手の自由になつてゐるのにも拘はらず、恐るゝ事なく平氣で身體中を馳せ廻る彼等の勇氣も買つてやらねばならぬ。

少時して俺が最早飲食を欲しないと見た時、國王のお使者が十二人の從者を引き

連れて徐々と進んで來て、俺の右の足から這ふやうに登つて顏の處迄やつて來、御璽の捺つた國書を俺の目へ入る程顏へ押付けた、そして凡そ十分間程何か饒舌つたが、凜乎として侵す可からざる顏に毅然たる決心の色を浮べて、話中幾度も前方を指した、何を指し示すのだか分らなんだが、此處から半哩許に首府があり、其の首府へ國王の裁可を經た決議に依つて俺を連れて行く意味だと後になつて漸つた、それで俺は二言三言話して見たが、無論意志の通じやう筈がない、いので自由の利く左手で右手を輕く打ち——手を動かしたもんだからお抵抗せられるので無いかと、少なからず膽を冷した樣であつた——それか體とを打つて縛を解いて呉れとの意味を示した、お使者は能く其の意味はられたが、俺の希望は容れる事が出來ぬと云はん許に頭を左右に振り、尙人として連れて行かねばならぬと云ふ意味を自分で自分の腕を握つて示した後、然し日々の食事は勿論、待遇も隨分手篤くして遣ると手眞似で知らせた、俺は囚人扱

ひが面白くないので再び繩を切つて遣らうかと思つたが、顏や手一面に刺つてゐる矢傷が劇く痛み出し、投槍も未だ其儘に形付けて無し、且つ如何に小なりとは云へ敵兵の數が追々增して來るのを見ては多少危惧の念が無いでもないので、彼等に俺の身體を好自由にしても苦しうないと手眞似で知らしてやつた、其を見てお使者は得意滿面の體で優容に引下つた、すると大勢の人達は異口同音にペプロム、セラムと叫びながら俺の左側の繩を弛めて呉れたから、右の方へも自由に振向く事が出來るやうになつた、それから彼等は非常に好い薰のする膏藥を持つて來て、俺の手と言はず顏と言はず一面に塗付けて呉れたら、不思議や名藥の効驗で左しもの矢傷の痛みが二三分間で拭つたやうに癒ねてしまつた、大いに滋養分に富んだ山海の珍味を腹十二分と迄は行かずとも、兎も角餓を忘れる迄御馳走になつた揚句に身内の痛みも無くなつたので、俺は魅られたやうに睡氣を催して來て矢も楯も堪らず、後から勸定して見ると炎天干しになつて八時間許又草の上で寢んだ事になるが、然しこ

れは強ち俺が寢坊といふ譯ではない、最前飲んだ大樽の酒には國王の命令で醫者が催眠劑を調合しておいたからである。

此國の王は學問の保護者として聲譽の高い人で、大に學術を鼓舞奬勵したものだから、人民は一般に數學の智識に富み、斯道に於ては既に堂に入つた人許であつた、此の篤學の王は木材其他を運搬するが爲めに輪の付いた機械を幾種も持つてゐられた、其に尙ほ國王は船材に富んだ森林中で長さ九尺もある軍艦を造り、三四百間も隔つた海上迄其を運搬した事がある、這麼侮り難い國柄であるから五百人の大工と機械師とが直ちに仕事に取掛つて、俺を運搬する爲め建國以來の大機械を造り初めた、其の機械は無論木の素構で高さは地上から三寸、長さは凡そ七尺で幅は四尺位、二十二箇の輪で動かす仕組なのである、此の巧妙な大機械は俺が上陸してから四時間以内に手早く造り上げたらしい、そして最前耳元で喧しい聲のしたのは、此の機械を曳いて來た時の叫聲であつたのだ。

彼等は此の大機械を俺が横になつてゐる側迄曳いて來て平行に据ゑた、然し第一に當惑したのは俺を何して車に積まうかの一事である、其には澤山な人夫が蟻のやうに寄集つて、俺の首や手や胴や足の圍圍を紐でぐる〳〵卷きにし、其の紐へは鉤で以て太い丈夫な繩を結び付け、其の繩を滑車の付いた一尺位な八十本の棒で九百人も掛つて引張り、三時間不足に俺を其車の上に投げ上げて緊と縛げて仕舞つた、斯う細に述べると俺が當時子細に觀察してゐた樣だが實は左うでない、殘らず後から聞いて知つたのだ、俺は酒に混ぜてあつた催眠劑の効驗が身體中に廻つて前後も知らぬ高鼾、悉皆荷積仕事が了る迄何にも白河夜船の體であつた、其から國王の厩に繫いであつた身の丈約四寸五分といふ駿馬千五百頭で、前に言つた半哩許離れた首府の方へと曳かれて行つた。

此の仰山な旅行の一行が動き出してから四時間許り經つた時、俺は不圖面白い出來事で眠を破られた、それは何か機械に故障が出來た爲め其を直すのに少時車を止

めた時、若い二三人の先生達が俺の寢顏は何なだかゞ見たい好奇心から、車へ攀ぢ上つて拔足差足俺の顏の所へやつて來た迄はよかつたが、其内の護衛士官らしい一人が鋭い手槍の先を俺の左の鼻の穴へ餘程深く入れ、藁で俺等が惡戲する樣に檪つたから堪らない、俺は思はず一つ大きな嚏をして目を覺ました、三人は不時の暴風落雷に度膽を抜かれて見付けられない樣に逃げて仕舞つた、俺も何故突然夢を破られたかは知らなんだが、三週間の後三人の惡戲を聞いて始めて知つた次第である。

其日一日曳いて行かれて程なく夜になつたら、五百人の精兵が俺の車を取圍んで若しや身動きでもしやうものなら、容赦なく弦を切つて放つ積で半分は弓矢を携ね、半分は盛んに炬火を振照らして警戒おさ〳〵怠りなかつた、翌朝は黎明の頃から又遲々と虫の匍匐ふ樣に進行を始め、正午頃には首府の門へ最早百間程といふ所まで來た、すると國王を始め夥多しい宮廷の人々等は山の樣な俺を見んが爲めに此處迄歩を運んで來た、けれど智慮に富んだ大官顯職の歴々方は、國王を俺の身體へ登

す樣な危險は敢てさせなかつた。

車の轍が止まつたのは全王國中で最大建築物と思はれる古殿堂の前であつた、ところが此の殿堂で數年前非道な殺人罪を犯した者があつたとかで、人民は最早此の殿堂の神聖は瀆されたと云つて諸種の裝飾は無論のこと、什器調度の類迄悉皆取去つて普通の用に使つてゐた、俺は其の宏大な建物に臥ることに定められたのだ、北に向いて大きな入口があり、其の高さは凡そ四尺で幅も二尺位はあつたから、身を屈めて這込めば入れぬ事はない、入口の両側には各地上六寸位の所に小さな窓があり、其の窓の左の方へ王宮の鍛冶屋が歐羅巴の婦人持ちの時計の鎖位しかない細い鎖を九十本も持つて來て、其を俺の左の足へ三十六個の海老錠で緊いで仕舞つた、此の殿堂の眞向ふに大道を隔てゝ凡そ二十尺許りの處に高さ五尺もあらうかと思はるゝ一つの塔があつた、此の塔の上に國王が數多の重立つた侍臣等を召連れて登り、俺を見張られる事が折々あるとは聞いたが、然し俺からは其らしい姿は一人

も見えなんだ。

俺がいよ〳〵首府に到着したと云ふ噂が弘まると、見物の爲めに市中から蟻のやうに集つた人は凡そ十萬人以上と思はれる、其の人達の内で番兵が聲を嗄らして制止するのも聞かず、梯子を傳はつて俺の身體へ登つた者も數回では確かに一萬人以上は慥だつたと信ずるけれど、國王は堅く俺の身體に登ることを禁ぜられ、若し禁を犯す者は死刑に處すと云ふ布告書を發布せられ、職工は如何な俺でも足の鎖は切れる氣遣ないと保証したので、身體に縛り付けてあつた繩は殘らず切り捨てゝ仕舞つた、それで俺は此の國へ漂着してから始めて起つて見たが、却つて何だか化者見たいな氣がして今迄に經驗のない厭な心持がした、然し俺がいよ〳〵歩き出した時には、此の人達の驚駭と怪訝は到底筆紙に述べることは出來ん、俺の左の足を繋いだ鎖の長さは一間位しかないのだから、半圓形を畫いて前後へ歩むのに過ぎなんだが、それでも入口の四寸位の高さの所に紮げてあつたから、鰕の樣に身を曲げて殿

堂内に入りさへすれば、充分身を伸ばして横になる事は出來た。

第二節

俺が起つて四邊を見廻した時程、美しい綺麗な景色は未だ見た事がないと斷言する、眼下に擴がる村々は宛然廣々とした庭園の樣で、田畑は大方四十尺平方に仕切られて澤山な花壇を撒き散らした樣だ、其の田畑の此處彼處を色彩つて森があり、森で一番高い樹も七尺以上はないらしい、左手の方に市が見えるが、其は丁度芝居の背景にある遠見の市の畫の樣だ。

其時國王も物見の塔から降りて、御寵愛の名馬に跨つて手綱捌も悠々と俺の方へ進んで來られた、馬は能く訓れてはゐたのだか大山の搖ぐ樣な人間は未だ見た事はないので、怖氣をふるつて後足で棒立ちになつた、然し運好く馬術に堪能な王子が馳せ寄つて鞍を支へ、數多の從者が來て銜を把つたので王は無事に馬から下りる事

が出來た。

王は頻りに感嘆の辭を放つて俺の身邊を觀察してゐられたが、それでも始終俺の手の屆く範圍內へは近寄られなかつた、そして既に用意して連れて來られた料理人へ俺に食物と飲物とを與へよと命ぜられると、料理人達は直ちに輪のある車の樣な物で運んで俺の手の屆く所へ据ゑたから、俺は其の車さら持ち上げて一口に食べ盡して仕舞つた、そして肉は二十車飲物は十車あつたが、一車の肉は漸と二口か三口で、一車の飲物は十個の土製の瓶に容れてあつたが、其の量は一呑みしかなかつた、澤山な女官を召連れた王妃や、若い王子王女達は少し離れた所に椅子を置かして見物してゐられたが、國王の馬が暴れた時に皆急いで其の側に駈け寄られた。

國王の身長は侍臣等よりは俺の爪の幅位高い、然しそれ丈け高いが爲めに拜謁者に畏敬の念を起させるは何丈か知れぬ、容貌は引締つた唇と、弓形に曲つた鼻柱と、橄欖色の皮膚の色と、毅然たる姿勢と、莊嚴なる態度とで少なからず威風堂々たら

しめた、年齡は二十八才九ヶ月で血氣に逸る青春期は過ぎてゐる、數多の景福と戰勝との間に國政を司ること殆んど七年と謂ふ英主であつた、都合の好い事には俺は其時横に臥てゐたから國王の顏とは平行になつて、其の距離とても一間半許りしか無かつたのみならず、其後幾度も國王を掌に載せた事もあるのだから、此の叙述に誤の無いのは確な事實である、服裝は質素で亞細亞風と歐羅巴風との流行を搗混ぜた樣だ、頭には寶石と羽根とで飾つた黃金の王冠を戴き、手には若し俺が縛を解かうとしたなら、護身の爲めとて拔力を提げてゐられる、其の劍の長さは三寸位で櫺も鞘も金剛石を鏤めた黃金作である、聲は鋭いが朗で分明に發音が出來、俺が起つてゐても明瞭に聞き取れる、數多の女官や宮臣達が綺羅を飾つて集つて來たが、宛然金絲や銀絲で模樣を縫箔した女袴を地へ敢いた樣に見ゐた、國王が俺に何か話し掛けられたので俺も其に答へたが、然し各自に一言半句も分つてはゐない、數人の僧侶と法官――其の服裝から左う推測した――とが俺と對話するやうに命せ

られて進んで來たから、俺は獨逸語や佛蘭西語や西班牙語や伊太利語や、乃至は無茶苦茶な混成語まで少しでも知つてゐる丈けを列べたてゝ饒舌つて見たが、相變らず何の効果もなかつた、二時間許で王宮の人々は皆歸つて仕舞ひ、俺は強い番兵を護衛に置かれた、其の番兵達は群衆が俺の身邊に邪が非でも近づかうとするけれども寄せ付けられぬ立腹紛れに、亂暴を働かうとするのを防ぐ爲めに置かれたのである、ところが群衆の中の或者が番兵の目を竊んで、俺が戸に凭れて地面に座つてゐた時無法にも矢を放つた、其の矢は今少しで左の目に的中る所であつたが幸ひにも外れて仕舞つた、番兵の隊長陸軍大佐は直ちに六人の巨魁を捕へ、其者共に俺の手から相當の所刑を受けさせるのが機宜を得た所置だと考へたので、數人の兵士をして槍の柄で其者共を俺の手の屆く所まで推進ました、俺は早速六人を一緒に撮み上げ、五人を上衣の衣嚢に入れて殘る一人を生なから食べる樣子を見せた、是を見た憐れな一寸法師連は驚いて喚き出し、大佐其他の人々も眞青になつて慄へ上つた、

殊に俺が小力を取出した時の彼等が悲愁と恐怖とはなかつた、然し俺が直に優しい顏をして口元迄持つて行つた一人を靜かに地上に立たして逃がしてやり、他の五人も一人づゝ衣嚢から出して逃してやつたら、今迄の恐怖と悲愁は拭つた樣に消ねたのみならず、兵士も人民も皆俺の寛仁大度を心から感謝し、其が爲め王室へも俺の身爲になる樣に執成して呉れた。

夜になつてから俺は多少窮屈な思ひをして殿堂に這込み、國王が俺の寢床を拵へてくれる二週間許りは毎夜床の上に轉寢をした、其の寢床と謂ふのは普通の大さの蒲團を六百枚車で殿堂に運び込み、百五十枚づゝを一枚に縫ひ合せて其を四枚重ねて呉れたのだが、それでも此堂の滑かな床石と餘り違ひはなかつた、それから又同じ割合で敷布や毛布や上被迄備へて呉れたが、此等は今迄に辛酸苦勞を嘗めて來た者には充分我慢の出來る品であつた。

俺が到着したと云ふ噂が首府のみでなく國中の隅々に迄知れ渡ると、出無精な金

滿家も懶惰者も、乃至は不具者迄が魂消る程澤山俺を見物する爲めに首府へ上つて來て、田舍がまるで空虛になる程であつた、若し國王が布告や命令を續發して農耕や家政の等閑にすべからざるを諭されなんだら、國家の蒙る不利益は非常なもので あつた、國王は嚴命を下して一度俺を見物した者は直ちに歸國せざる可からず、又王室よりの特許證なくして俺の居宅より二十五間内に立入る可からずと掟した、此の特許證に就ては秘書官連が大分莫大な手數料を掠て懷中を暖めたとの事だ。

此間に國王は屢々御前會議を開いて俺を如何に處置すべきかに就いて頭を惱されたさうだ、其後俺が特別眤懇に交はつた宮中の内聞沙汰迄能く知つてゐる一高官に聞くと、朝廷でも俺の處置には隨分と苦しんださうだ、會議に列した連中は俺が今にも鎖を解いて暴れはせんかと恐れ、又俺の日々の飲食物が非常に嵩さむので早晩飢饉を惹起しはせんかと心配した、或時は俺を餓死させ樣か、それとも一層荒療治に手や顏に毒矢を射て殺さうかといふ議も出たそうだが、若し俺の大きな死體から

放つ惡臭が忽ち首府に惡疫を發生せしめ、隨つて全王國に蔓延するが如き事あつては由々しき一大事と考へ直して是はお流れになつたさうだ、這麼會議の眞最中へ數人の士官が行つて、前に述べた俺が六人の罪人を赦してやつた寛仁大度の程を詳しく上申したもんだから、國王始め列座の顯官等も其の行爲には深く感動して、俺の爲めに特に首府を取卷く五百間以内の各村は、毎朝六頭の牛と四十頭の羊と、並びに之れに相應せる麪包葡萄酒及び其他の飲料を納むべし、但し其に相當する代價は國王のお手許金より支拂はるべしと命令迄出して呉れた、國王は專ら王室の財産のみを以て生活せられ、非常な場合でなければ人民より財物を取立てられる樣な事はない、而して人民には戰時にのみ各自の費用を以て從軍せなければならぬ義務がある。

此の命令の發布と共に六百人の者が同時に俺の附添人とせられた、彼等は皆お手許金より充分な給料の支拂を受け、俺の家の兩側へ頗る便利な天幕を張つて貰つた、

それから又三百人の裁縫師は俺の衣服を此の國の流行を追ふて仕立てよと命ぜられ王に進講する六人の大學者には俺に國語を敎授する事を委囑せられ、最後に國王や貴族や近衛隊の乘馬を屢々俺の眼前て練習させた、之れは先度に懲りて馬を俺に馴らす爲めなのだ。

三週間の後には俺も大部國語の研究に進歩の跡が見ゐて來た、其間國王は俺を禮遇して屢々親臨せられ、敎師を助けて俺に國語を敎へるのを樂みとせられた、俺等は最早幾分か會話が出來る樣になつて、最初に俺が習つた言葉は何辛自分の縛を解いて自由の身にして下さいと願ふ一句で、俺は毎日膝頭を叩いて練習した、會話の度毎に此言葉が出ると王は何時も之れに答へて、其は時節を待つて貰はねばならぬのみならず、會議を經なければ朕とても如何する事も出來ん、尙ほお前は第一にルモス、ケルシン、ペッソ、デスマル、ロン、エムポソ、即ち國王と人民とに親善なるを誓はねばならぬと口癖の樣に言はれた、それは兎に角國王は俺を益々懇篤と親切とを

以て厚遇して呉れ、忍耐と愼重なる行爲とを以て王と其の人民との同情を得なければならぬと忠告して呉れられた、國王は又俺が數種の武器を持つてゐる樣ぢやが、若し推測が事實とすれば其の武器も山のやうな身體に相應しい大きなのに相違ない、左すれば危險至極だから、後刻俺の身體を搜索さす爲めに相當な役人を二三遣はすが、決して惡るく思つて呉れるなと云はれたから、俺は何卒御安心下されたい、何時でも上衣を脫ぎ衣囊を裡反して見せる積りだからと、半分は言葉で半分は手眞似で答へた、すると王は滿足せられて、其の身體搜索には國法に依つて二人の役人を以てするが、俺の承諾と共に相應の助力をして貰はねばぬ、又其の役人を俺の手に任すのだから、出來る丈け勞はつて正義と寬仁とを以て扱つて呉れるであらうと思ふ、又發見物は其の物品の何たるに關せず、俺が歸國する際に返すか或ひは俺が指定した相當の代價に換へてやると言はれた、王が歸られて程なく二人の役人が來たから、俺は早直撮み上げて最初に上衣の衣囊に入れ、次ぎに二つの小さな衣囊と

秘密の衣嚢の外は凡ての衣嚢へ入れてやつた、秘密の衣嚢には俺の他誰れにも用のない小さな必要品が二三種入れてあつたのだけれど、何故か彼等に捜させる氣には成れなかつた、小さな衣嚢の一方には銀側時計が入れてあり、他の一つには僅かな金貨が財布とも入れてあつた、役人達は筆と墨と紙とを出して、發見物の一々に就いて勿體らしく正確な目錄を作つた、そしてお役目が悉皆濟んだ時、此の人達は一伍十什を國王に奏上するのだから、窃と床の上へ下ろして呉れと俺に賴んだ。

此目錄が國王の面前で讀み上げられた時、國王は大層優しい言葉で、俺に一々實物に就いて詳細に説明して呉れと求められた、最初に俺が佩いてゐた偃月形の劍に就いて尋ねられたから、俺は拔刀では失禮でもあり又恐怖の念を惹起さしてはならぬと思つたから、鞘ぐるみ腰から外して手に持つたんだけれど、それでも國王は引卒してゐた精鋭なる三千の軍隊に、一令の下に直ぐにも弦を放つことの出來る樣に弓矢を持たせて俺を遠卷に圍ませた、然し俺は全然國王にのみ眼を注いでゐたから

身邊に起つた出來事は何にも氣がつかなかつた、やがて國王は軍隊の配置が了つたのを見た時、俺に劍を拔いて見せて呉れと望まれた、劍は難船以來海水に浸されて多少は錆びてゐたけれど、それでも尙ほ大部分は明晃々と輝いてゐた、夫で俺は命令の儘に其の劍の鞘を拂つたら、全軍隊は恐怖とも驚愕ともつかぬ叫びを一齊に上げた、それは俺が劍を前後に振り搖かしたら、太陽の光りに閃々と輝いて、其の反射の光が烈しく人々の目を眩ましたからである、けれど國王一人は元來豪俠豁達な性質であつたから、俺が豫期してゐた程には驚かれず、自若として鞘に收めよと命せられたので、俺は其を鞘に藏ふと同時に、俺の足頸の繋げてある鎖から約六尺許の處へ、出來得る丈け音のせん樣に靜かに地上に置いた、次に國王が説明を求められたのは中空の鐵柱即ち拳銃であつた、俺は其を取出して請はるゝ儘に出來る丈け詳細に用法を説明した、そして火藥の力にのみ依つて發射することの出來得るものだから、用意周到な船乘りは其の濕潤を防ぐ爲めに特別の注意を拂ふものだ

と話したが、幸ひ俺の革囊は口が能く緊つてゐたから海水に濕つてゐなかつたので、豫め驚かない樣にと吳々も注意して おいて、扨試みにと火藥を籠めて發射して見たところが、其の驚駭は明晃々たる劍の光に目を眩まされた時に幾層倍して、死んだ樣になつてばた〳〵と象棋倒れに百人許りなつた、流石に國王は半死半生で倒れては仕舞はれなかつたが、それでも暫くは呆然として喪神せられた、俺は國王が正氣になつた時、劍を取扱つたと同じ樣に二挺の拳銃を引渡し、それから火藥と彈丸とを入れた革囊をも渡した、そして火藥は火を呼び易い物で、如何な罌粟粒程の火星があつても直ぐと發火し、宮廷を宙に吹き飛ばす位の事は何でもないのだから、忘れても火氣に近づけてはならぬと注意を加へた、俺は又同樣に懷中時計も引渡したが、其には國王も餘程好奇の眼を注がれ、やがて護衛の兵士中から圖拔けて身長の高い二人を撰抜せられ、英國で荷馬車の人夫が麥酒樽でも運ぶ時の樣に、鐶へ棒を通して擔つて行けと命令せられた、國王は時計が絶間なしにカチ〳〵と大きな音

を立てるのみでなく、小針がぐる〳〵廻轉するのを見て奇異の眼を睜られた、――此國の人々は前にも述べた如く數學の頭腦が著しく發達してゐるので、我々よりは總ての事物を精確に觀察する事が出來る――餘りの不思議に國王は側に供奉してゐた學者連に各自の意見を求められたが、俺が今事新らしく述べる迄もなく讀者が先刻御察しの通り、其答は區々で一つも確かなのは無かつた、尤も蚊の鳴く樣な此人達の聲が、俺の耳には充分聞き取る事の出來兼ねたのも一つの原因だ、俺はそれから銀貨と銅貨、九個の大きな金貨と數個の小金貨とを入れた財布、偖は小刀に剃刀、櫛に嗅烟草盒、手巾に日記帳と順々に引渡した、そしたら劍と拳銃と火藥を入れる革囊とは、宮廷の倉庫へ荷車で運搬せられたが、危險でないと認められた其他の物は悉く返して吳れた。

一寸此處で云つて置が、俺が前に述べた搜索を欲しなかつた秘密の衣囊の中には一對の眼鏡――此れは俺が視力が鈍いので折々用ふるのだ――と小形の懷中望遠鏡

と、其他に國王には何の關係もない二三の必要品が入つてゐたのだが、俺は其をも搜索させねばならぬと迄義務を感じなかつた、故に若し人々が其を無理に俺の所有から奪はうとしたなら、其の人々は屹度俺の爲めに殺されるか傷を受けるかしてゐたであらうと思ふ。

第三節

俺が温和く且つ行爲態度を可愼やかにして居たものだから、國王を始め宮廷の人々は言ふ迄もなく、偖は軍隊及び一般の人民からも思ひ設けぬ多大の人望を得て、近い内には自由の身となれるといふ確かな自信を抱くことが出來る樣になつた、俺は一日も早く此の有難い恩典に預かりたい許りに、隨分出來る丈けの辛抱をして色々と盡した、怜悧な丈けに此國の人々は俺が何等の危害をも蒙らせぬと早く悟つて、追々平氣で傍に近寄つて親しむ樣になつた、俺も早く馴らさうと思ふから、時々

横に臥轉んで五六人一緒に掌へ載せてやり、面白可笑しく踊らせたり舞はしたりしたもんだから、遂には子供や小娘迄が大勢やつて來て、俺の髪の中で隱れん坊をして遊ぶ樣になつた、其頃は最早俺の語學も長足の進歩をして、話しても話されても分らぬ事は無い程になつた、或日國王は俺の爲めに其國特有ないろ〳〵の觀せ物を見せて呉れられたが、其の巧妙な事と綺麗な事とに於ては、俺も隨分旅から旅へと諸國の土を踏んで來た者だが、未だこれに匹敵する程のは見た事が無いのである、中でも一番面白く見物したのは綱渡の一藝で、纖い二尺程の白糸を地上から一尺五寸位の高さに引張つておき、其上で自由自在に踊るのであつた。

軍隊の馬も宮廷の厩に繫いである馬も、毎日俺の前へ曳き出されて調練をされるので、最早少しの怖氣も無く俺の足の極近く迄來る樣になつた、其で俺が手を地上に横たへてやると、騎兵は面白がつて障碍物飛越の演習をやる、宮廷の狩獵官の一人は大きな駿馬に鞍をあてゝ、俺の靴を穿いた儘の足を飛び越ねたが、尤も此人が

一番の馬術達者であつた。

或日俺は奇拔な仕方で國王の非常な御感に預かる事を得た、それは外でもない、國王に二尺位の長さで普通の杭程の太さの木を十五六持つて來て下さるまいかと願つたら、國王は早速其の旨を官林長に命ぜられたので、翌日六人の樵夫は八頭牽きの荷車數臺に其の杭を運んで來て呉れたから、俺は其の杭の中から九本を二尺五寸位の正方形に地上に打ち、今度は四本の杭を二尺位の高さに、先きに打つた正方形の杭の四方に平行に縛り付けた、そして其の九本の杭に手巾を結ひ付けて太鼓の皮の樣に張り締めた、平行に縛り付けた四本の杭は手巾より五寸程高いので、四方へ岩疊な柵を繞らしたと同じた、此の作業が全く出來上つた時、俺は此の平地の練兵場で演習をさせる爲、國王に騎馬に熟練した兵士二十四人を擇り拔いて手巾の上に載せる樣にも願つた、國王は早速此の提案を嘉納して呉れられたから、俺は既に武裝して馬に跨つてゐる士官や兵士を一人づゝ撮み上げて順々に此の上に載

せた、やがて程なく用意萬般整ふと彼等は十二人づゝ二手に分れ、火花の出る樣な激しい戰爭の眞似を懸命に始めた、先を圓くした矢を盛んに射る者もある、軍刀の鞘を拂つて振舞す者もある、逃げ出したと思へば追掛ける、勇ましく攻勢に出たと見てゐると程なく退却する、其の千變萬化の面白いのみならず、作戰用兵に一々規矩があつて一絲亂れざる見事な有樣は、流石の俺も今迄に見た事の無い程であつた、這麼勇ましい演習を整々掌々とやられても、手巾より五寸程高く縛り付けた四本の杭があるので、兵士も馬も其處から墜落の憂目を見る心配は少しも無い、國王も大層御意に適つたと見ゐ、此の手巾原の演習は數日間繰り返させて天覽になつたのみならず、一度などは御自身平原の眞唯中へ英姿颯々として立ち上られ、御佩刀を拔いて玉音朗かに全軍を指揮せられた程であつた、王妃迄が演習中は毎日王步を運ばれ、一間許り離れて全平原を一目に收め得らるゝ地點に御椅子を据ゑさせられ、熱心に御觀覽になつた迄はよかつたが、其の椅子を俺に始終持たせて居られた

には聯か閉口仕つた。這麼具合に此の行擧も格別怪我も過ちもなく目出度終結を告げたが、只一度大尉の乘つてゐた暴れ馬が踣めつて、張り締めてある平原を蹄で爬いた爲め、手巾に穴が明いて馬は足を滑らし、人馬諸共危ふく顚覆する所であつたが、俺は直に手を差出して雙方を受け留めた、それから片手で今出來た地獄穴を塞ぎながら、片手で全軍隊を載せた時と同じ樣に一人づゝ窃と下ろした、踣めつた馬は少々左肩を筋違ひしたけれど、大尉には卯の毛で突いた程の怪我も無かつた、俺は出來る丈け綿密に手巾の破れ目を繕つて見たけれど、斯程迄に軍隊が勇敢剛毅では、是から先の危險も案じられるので、此の擧行だけは二度と繰り返さぬ事とした。

以上は俺が自由の身となれた二三日前の出來事なのだ、幾日かの演習がすんで人馬諸共休息してゐた所へ、一人の急使が喘ぎ〳〵駈けつけて國王に奏上するには、臣下の者共が四五名許りで、俺が始めて捕虜となつた近邊を騎馬で散歩してゐた所、

世にも奇怪な形をして、圓く擴がつた緣邊の面積は國王の寢室位は充分にある、何とも形容の出來ん眞黑な大怪物が地上に横たわつてゐるのを見付けた、彼等は恐ろしい巨大な活物だと、初めは身慄ひして齒の根も合はなんだが、何時迄も動かずに草の上へ轉がつてゐるので、彼等も少し安心して躍る樣な動悸も少し靜まつた、で、二三人の者が數回其の眞黑な怪物の周圍を今一應改めてからいよ〳〵危險で無いと確められたので、各自に肩に乘つて登つて見ると、頂上は平垣々たる野原の樣であつたが、周を歩いて見て其の中が恐ろしい大きな空虛であることが知れた、臣下等の推測にして誤りなくんば、是れは多分人山――二人の役人が俺の身體搜索をして發見物の目錄を作つた時から俺の綽名となつた――の所持品であらうと思ふが、若し陛下の御意とあらば、單に五頭の馬で運搬することが出來るとの注進であつた、俺は之れを聞いて直ちに使者の言葉が何物を意味するかゝ分つたから、心密に此の報知を耳にしたのを喜んだ、難船の厄に遇つてから上陸した迄は、俺も極度の疲

勞と辛酸との爲めに、頭が酷く錯亂してゐて前後夢中であつたと見ゐるが、帽子は確に端艇を下ろして生命からゞ〳〵逃げ出した時も頭へ糸で結ひ付けてあつた、それから懸命に泳いでゐた時も頭に未だあつたと記憶する、偖は此國へ上陸した嬉しさに、張り詰めてゐた氣が一時に弛んで熟睡した迄に落したに相違ない、使者の口上に無い所を見ると絲は何かの機勢に切れたのであらう、俺は海上で落したと許り思つてゐた、で、國王に帽子なる物の品質と使用法とを詳細に說明して、出來得る丈け早く運搬して呉れる樣に命令して貰ひたいと悃願した、翌日數多の人夫か其を運搬して呉れたが、格好は少しく崩れてゐた、人夫等は緣邊から一寸五分位の處へ二つ孔を穿け、其の孔へ二箇の鈎を引懸け、其の鈎へ長い綱を付けて馬具へ繫げ、半哩許りを引摺つて來たのであるけれど、此國の地面は非常に水平で滑らかであるが爲めに、思つた程には毀損んでゐなかつた。

此事があつてから二日經つて、國王は何か手輕に出來て清楚した面白い慰みをし

たいと云ふ思召から、首府の內外に駐在してゐた軍隊の一部に出兵準備の命令を下された、そして俺に出來得る丈け充分に兩足を踏張つて立つてゐて呉れと願はれた、國王は俺の股の下を軍隊に行進せしむる企圖であつたのだ、それで陸軍大將——此人は老練な指令官で、俺を大層最負にして呉れた人——に密集隊を編成して徐々に進軍せしめられた、步兵は二十四人騎兵は十六騎の橫列を作り、太鼓を敲き軍旗を差上げ、槍を小脇に搔込みながら堂々として進み、合計三千の步兵と一千の騎兵とは俺の股の下で立派に調練をしてのけた。

俺は自由を得んが爲めに種々手を盡して、幾通かの奏上書も歎願書も國王のお手許に差出したので、國王も遂に此事を內閣會議に附し、次で議會に提出して呉れられた、議會ではスキレシュ・ボルゴラム——此人には何の怒りも賣つた記憶はないが好んで俺の敵となつた——を除くの他は一人の反對議員も無く、滿堂一致を以て可決したので、國王も喜んで裁可せられた、此のボルゴラムと呼ぶ人は、ガルベット即

ち海軍大將で國王の信任も厚く、大層國務にも精通して居り、此事件に對しては意地惡く苦々しい面貌をしてゐたが、遂には輿論の歸する所之れを聽許することゝなつた、然し俺を自由の身とするに就いて、俺に宣誓せしめる條件と條文とは自分で起草すると我を張つた、やがて條文が出來上つた時、ボルゴラムは二人の秘書官と數多の大官等を引連れて自から持つて來て、俺に讀み聞かした後其が遵守を誓ふべしと嚴かに命じた、其の宣誓の法は最初俺の國の慣例に據つて誓ひ、次ぎに此國の慣例に據つて誓ふのであつた、ところで此國の宣誓の式といふのが頗る面白い、先づ右足を左手で持ち上げ、右手の中指を頭の嶺邊に載せ、其の拇指を右の耳の端に觸れしめるのである、讀者は定めし此國人民に特有なる奇妙な文體と言表の方法及び俺が如何なる條件の許に、自由の身となつたかを知りたい好奇心があると思ふから、其の全文を一語々々成る可く正確に飜譯して見やう。

リ、ブート國の權威ある大皇帝ゴルバストー、モマレン、エブラメ、ガルディロ、

シェフォン、ムリー、ギュー、世界を一喜一憂せしめ、領土を有する五チブラストラグス――周圍約二十哩――地球の際涯に達する諸々の國王中の大國王、總ての人類の最長者。其足は地軸を拉ぎ、其頭は日輪を擘く、一度顋を動かせば地上の諸王膝を屈して叩頭低身す、春の如く快暢、夏の如く愉悅、秋の如く豊饒、冬の如く嚴酷、此の至尊至高の大皇帝は、近頃我が神聖なる事天上の如き版圖内に漂着せる『人山』に對し、次の如き條文を通告す、宜しく嚴格なる宣誓をなして逐條遵守す可きものなり。

第一條、『人山』は國王の御璽ある許可證なくして此の領域外に退去するを許さず。

第二條、『人山』は政府の明示せる承認なくして首府に入るを許さず。

首府の住民は『人山』の入府する二時間以前に之を豫告せらる可きを以て、必ず屋内に之を避く可し。

第三條、『人山』の通行す可き道路は公道に限る、牧場田圃を通行し、又は其上に横臥する事を許さず。

第四條、前條の道路を通行する時にありても、我が親愛なる人民、及び彼等の車馬を踏み付けざる樣極度の注意を拂ふべし、尙ほ又我が人民の同意を得ずして彼等を掌上に載する事を許さず。

第五條、政府若し最大至急の使節を派するの必要ある際は、『人山』は其の使節及び馬車を自己の衣嚢内に容れて運搬するの義務あるものとす、而して其の義務は各月一回六日間と規定す、尙ほ其の使節にして歸廷の必要ある際は、宜しく又之れを安全に國王の前へ持ち來るべし。

第六條、『人山』は我國の大敵ブレフスク島に對して我が國王と同盟を締結せざる可からず、特に目下我國を侵略せんとして準備中なる同島の艦隊に對しては、極力其の全滅を謀るべし。

第七條、『人山』は閑暇ある毎に、全國の主なる公園の墻壁及び其他宮廷の建築物を修理する際、大石を運搬する等總て我國工夫を輔佐助力すべし。

第八條、『人山』は二ケ月以内に、自己の歩調より打算して海岸線の里程を査定し、且つ領土内を精確に測量して報告すべし。

終りに臨んで、前掲各條を嚴格なる宣誓に隨つて遵守するに於ては、國王は自己の自由意志により、一千七百二十四人分に相當する飲食物を日々供給し、尙ほ其の他の恩典に預からしむる事あるべし。

聖代の第九十一月十二日

ベルファボラック王廷に於て

俺は早速非常な喜悅と滿足とを以て、各箇條を遵守することを宣誓して署名した、然し上述の箇條中の二三は、俺が期待して喜んでゐた程名譽なものでもなかつた、其の不名譽な條文は悉く海軍大將スキレシュ・ボルゴラムが意地惡く附け加へたの

だ、それは兎に角、これで俺は直ちに足の鎖を解かれて自由の身と成る事が出來た、國王は御自身一箇人の資格で盛んな儀式を擧げられ、俺の爲めに喜んで祝つて下さつた、俺は餘りの嬉しさに國王の足下に身を平伏して心からの謝意を表した、すると國王は其には及ばぬから起つて呉れと仰せあり、種々身に餘る優渥なるお言葉――それは虚榮だなどと非難されるのも厭だから此處では抜にするが――あつた後、俺に將來は有爲な國民の一人となつて、今迄に與へ又將來與ふべき好意に背かない樣にして呉れとのお言葉があつた。

讀者は前掲條文の終りに、國王は小人國人一千七百二十四人分に相當する飲食物を日々俺に與へるといふ文字のあるのを御記憶でせう、其後暫らくしてから宮廷内の一友人に遇ひ、如何して一千七百二十四人分と云ふ一定の數量を定めたのかと尋ねた所、其の友人なるものゝ答へに、宮廷の數學者が測量機を以て他の身長を測つた所、其の比例は此國の人々の一に對する十二の高さである、そして數學上の

諸法則に依り、一なる此國の人々の體軀を以て、十二なる俺の體軀に等しい空間を充さんとするには、是非とも千七百二十四人の此國人を要する、同理由によつて其の飲食物も同じ比を要する考へであつたとの事である、是に依つても國王が思慮綿密で精確なる經濟的頭腦ある英主であると同時に、其人民も驚く可き發明の才ある事も讀者は想像し得らるゝであらう。

第四節

自由な身になつてから俺が第一の請願は首府ミレンドー見物であつた、國王は容易くお聽許下さつたが、然し住民家屋に損害を加へない樣に、深甚な注意を拂つて呉れと呉々のお言葉であつた、そして府民は兼ねて前の條文にあつた如く、俺が首府へ行くといふ事は豫め廻はされた布告で承知してゐる、首府の周圍は堅固な墻壁を以て取卷いてある、其の墻壁の高さ二尺五寸、幅は少なくとも一尺弱はあつたか

ら、自由に其上を馬や馬車に乘つて歩く事が[illegible]、又其の墻壁上には一丈毎に岩
疊な塔が建つてゐた、俺は西の大木戸を一跨ぎにして府中に入り、二筋の一等道路
を出來得る丈け靜かに横向きになつて歩いた、一寸[illegible]しかしたが、上衣の裾で屋根
や軒を掃き飛ばしてはならぬと思つたので、俺は當日[illegible]しか着てゐなかつ
た、で、若し街衢に殘つて彷徨いてる者があつて、其の者でも[illegible]はならぬ
と思つたから、頗る周到な注意を拂つて歩みを運んだ、屋内に避けねばならぬと
ふ宮廷からの命令は嚴重であつたのだが、それでも物見臺や屋根の上は、見物人
菓子の碎片に集つた蟻の樣に眞黑になつてゐて、俺の旅行中にも未だ是程澤山な人
の塊は見たことがない位であつた。市街は精確なる正方形で、四方の墻壁は各々五
百尺位である、中央に幅五尺の大道路が二筋直角に交叉して、全市を四區に仕切つ
てゐる、小路や路地は其の幅一尺三寸乃至一尺八寸位に過ぎぬので、俺には踏込め
ないので只通りながら斜視にして過ぎた、人口は五十萬を容易に生息せしむる事が

出來る、家屋の構造は三階乃至五階で、商店も市場も能く整つてゐる。
王宮は兩大道路の交叉點にある、周圍には高さ二尺の塀を繞らし、其の塀と建物
との間には二十尺の空地がある、俺は前以て國王の許可を得てゐるので此の塀を一
跨にして内へ入り、空地が比較的廣かつたので容易に王宮全體を見下す事が出來た、
内宮を離れた外宮は敷地四十尺平方で、第一第二と他の二宮殿を包含してゐる、内
宮には國王のお居間があるので是非とも拜見したかつたが、其の目的を果たすには
極めて困難な事情があつた、他ではないが内宮へ達するには數多の宮殿を越さねば
ならぬ、然るに各宮殿へ通ずる門は高さ一尺八寸幅七寸位で、又外宮の建物は内輪
に見積つても高さ五尺位はある、四方の壁は巧みに砍つた石材で堅固に疊み上げて
四寸位な厚さはあるけれど、其の建物に些の破損を蒙らさずに跨ぎ越すのは不可能
な事であるからだ、國王も御自分の宮殿の宏莊華麗な有樣を俺に見せるのを樂しみ
にして居られたが、如上の事情があつたので如何とも仕樣がない、然し國王と俺との

見せたい見たいの願望はそれかち三日の後に叶つた、俺は其の三日間に首府から五十間許り離れた宮廷の遊苑地で、最も大きな樹を四五本小刀で伐倒し、俺が乘つても拉げん樣な高さ三尺位の踏臺を二個拵らへた、そして府民には俺が入府する旨の布告を再び出して貰ひ、手に其の踏臺を二個携ゐて前日の如く墻壁を跨ぎ越し、市街を通ほり抜けて宮殿へと赴むいた、それで外宮の側に來た時一つの踏臺を手に持つた儘他の踏臺に上り、其の手に持つてゐた方の踏臺を外宮の屋根を越さして、第一宮殿と第二宮殿との間にある八尺程の廣さの空地へ靜かに置いた、準備萬端整つたので、俺は巧みに一つの踏臺から他の踏臺へと足を移し、さしもの建物に些の破損を蒙らさずに跨ぎ越す事が出來たから、初めの踏臺は鈎の付いた長い棒で引き寄せた、此くの如き經營慘憺の策を施して辛くも内宮へ着いた俺は、徐々と横に臥て開け放つてあつた二階の窓へ顔をあて、隅から隅まで拜觀するの榮を得たが、其の莊麗華麗な事は赫灼として眼を射られる樣で、他に比較すべき結構な物を想像す

るに苦しむ程であつた、王妃や王子達は各自の部屋々々に澤山な小姓や腰元を侍らせて居られ、殊に王妃の如きは大層なお喜びで俺の顔を見て微笑なされ、窓からお手をお出しになつて接吻をお許し下さつた程であつた。

首府見物の話は是位で切上げる事として、俺が自由の身になつてから二週間許り經つた或朝のことである、秘書官長レルドレザルが何か私用を帶び、唯一僕のみを俱して俺の家を訪れ、少し離れた所へ馬車を置かして、唯一時間許り對談しては呉れまいかと申込んだ、俺は彼の地位なり役目なりに對し、二つには俺の自由解放事件に對しても、他の人々と同じく彼が一方ならざる厚情を持つてゐて呉れたのを知つてゐるから、快く承知の旨を答へてやつた、で、俺は耳の傍で話の出來る樣に横に臥てゐやうかと言つたが、彼は對話中掌に載せてゐて呉れた方が都合が好いと答へたので、注文通り掌へ彼を撮み上げた、彼は先づ俺が自由の身になつた事を祝し、其の事件に就いては彼自身も多少は盡力したが、然し宮廷が今日の如き事

情の下に俺に期待する事がなかつたら、斯程迄に早くは自由は得られなかつたであらうと前提をおいて、偖話した一伍一什は次の如しだ。

『我國目下の狀態は、外人なる貴下の目からは至極無事泰平の樣に見えるでせうが、實は内に激しい黨派の爭ひあり、外に此國を今にも侵略せんとする大敵があつて、内憂外患交も至るの有樣で御座ります、偖唯今申上げた國内の黨爭は七十ケ月も以前から激烈を極めて居り、一をトラメックサン派と呼び、他をスラメックサン派と申します、一は靴の踵を高くし、他は同じく踵を低くして其の何れの黨派に屬するかを明かにしてゐます、高踵黨は昔の憲法を尊重するのですが、政府の政治は凡て低踵黨の政見を採る事に決めてありますから、勅選の官吏は總て低踵黨なので御座ります、で、大きな貴下にはお分りにもなりますまいが、陛下御自身のお靴の踵は、宮廷内の誰よりも一ヅルール――一ヅルールは一寸の十四分の一程に相當す――程低いので御座ります、今や兩派の内訌軋轢は其の極に達しま

して、黨派を異にする者が食卓を同じうしまして飲食するやうな事は夢にも無いので御座ります、此の亂麻の如き國内の騷擾に、少しも心を安んずる暇も御座りませぬのに、ブレフスク島からは今にも大擧して侵略に來さうなのです、此のブレフスク島と申しますのは、大いさも强さも殆んど此の國と伯仲の程度にある、恐るべき一强國の名で御座ります、我國歷代の大史家が書き遺した過去九千ケ月の歷史の頁には、我リ、ブート國とブレフスク國との二大强國の名が散見し得らるゝのみで、貴下が常に貴下の樣な山の如き巨人の住んでゐる國が此世界に未だ在るとの仰せですが、典據とす可き史實に徵しても、此國の學者のみならず我々でも信ずる事は出來んのです、其の話は先づ後日の事に讓りまして、此の二大强國は過去三十六ケ月の間、最も頑固な戰爭を續けて居るので御座ります、此の大戰爭の原因と申しますのは、吾々が卵を食べますには屹度其の太い方の端を破るものだと信じてゐましたのです、然るに今の國王の御先々代が御幼少でゐらつ

しやる頃、矢張卵を召上らうと致しました時、古式に從はれて太い方の端をお破りになりました所が、如何なる機勢かお指を一本切られましたので御座ります、すると父王は之れを御覽になりまして、今後は何人に限らず、卵を破らんとする際は必らず細い方の端から破らねばならぬ。若し此の禁を犯す者は極刑に處す可しと云ふ、嚴重な勅令を發布されたので御座ります、我國歷史家の査べました所に據りますと、國民は此の勅令に對して非常に恨み憤りまして、之れが爲めに朝廷内にも六度叛逆を企てた者があり、一人の國王はお生命を失はれますし、一人は王位をお奪られになつたと御座りまして、卵を細い方の端から破るよりはと、寧ろ潔く死を欲して斃れました者共が、七回に一萬一千人と明かに數に殘つて居ります、此の卵の破り方法に關しては數百部の大冊子が刊行されましたが、太端派の書籍は永久に發賣を禁止されまして、又其の黨派に屬する役人共は皆職を剝奪されました、けれど太端派の者共が斯く迄强情を貫きますのも、裏面には大いに

理由のある事で御座ります、即ち太端派の亡命者共は我國に於て地位を失ひましても、直ぐにブレフスク國に逃げて行きますれば、其の國王の信任を得まして重く用ひられるのです、斯くして彼等は敵國内の同派の者の扶助と煽動とを得まして、到頭殘酷極まる戰端を兩强國間に開くの動機となり、其が前申上げた三十六ケ月以前から續いてゐるので御座ります、此の修羅場を實現した劇戰の爲めに、我國では四十艘の大船と無數の小船とを底の藻屑と致したのみか、勇敢にして熟練なる三萬の陸兵と海兵とを魚腹に葬りました、けれど敵國が我が忠勇なる海陸兩軍より蒙つた損害は、我國よりも多少多かつた事と聞いてゐます、然し敵國は今や多數の艦隊を艤裝致しまして、我國を一擧して併呑せんと準備中に御座ります、此の危急存亡の秋に當りまして、貴下の勇氣と膂力とに多大の信頼をおかせらるゝ我が陛下は、以上の事實を貴下の前に披歷せよと微臣に御下命あつた次第に御座ります。

俺は國王に對しては受けた再生の洪恩に報ゆる爲め、義務としても身命を惜まぬ旨を傳奏して呉れと秘書官長閣下に賴んだが、然し俺は御存知の如く一外國人なので、全國内に内訌軋轢を極めてゐる黨爭の渦中に入ることは斷じて出來ん、唯如何なる强敵大軍の推し寄せやうと、總ての外冠のみに對しては何時なりとも一命を賭し、國王陛下併せて此國との爲めに防禦を致す覺悟であるから、此處の道理を陛下が混同なさつて、逆鱗なさつたり又愁傷なさらぬ樣にと、呉々も嚙んで喞める樣に秘書官長に傳奏を願ひ、尙ほ閣下から御前體宜しく願ふと依賴しておいた。

第五節

抑プレフスク國といふのはリ、ブート國の北東にある一島嶼で、幅四百間位の海峽が此の兩國の境界をなしてゐる、未だ其島へは渡らぬので知らないが、何でも襲擊準備の最中との事だから、敵船から俺の姿を見付けらるゝのを慮れて其方の海

に出るのは避けてゐた、戰端開始以來兩國間の交通は全く禁止せられ、犯す者は死刑に處せられたのみならず、國内總ての船舶は國王の爲めに抑留されてゐるので、敵は俺が此國に滯在中なのを知る筈はない、官廷の人々の報告によると、敵は今や全艦隊を一埠頭に投錨せしめ、順風のあり次第一擧して推寄せんとの作戰計畫であるとの事だから、俺は之れに對して全艦隊捕獲策を國王に建白した、一方俺は兩國間の海峽を屢々航海した經驗のある、最も老練な水夫達に其の深さを尋ねた所、滿潮の時には其の眞中の深さは約七十グラムグルツフス、即ち歐羅巴尺度の七尺位であるが、其の他の箇所は大概五十グラムグルツフス即ち五尺位に過ぎぬとの答であつた、それから俺はプレフスク國に對してゐる北東の海岸に出て、小山の蔭に臥せりながら小形の望遠鏡で所謂投錨してゐる敵の全艦隊を偵察すると、敵艦は約五十の戰鬪艦と澤山の運送船とで編成されてあつた、それで直樣家へ歸つて、頗る丈夫な錨纜と鐵の鈎――俺自身が見て充分丈夫なと保證が出來る程な――とを澤山造れ

と命じた、其の錨纜は荷縄位の太さで、鈎は縫針程の長さと大きさとであつたが、俺は此上にも一層丈夫にせうと思つて、錨纜を三本一緒に合せて捩り、鈎も同じく三本合せて尖端を曲げた、それで五十本の鈎と澤山な錨纜とが出來上つたから、再び北東の海岸に出て上衣も靴も股衣も其處に脱ぎ捨て、皮の短表衣一枚限りになり、滿潮の時から一時間程前に海中へ入り、ヂャブリ〳〵と勢ひよく進んだ、俺は出來得る丈け大急ぎで海中を徒歩し、眞中の脊の立たぬ箇所十五間許りは泳いで渡り、三十分も經たない内に難なく敵の艦隊へ達する事が出來た。

大山が搖ぎ出して來た樣な俺の姿を見た敵は、喫驚仰天して倉皇と艦から岸へ泳いで逃げたが、岸には何でも三萬人以上の軍勢がゐたらしかつた、俺はそんな事には一切お構ひなく用意の道具を取出し、各艦の艫にある孔へ鈎を引懸け、其の鈎に附いてゐる綱の末端を殘らず一緒に紮げた、俺が此の大膽不敵な振舞をしてゐる間に、岸から敵兵の放つ矢が雨の樣に來て、其が手や顏に的中るので非常に痛かつた

下してゐる、羊は殆んど一寸五分内外、鶯鳥の如きは我々の雀位しかない、斯んな比例で段々と物の形が小なくなり、俺の目では殆んど見ることが出來ない程の物が澤山ある、然し造花の神は宇宙萬物に適應して小人國民の眼を造つた、即ち此の國の人々は遠隔の物象に對しては見ゐない代りに、近い事物を見る視力の正確鋭敏なのには驚嘆する程だ、其の近い事物を見る驚くべき視力の實例は枚擧に遑なしだが、料理人が普通の蠅位しかない雲雀を引裂くのを見て、俺は多大の興味と怪訝の念を以て其の巧妙なるに舌を捲いた事がある、又小娘が見ゐない樣な縫針へ、見ゐない樣な絹糸を通すのは日常の事である、雲表に聳ゆとでも此間の文學者が形容しさうな最も高い樹が漸と七尺位しかない、だから大公園の老樹大木も、俺が拳を伸せば梢迄屆かす事が出來る、其の他の草木悉く此の割合を漏れんのだから、後は宜しく讀者の推測に任す事とせう。

此國當時の學問は、多年の墮力で徒らに枝葉の末のみが盛んの有樣であつたが、

其に就いて今此處に細述するの必要を認めない、然し一寸目先の變つて面白いのは文字の書方である、其は歐羅巴人の樣に左から右へ書くのでもなく、亞剌比亞人の樣に右から左へ書くのでもなく、左ればとて支那人の樣に上から下へ書き下すのでは無論ない、英國貴婦人目下の流行の如く、紙の一方の隅から他方の隅へと斜に書くのである。

此國の人々が亡者を埋葬するには、死體の頭を眞例に地中に突刺して埋める、これは此國古來よりの迷信から來つた事で、人民は死後一萬一千ケ月を經れば必らず復活する、其際は地面――彼等は世界を平面だと確信して夢にも球狀だなどゝは知らぬ――が顚覆して裏返しとなるから、直立の姿勢で斯世に出て來る樣にと眞倒に埋めるとの事だ、無論學者連は其說の荒唐無稽なのを論證してゐるのだ、けれど多年の因習は一般人民に痼疾となつて未だ實行されてゐるのである。

此國の法律と習慣とにも亦二三獨特の面白味がある、無論俺の故國の法律習慣に

全然相反すると謂ふ譯ではないが、それでも正義と解する點が異なつてゐるのだから少しく述べる事とする、俺は此國の如き法律や習慣が何れの國にも行はれん事を望むと前提しておいて、扨先づ告訴人に就いて話を初めやう、國事犯は言ふ迄もなく此國でも極刑を以て罰せられるけれど、其の被告訴人なる者が法廷に出て、明かに自己の無罪を立證した場合には、告訴人は即座に羞辱的死刑に處せられるのみならず、無罪となつた被告訴人は時間を空費したことゝ、危難に遭遇したことゝ、獄中の苦楚を嘗めたことゝ、及び自己の無罪を辯護する爲めに要したる諸雜費に對し、告訴人の動產或ひは不動產よりして四倍の辨償を受け得る正當な權利がある、然して告訴人の動產或ひは不動產の全額を盡しても其負擔に堪ふる能はざる場合には、國王はお手許金中より其の不足額を償つて呉れる、尙ほ國王は被告訴者の爲めに無罪證明の一札を下附し、全市に晴天白日の身なることを布告する。

詐欺は竊盜より重罪と見做され、時としては死刑に處せられる事がある、何とな

れば普通の常識を以て注意と用心とを怠らざれば、竊盜の災厄は防ぐ事を得るけれど、正直實直な者は老獪なる狡猾者を防ぐことは不可能だ、今や賣買の道日に開けて信用取引隆盛なる時に當り、詐欺を許容し或ひは寛恕し又は之れを罰する相當な法律を缺如するに於ては、正直なる賣買者は常に損耗を招き、詭譎なる奸商は常に莫大な利益を獨占する、故に詐欺は竊盜より重罪と見傲すを可とすの見解より出たのである、或時の事である、俺が主人の大金を持ち出して逃亡し、其の爲め主人に大損害を與へたといふ一罪囚の爲めに國王に仲裁した事がある、俺は此の憐むべき罪囚は自已の信用を消失した許りであるから、願はくば深甚なる同情を垂れて刑罰を輕くして遣つて呉れと願つた所が、國王は怪訝な顔をせられて、其では貴下は罪囚を辯護するではなく、却つて罰を更に大ならしむるのだと言はれた、俺は何の返答のしやうもなく、唯國が變はれば又其の習慣も變はりますものですなあと其場はお茶を濁しておいたが、實際は理の當然に心では密に恥入つた。

賞と罰とは一對の蝶鉸で、此の蝶銃あるが爲めに總ての政府の政治機關が動くのだとは、一般に人が口にする言葉ではあるが、未だ此國の如く能く其言を履行してゐる國は無いと思ふ、七十三ケ月間國家の法律を嚴格に遵守したと謂ふ證明を有する者は、其の誰たるに關せず或種の特權を要求し得る權利を附與される、其の特權とは人々の地位と境遇に應じ、豫め其用途に準備せられたる基金の中から、相當なる金額を下附さるゝのみならず、スニルバル即ち『適法』なる名譽の稱號を姓名の上に附する事が出來る、然れども此の稱號は其者一代に限つて子孫に繼續する事を許されず、俺が或時此國の法官連に、自分の故國では法律は單に人民に刑罰を加ふるのみで、何等賞與を與へる事はないと話した所が、彼等は貴國の法律にして果して斯くの如くば、大いなる缺點を有すと一言の下に卻けて仕舞つた、此くの如き法律上の見解を有する國だから、裁判所に据えてある正義の神像には、前後に二つづゝ兩側に一つゞつ都合六つの目があつて、事物の正確を誤らざる周到なる用意を示

し、右の手には口を開けた儘の黄金入りの財嚢を持ち、左の手には鞘の儘の劔を握つてゐる、言ふ迄もなく此は刑罰よりも賞與に重きを措くの意を寓したのは勿論だ。

總ての人を官職に採用するにも、此國では其人の才能よりも德義の如何を標準とする、即ち彼等の見解では、既に政府なるものゝ存在が人間生活に必要なる以上は、普通の能力ある者は何人でも相當の地位官職に充分に堪ねられる、換言すれば、神は一時代に三人位他生れ來らざる極めて小數の天才者を待たざれば、到底解決し能はざる程度の玄妙不可思議な公務を、斯世の人間に強ひ給ふお思召でないのは明かだ、然るに是に反して眞實、正義、節制、及び以上に類する諸德は普通の能力ある一般の人の得らるゝもので、其の諸德を履行し經驗を重ね、善良なる意向をさへ有すれば特別に學術的才能を要する仕事でなくば、普通の公務は誰にでも出來る譯である、然るに德義心の無い人は如何に卓越せる才能があつても、其の缺點を補ふ事は出來んのだから、此の如き危險人物に公務を委任する譯には行かん、けれど

嚴格に德義を守る人が無識の故を以て仕出來した失政は、敗德汚行に傾き易い性情の人や、自分の敗德汚行を繕縫したり加倍したり、乃至は庇護するに大才を有する人の成した惡政の樣に、一般人民の安寧福利に對して、恐るべき結果を齎すものでないと一般に信じられてゐるのだ。

是れと同樣に神聖なる神を信仰しない者は、如何なる官職にも就くことは出來ん、歷代の國王は神の使臣であるとの觀念が人民に深いので、神の御偉德を認めざる樣な不信仰者を其の下に働かせるのは、國王に對してよりも寧ろ神に對して不合理千萬であると思つてゐるのだ。

這麼固苦しい話ばかりで嘸讀者の倦怠を招いた事と思ふが、是から俺が九ケ月と十三日間此國に住んでゐた間の家庭の有樣や、乃至は生活狀態は又々好奇心に富んだ讀者の心氣を一轉することが出來ると考へる、俺は偶然氣が向いたのと、又實際必要に逼られたので公園に趣き、勝て大きい樹を澤山伐つて可なり便利な椅子と

卓子とを拵へたら、二百人の縫衣婦が出來る丈け丈夫に、又出來る丈け縫目を粗くして俺の襯衣と敷布と卓子掛とを縫つて呉れたが、然し其の布は寒冷紗より地は綱かつたが非常に薄かつたので、幾重にも折り重ねなければならなかつた、此の國反物の一反は普通幅三寸長さ三尺である、そして俺の襯衣を縫つて呉れた時の寸方は、俺が横に臥てゐると一人の縫衣婦が俺の首の處に立ち、一人は膝の所に立つて丈夫な長い布を張り、二人で其の兩端を引張つてゐると、別の一人が來て尺度で其の丈けを度つた、身丈は度れたとして他の部分は何するかと見てゐると、此の人達は唯俺の拇指の長さを度つた限り他は頓と構はぬ樣子である、聞けば手首の圓みは拇指の二倍、首や腰も又拇指の割合で寸法が積れると數學家が計算したからであるさうな、それで大體の寸法が分つたので、此度は俺の着古した襯衣が床の上に打棄つてあつたのを見本とし、俺の身體にしつくり相應う樣に縫つて呉れたのだ、又三百人の裁縫人が俺の着物を仕立てゝ呉れたが、此度は婦人共の樣な寸法の積り方はしな

かつた、それは俺が跪づいてゐると、大勢で俺の首へ梯子を掛け、一人が其の嶺邊へ登つて領子から床の上へ垂繩を下した、其が俺の上衣の長さであるさうな、然し腰や腕の長さは俺が自分で度つて遣つた、寸方書は出來たが扨仕立場に困つたから止むを得ず私の家で仕立てさす事とした、――此國で一番宏大なと謂はれる建物でも、俺の寢泊をしてゐる殿堂よりは遙かに小さくて、寸方書通りの布を擴げる廣間がないのだから――偖出來上つてから見ると、英國の婦人達が能く仕立てる補綴の着物の樣であつたが、たゞ俺のは補布が皆同じ色であつたのが優である。

俺の食事を賄ふには三百人の料理人が總掛りであつた、彼等は俺の家の周圍へ小さい便利な小舍を建て列ねて家族と一緒に住んでゐて、食事の時間毎に二皿つゞの料理を俺に出すのであつた、それで時間毎に俺が二十人の料理人を撮み上げて食卓の上へ載せて遣ると、後から百人許の者が、各自に肉の皿や葡萄酒其他の飲物を容れた樽を肩に擔つて來て下に待つてゐる、すると食卓の上にゐる二十人の者が丈夫

な繩を下して、丁度歐羅巴人が釣瓶で井戸から水を汲上げる樣に、俺の欲しいと思ふ丈けの分量を巧に引き上げるのであつた、一皿の食物はそれでも充分に一口はあり、飲物の一樽も可なり一飲になる程はあつた、羊の肉は俺の國の方が旨かつたが牛肉は何して〳〵其の味の良さと云つたら、俺の國の物などは足元へも及ばなかつた、牛の腰肉なぞ大きなのになると三嚙みにしなけばならないのもあつたが、それでも什麽に大きなのは實際稀であつた、其を俺が自分の國で雲雀の足ごと喰べる樣に、骨附の儘お構ひなしでムシヤリ〳〵と遣らかすもんだから、召使達が見て膽を潰すのであつた、鵝鳥や七面鳥などは一口に過ぎなかつたが、俺の國のよりは遙かに旨かつたと斷言する、まして小鳥の類などは全煮にしても、全焙にしても、餐刀の端へ二三十羽位一緒に載せる事が出來た。

或日のことである、國王は俺の日常生活の樣をお聞きになつて、王妃や王子王女達を初め數多の御近臣をお連れになり、俺と食卓を共にするの光榮——國王は何故

か這麽事を好んで言はれた——を得たいと申込まれたから、俺は快く御臨幸を乞ふと答へた、やがて御一行が陸續と繰込んで來られたとき、俺は一人づゝ食卓の上へ撮み上げ、そして俺の眞向に此國の椅子を澤山に列べて腰を掛けさせ、各自の近臣小姓の面々は其の周圍に席をとらせた、大藏大臣フリナップも白い杖を突いて御一行と一緒に來たが、時々意地の惡るい澁い面をして俺の顏を窃と瞋むのを知つてゐた、然し俺は這麽侫人には一切構はず、自己の愛する本國の名譽を毀損せざるが爲め、又二つには宮廷の人々を呆と言はせて堂も破れる樣な稱讃の辭を買はんが爲めに、常よりも腹十二分に食べて〳〵食べ拔いて遣つた、果して國王が此の日の御訪問以後、侫人フリナップが國王に俺を惡樣に讒言誹謗するの好機會を與へたのであつた、申す迄もなくフリナップは密に俺に敵意を抱く奴であつたが、奸人の常として表面だけは俺を見ると常に莞爾してゐた、彼は國王に國庫の財政が日增に窮乏を告げ、非常なる割引を斷行しなければ徵金も出來ず、公債は九分引けでなければ通用しな

い、換言すれば俺一人を扶持する爲めに百五十萬スプラグ――スプラグは此國最大の金貨だが、俺の國の一厘錢位の大きさしかない――の費用を要したのであるから、一層時機を見計つて俺を去らしむるが得策であると奏上した。

俺は茲に俺の爲めに思掛けない無實の浮名を謳はれた一貴婦人に對し、一言を費して彼女の名譽を取返して遣らねばならぬ、事件の起因は俺に惡意を抱いてゐる奴が、人もあらうに大藏大臣に、閣下のお美しい御夫人は彼の『人山』に非常な愛を寄して御座ると焚き付けたから堪らない、唯さへ俺に面白くない閣下先生は妙に氣を廻して夫人を疑ひ出した、一時は宮廷内でも大藏大臣夫人は窃と俺の家へ潛んで通ふなぞと、途方もない噂を惡人輩が盛んに囃し立てた事もあるが、實に根も葉もない異しからん次第で、同夫人に對しては此の上もない不名譽な取沙汰だ、夫人は率直な無邪氣な性質で、優しい一片の友情から俺を親切にして呉れたのに過ぎない、それは無論俺の家へは度々訪れて呉れた、けれど其時は屹度公然と自分の姉妹か令

孃か、乃至は特に懇意にする友人などゝ何時三人以上一つの馬車を驅つて來て、決して俺と二人限り席を同くした事はない、それに俺は常から周圍の召使共に吩咐けて、門に馬車が止まつたら名前を承つて取次ぐには及ばんから、直ぐに俺に知らせる事にしてある、そして召使が阿誰か御來客ですと知らせて來た時は、直ぐに門へ行つて一應の挨拶をすました後、非常なる注意を拂つて其の馬車と二頭の馬――若し來客の馬車が六頭立ちであつた際は、俺の掌に夫れ丈けの空地は無いので馭者が四頭を取り離す――とを掌に載せ、靜かに食卓の上へ移すのが常であつた、其の又食卓の上には不慮の事變があつてはならぬと懸念したから、五寸の高さに圓い邊を動かない樣に打付けておいた、時としては來客が込合つて、食卓の上へ四輛の馬車を載せる事があつた、すると俺が椅子に腰を下して食卓に凭掛りながら、顏を馬車の客へ差出して一組つゞ用談を濟ましてゐる間、待つてゐる方の馬車の馭者達は話の邪魔にならぬ樣に靜かに馬車を輾らして、食卓の邊の中を乘り廻すのが常であ

つた、這麼具合に俺は總て公然に、如何なる人の來訪にも應じて言葉を交はし、毎日午後を非常に面白く談笑して暮してゐたのだ、唯一度秘書官長レルトレザルが國王の內命を受け、ブレフスク國艦隊總捕獲以前に窃と家へ來たより他に、誰か一人として秘密に來たと云ふ証據でもあるか、俺は無論大藏大臣なり或ひは不埒な流言の揑造者二人――俺は其の二人を今名指すが、故障があるなら何時なりと申込むがよい――即ちクラストリル及びドランロー如き輩を恐るゝ者でない、彼大藏大臣何者ぞ、爵位はグラムグラム即ち俺の國での侯爵たるに過ぎない、閣臣といふ職務上の權利からして俺の上座に着くことを許されてゐるのだけれど、俺は彼より一級上のナルダック即ち公爵であるのだ、下級の輩が彼此の取沙汰は一々聞くも煩はしく、又斯かる大人氣ない事件に長々と述べ立てるのも厭だから、俺單獨に關する事件なら無論始めから默つてゐる、然し苟も一貴婦人の名譽に關する次第だから長談義に及んだのだ、此の滅法界もない奇怪噂は俺が偶然した事から後になつて耳

にしたのだが、其が爲めに大藏大臣の嫉妬の焔はなか〳〵に烈しく、最愛の人であるべき夫人にも苦々しい顏をしてゐた程だから、俺に對しては其の幾層倍も澁面を作つてゐた、けれど其後流石の閣下も恪氣の熱が冷め、夫人とは元の好い仲になつたけれど、俺とは全然犬と猫の樣になり、隨て此の佞人を好んでお近附けになり、其の言葉を喜んでお容れになつた國王に對して、俺は其の信任を一層早く失なふの動機となつたのである。

第七節

俺が此の國出帆の物語をする前に、二ケ月程以前から俺に對して窃かに運ばれてゐた密計に就いて、讀者にお話するのが順序である。

俺は御存知の遥り地位も低ければ資格もなく、今迄無止事宮廷の事情などには全然の門外漢であるのは言ふ迄もない、けれど君主又は大臣などゝ云ふ偉い人達の根

性に就いては、隨分今迄に魂消る樣な事を聞いたり讀んだりして知つてゐる、然し知つてはゐるが其は俺等と同じ人間の住む國の事で、歐羅巴諸國とは頗る趣きの變はつた政治をする此の世界の際涯の小人島で、這麼恐ろしい謀計を運らさうとは夢にも思はなかつた。

俺が此の國の國王の許可を得てブレフスク國王に謁見しやうと準備中の時であつた、宮廷に仕へる一人の大官――此人が國王から非常な御不興を被むつた時、俺が大層骨を折つて國王に執成して遣やた人だ――が夜遲く駕籠で俺の家へ窃と來て、名も明さないで面會を求めた、で、俺は門迄出て轎夫を歸らせ、駕籠に乘つた儘の來客を衣囊へ手早く藏し、そして最も忠實な召使に俺は今夜少し不快だから早くから寢んだと他の者共に云はせ、戸締を嚴重にして漸と椅子に腰を下し、始めて衣囊から來客を駕籠の儘取出して食卓の上へ載せた、扨一應の挨拶がすんでから何心なく大官の顏を見ると、懸念に堪ねといふ浮かぬ顏をしてゐるので早速理由を尋ねると、此人の言ふには、其はお尋ね迄もなく自分の名譽と生命とを賭して此處迄來たのだから、詳しく一伍一什を話すから其中辛抱して聞いて呉れと言つた、其の話は下の通りであるが、是は俺が此の人が歸ると直ぐ書留めて置いたのだから一言半句間違ひはない。

『先日貴下の御身上に就いて、極めて秘密な會議が國王の御前に開かれ、數人の列席議員が召に應じて集まりました、そして其の秘密會議の決議案が、動かぬ御決心を陛下に與へてから未た二日しか經ないと前以て御承知を願ひたい。

私は如何なる根本の原因が潛んでゐるかは存じませんが、貴下も能く御承知の通り、彼の海軍大將スキレシユ・ボルゴラムは、貴下が殆んど御上陸當時からの大敵で御座りました、所へ以て貴下がブレフスク國全艦隊總捕獲といふ、歷史上にも例のない素敵な武勳をお建てになつたものだから、海軍大將たる彼の名譽を少なからず削られたが爲め、貴下に對する彼の憎惡の念は一層高まりました、此の

大將と、彼の夫人が貴下と何か關係があつたとかいふ途方もない噂の爲め、悋氣の焔を燃やしたので有名な大藏大臣フリナップ、其の他陸軍大將リムトック、侍從長ラルコン及び大法官バルムッフの以上五名が一致しまして、叛逆其の他の大罪の名を以て貴下を彈劾する條目を起草しました。』

俺は此の前提を聞くと等しく赫となり、如何に日頃から面白くない仲とは言ひながら、俺の功積と潔白とを萬更知らぬでもあるまい、知つて彈劾の條目を起草するとは奇怪至極なと一圖に思ひつめ、此の人の話も遮ざらうかと迄逸つたが、彼はまあ〳〵お靜かにお聞き下さいと百方俺を宥めて話を續けた。

『私は貴下がお盡し下さつた御恩に報いんが爲め、喜んで自分の生命を貴下の爲めに賭けて秘密會議の經過と其の條目の寫しとを悉皆打明けます、先づ其の彈劾の條目とは、

『人山』に對する彈劾の條目

第一條

『人山』がブレフスク國全艦隊を捕獲して我が港へ齎したる際、陛下は尙ほ彼に敵國に殘留する諸船舶を捕へ來れと命じ給へり、是れ陛下がブレフスク國を我が版圖となし、以後は副王を置きて之れが統治の任に當らしめ、總ての太端派の亡命者等を掃蕩するのみならず、彼等異端者等を直ちに放逐せざりし彼國人民等をも剿滅せんと企て給ひし御深慮に出しなり、然にる彼所謂『人山』は、最も幸榮にして且つ最も穩當なる陛下の命令に背き、無辜の人民の良心を强ひ、或ひは其の自由と生命とを滅却するに忍びずと云ふ遁辭を設け、其の役務より免れん事を悃願せり、是れ實に不忠不義の叛逆者なり。

第二條

陛下の宮廷に和議締結を乞はんが爲め、ブレフスク國宮廷より講和使の一行來朝したる際、彼所謂『人山』はブレフスク國が近き過去に於ける陛下の國に對し

て公然の敵國にして、又陛下の國に對して公然干戈を交へたる國なるを知悉せるに關せず、其の大使の一行を幇助し、教唆し、慰安し、愉悅を與へたり、是れ實に不忠不義の叛逆者なり。

第三條

陛下の忠實なる人民としての義務を盡すべき、所謂『人山』は其の本分に背き、今や單に陛下が口頭を以て許可を與へ給ひしを名とし、プレフスク國及び其の宮廷へ航行せんが爲め準備中なり、而して此の放縱專斷なる航行の目的は、前述の如く最近迄陛下の敵國にして且つ干戈を交へたるブレフスク國々王を幇助し、慰安し、教唆せんが爲めなる事明かなり、是れ又不忠不義なる叛逆罪として論ず可きものなり。

と云ふので、尙ほ其の他にも種々な條目がありましたが、私が今拔萃して讀み上げましたのが最も主要な部分で御座ります。

此の彈劾に關しては數回討議を重ねられましたが、玆に私が特に貴下に申上げねばならぬ一儀があります、其は他でも御座りません、陛下におかせられては屢々貴下が國家の爲めにお盡しになつた功積を列席議員等に御注意になり、出來得る限り貴下の罪を輕減せんと努められ、大いなる御寬仁の點を數多示された一儀に御座ります、大藏大臣と海軍大將とは夜陰に乘じて貴下の家へ火を放ち、最も苦しく又最も恥づ可き死を與へよと主張し、陸軍大將は武裝せる二萬の兵をして貴下の顏や手に毒矢を射させよと言ひ張りました、其他或者は又貴下の召使等に密に命を傳え、貴下の襯衣や敷布に毒液を撒き散らしておき、貴下の肉が腐れ破れて悶死なさる樣な非常な苦痛を與へて殺せと申す者もありまして、陸軍大臣は前說を取消して此の說に同意しました、斯くの仕末で當初の形勢は貴下の反對に立つ者が多數を占めましたが、寬仁なる陛下は如何にもして貴下の御一命を助けたいと思召し、遂に何事か御諮問ある可く侍從長を外へお連れ出しになりました、

陛下と侍從長と何事か御密談の結果、彼の常から貴下の親友であると自任してゐまする秘書官長レルドレザルに、陛下の前に腹藏なく貴下に關する意見を述べて見よとの御命令で御座りました、無論秘書官長は腹藏なく滔々と意見を述べましたし、又貴下の好意を無にせず正義の說を吐いたのは明かです、彼は成程貴下の罪の輕からぬのは認めますが、今寬仁なる陛下が常に宸襟を離させ給はぬ、國君として最上の御德と云ふべき、慈悲の二字を與ふる丈けの餘地はあると考へますと前提をおきまして、自分と彼『人山』との友誼は世の人も能く知る程で、斯ゝる最も誠眞なる可き會議の席上に於きましても、或ひは自分が偏頗な論議を爲はしないかと怪まれる程親密で御座りますが、然し自分は全然感情を離れて公正に考へ、又陛下より受けた命令の至尊至大なると、陛下の仁德に富み給ふ御性情より推し、自分は彼の生命を怒して只其の兩眼を抉出すやうに命令されん事を切望致します、斯くすれば正義は幾分か滿足に行はれ、社界一般も陛下の御仁德を

稱譽すると同時に、陛下の顧問官なる名譽を有する吾人も、又公明正大にして寬裕大度の處置を稱揚せらるゝ事と信じます、彼『人山』は兩眼の明を失ひましても體力に何等の阻碍を與へませんから、依然として陛下が有用の材たる資格を有しますのみならず、一方に於ては盲目者蛇に怖ぢずの諺の如く、何等危害の迫るを知りませんから層一層の勇氣を增すものです、是は彼が慈ひに兩眼に敵矢を受けん事を懸念せしが爲め、敵の艦隊を捕獲するに非常なる不便を感じた一事のみにて明かです、そして彼が明を失ひました以上は、我々閣臣等の目で見て指圖して遣れば充分であります迄べました。

然るに此の建議は全會議より極力反對を受けまして、海軍大將ボルゴラムの如きは忿怒の情を抑ゆる事が出來ず、狂氣の如く立ち上つて申しますには、予は秘書官長が叛逆者の一命を救はんが爲め、唯今の如き說を推參にも檀になした度胸に驚く、實際の事實より推すも彼の爲した功積は、彼の爲した犯罪の過多な

るには及ばぬと認める、敵艦隊を容易に引摺り來る事を得た膂力は、一朝彼の不滿を買へば又容易に敵國に引摺り行くを得るのである、予は彼が心中に於ては太端派なるを考へるの正しき理由あるを信ず、胸裡に叛逆を抱く者は、必ず之れを明々白々の行爲に表はす時が來るものである、此の道理に基いて彼を叛逆者と認め、一日も早く死刑に處せねばならぬと主張しました。

大藏大臣も亦同一意見で、貴下一人を扶持する爲めに陛下の收入は甚しく減じ、遠からず維持が出來ない樣になると其の窮乏を告げて偖申しますには、秘書官長が彼の兩眼を剔出せんと述べられた方法は、此の窮乏を救濟せんとするのでは無く却つて增す事になります、例令ば或種の鳥を盲目にして御覽なさい、一層貪食をしまして肥滿する事實に見ましても直ぐと分ります、彼の罪を審判する神聖なる陛下及び陛下の會議は、法律の正格な文字によつて示された形式的證據は御座りませずとも、各自が彼に罪過があると信じまする良心に從つて判斷しますれば、

其が彼を死刑に處しまする立派な理由のある審判で御座りますると述べ立てました。

然し陛下は何處迄も貴下を死刑にはさせまいと御決心遊ばして、若し會議が貴下の兩眼を剔出するのみでは、餘りに刑罰が輕きに失すると云ふならば、他日又他の刑罰を蒙らす事が出來るではないかと穩に申されました、其の時貴下の親友なる秘書官長は再び立ちまして、陛下が貴下を御扶持になる莫大な費用の件に就きまして、唯今大藏大臣から私に抗議がありましたが、其に就いての答辯を聞いて貰ひたいと申して偖述べましたには、陛下の收入を單獨で所置せらるゝ大藏大臣の並ならぬ御心配は、漸次に彼『人山』の食物を減少し行く事に依つて其の損害を容易に避ける事が出來ます、食物の不足は彼に身體の元氣を失はしめ、斯くして遂に食を斷つ程にすれば、數ヶ月にしてさしもの彼も衰滅して仕舞ひます、そして若し其の身體の過半部の活力を全く殺がれて仕舞ひました時は、其の死体より

發する臭氣も左程迄に危險ではありません、斯くして彼が全く絶息しましたら速かに五六千人の人民を役し、二三日間に肉を削ぎ取つて骨許りにする事が出來る、其肉は荷車に載せて傳染病蔓延の慮なからしむる爲め遠方に運んで地中に埋め、其の骨格は子孫へ嘆美の紀念物として遺せば宜しいと思ひますと論じました。

斯く秘書官長が貴下へ對する深甚な友誼の爲め、此の事件は全く圓く纏りました、で、貴下を漸次に餓死せしむるといふ計畫は秘密にせよと嚴重に命ぜられましたが、貴下の兩眼を剔出するといふ明文は會議錄中に記入されました、此の建議には誰も反對者はありませなんだが、只一人ボルゴラム大將のみは大の不平で御座りました、本体此のボルゴラムと謂ふ人は王妃に使はれてゐる人で、絶えず敎唆されて始終貴下を死刑に陷れんとしてゐるのです、三日の後には貴下の親友秘書官長が此家へまゐり、彈劾の條目を貴下の面前で讀み上げ、貴下が單に兩眼を剔出さるゝのみに止まつた陛下の非常なる御仁德と、御恩惠とを表示する樣に命

を受けました、そして陛下は貴下が其の刑罰を欣然と有難くお受けになると信じてゐられます、同時に陛下の外科醫者が二十人秘書官長と一緒に參りまして貴下を地上に横臥せしめ、貴下の眼球へ非常に尖端の鋭利な矢を刺し込み、巧みに手術する筈に御座ります。

是に對して如何なる處置を採る可きかは、其は貴下の御判斷に任すより他に仕方は御座いません、私は諸人の嫌疑を避ける爲め、少しも早く來た時と同じ樣に又窃と歸らねばなりません』

と話して大官が人目を忍んで歸つて了つた後、俺は少なからぬ疑惑と煩悶とで心を惱ました。

俺は前にも述べた如く、出生も賤しく敎育も無いので、宮廷のお歴々から見れば蛆虫同樣な身、隨つて事物の分りも惡いのだから、此の宣告を寛大だとも恩惠だとも認める事は如何しても出來ず、否寧ろ――俺の考へは多分間違つてゐるだらうが

——殘忍苛刻な刑罰だと思つた、俺は彈劾の諸條目の中で、成程と首肯けば首肯き得らるゝ二三の事實は無いでも無いが、未だ罪を輕減せらるゝ餘地はあると思つたから、一時は正式の裁判を仰がうかとも思つた、然し俺は今迄に國事犯審問なるものは裁判官の杓子常規で、白くも黑くもなるものだと思つた判決文を幾度も讀んで頭に滲みてゐるので、此の危機一髮といふ急場に、自分に惡意を挾む恐ろしい手間に、判決を任すと云ふ樣な、そんな危險な眞似は如何しても出來なんだ、何俺が一度抵抗して遣らうと思へば、手足も立派に利く人間だもの、此の國の全力を盡して來たつて朝飯前だ、石を投げたつて此の國の首府の一つや二つ粉微塵にするのは容易に出來るのだから、一つ大いに亂暴狼藉を働いて遣らうかと思つたが、退いて考へれば俺が國王に誓つた言葉、國王が今迄の御寵愛、此の國最高のナルダックの爵位と次から次へと頭に浮んで來たので、恐慌手段で自分の安全を謀るのは善くないと思つたから、此の企圖は直ぐと棄てゝ仕舞つた、けれど俺には宮廷のお歴々が思

つてゐる樣に、國王の今度の殘忍苛刻な刑罰を、俺が今迄に受けた恩寵を償ふのだと思つて、有難くお受けをすると云ふ氣には如何しても成れなかつた。

俺は遂に決心した、然し其の決心と云ふのが實の所自分の兩眼を潰したくない、隨つて自由も奪はれたくないと一圖に逆上せた結果、向ふ見ずの輕卒と無經驗から割出した倉卒の決心なので、定めし非難を蒙むる事であらうと思ふ、然し其の悲難は決して無理でない、若し俺が其の當時君主や大臣なる方々は何な根性な者か、或ひは又此のお歴々達が俺より罪の輕い者を、如何に苛刻に所置してゐたかと云ふ事を承知してさへゐたならば、泣く兒と地頭には何とやらの諺もある通り、俺は雀躍して有難く此の宣告を受け、早速寛大だ恩惠だと仰有る輕い刑罰に服したかも知れないけれど、悲しむべし俺の年齡が若かつた、徒らに青春の勿卒な心から、又二つにはプレフスク國王に謁見する許可を得てゐたものだから、便々と三日を待つて有難い刑罰を受くる辛抱が出來なかつた、で、翌朝早く、今からブレフスク國へ出發

する決心であると云ふ一書を認め、親友秘書官長に差出して其の返事も待たず、此の國の軍艦が投錨してゐる海岸へ行つた、そして一番大きな軍艦の艦へ綱を結び付け、錨を上げて沖へ引張り出し、衣服を脱いで抱へて來た敷布と一緒に丸めて艦へ積込んで海上を曳きながら、徒渉したり泳いだりして難なくブレフスク國の海岸へ着くと、澤山な人が俺を出迎へてゐて呉れた、人々は俺を首府へと連れて行く二人の案内者を附けて呉れた、聞けば此の國の首府の名は國の名と同じとの事であつた、で、俺は二人の案内者を掌に載せて首府の門から二百間許りの處迄行き、俺が唯今到着して陛下の御命令を待つてゐる旨を秘書官の一人に知らせて呉れと二人に頼んだ、そして一時間程經つと、國王が皇族を始め數多の顯官重臣等をお召連れになり、俺を出迎への爲め御出御になるとの返事が來た、俺は自分の幸榮を喜びつゝ五十間許り進んだ時、早御一行はお着になつて國王と從者達とは馬から、王妃と女官達とは馬車から各々静々とお下りになつたが、何れも御恐怖と御懸念との色は少しも見受

りなんだ、俺は直ちに大地に俯伏して國王と王妃とのお手に接吻し、先日國王の御名を以て招待して下さつた大使閣下との約を履み、主君リ、プート國王陛下の許可を得て、御威德盛んなる陛下に拜謁するの光榮を得んが爲め來朝した事と、尚ほ我がリ、プート國王に對する自分の義務に背かぬ範圍内であれば、力の及ぶ限り御用を勤めたい旨を奏聞したが、俺の不名譽な彈劾一件に就いては口を噤んで一言も云はなかつた、と謂ふのは別でもない、未だ俺は其の一件に就いて正式に報告を受けては居らぬ、隨つて其の企圖を全然知らぬと云つても差支へないのみならず、元來外人の身は國王の權限内に含まれてゐぬのだから、此の秘密は俺が此の國へ來た以上、發見される筈はないと思つたからである、然し隱れたるより顯るゝはなしの諺通り、後から直きに秘密が曝露て仕舞つた。

此の豪俠豁達な大國王に相應はしい接待を俺が宮廷で受けた事や、家も寢床もないので、敷布に包括まつて大地に臥なければならなかつた難澁などは、又事々しく

述べ立て、讀者を煩はすのも如何と思ふから拔きにしやう。

第八節

此の島へ來てから三日經つた或日の事である、何か珍らしい物でもないかと北東の海岸をぶら〳〵散歩してゐると、不圖半浬許り沖の方に、端艇の樣な形をした物の轉覆してゐるのが目に付いた、俺は早速靴と襪とを脫いで三百間許り其の物の方へ徒渉ると、潮の助けで大浮流物も段々と近寄つて來たので、よく〳〵見ると端艇も端艇、俺等の國で乘る本當の端艇であつた、多分暴風雨を喰つて本船から吹き流されて來たのであらう、俺は直ちに首府へ歸り、國王に未だ殘存せる軍艦中で最も大きなのを二十隻と、海軍中將の指揮の下に三千人の水兵とを貸して貰ひたいと願つた、すると國王は快く承諾して下さつたので、俺は喜び勇んで近路を採り、最前端艇を發見した處へ引返へして見ると、端艇は搖られ〳〵て益々近づいてゐた。待つ

間程なく借用艦隊が堂々と漣波を蹴つて遺つて來て呉れた、そして艦には港を出る時、俺が充分丈夫に捩つた綱を用意させて置いた。

俺は裸體になつて端艇迄五十間許り徒渉り、其處からは身丈が立たぬので泳いで行き、軍艦から水兵等が未端を投げて呉れた綱を端艇の艫にある孔へ結び付け、他の未端を軍艦に曳かせて見たが、肝腎の俺が身丈が立たぬので手を空しくしてゐたから、端艇は膠で粘着けられた樣に少しも動かぬ、俺は是ではならぬと思つて端艇の後へ廻り、一方の手で泳ぎながら他方の手で後押したら、潮の都合が好かつたので俺の力とで端艇は勢ひよく進み、直きに水が丁度頤の邊迄しかない處へ來たから其處で二三分間休息し、再び勇を振つて端艇を幾度も後から押し遣り、腋下迄しか水の屆かぬ處へ來た、これで先づ漸と最大困難を切拔けたのである、夫からは他の艦にも積込んであつた綱を同じく艫の孔へ結び付け、俺に跟いて來て勇敢に働らいて呉れた九隻の艦に曳かした所、幸ひに風都合が好かつたので、曳く水夫も勇めば

俺も力を出して押し遣り、程なく岸から五十間位の處迄來た、其處で潮の干るのを俟つて端艇を乾かし、尙ほ二千人の者共に繩と機械とで手傳つて貰ひ、漸と轉覆して能く檢めて見たが、大して破損はしてゐなかつた。

俺は十日も費して橈の樣な物を作り、其處からブレフスク國の港へ其の端艇を回航すると、埠頭の邊に人が蟻の樣に集つてゐたが、臍の緒切つて以來未だ斯んな素敵もない巨船は見た事がないから、喫驚仰天して魂消た顏を列べてゐた、其等の記事を管々しく述べると、讀者の倦怠を招くから省く事にして、兎も角俺は僥倖にも端艇を見付けた許りに、自分の故郷へ歸れる少しは便を得たと國王に喜びを述べ、尙ほ出發の許可と共に食糧を惠まれたいと願つた、國王は親切に思ひ止まつたが宜からう、此儘此の國に滯留してゐては何ぢやと種々諫められたが、俺が頑固にも强つて歸りたいと言ひ張つたから、到頭お許可が出る事となつた。

俺は此の島へ來てから最早二週間許りになる、然るに我がリ、ブート國王から此

の國の宮廷に宛て、俺に關する何等の使者をも遣はさんのは何故かと大いに怪んだ、然も其後密に耳にした所に依ると、リ、ブート國王は俺が彈劾の條目も刑罰も聞いてゐるとは氣付かれる理由は無し、宮廷でも知つてゐた通り俺が此の國へ旅行する許可は陛下御自身の口から得てゐたから 畢竟ブレフスク國大使へ約した言葉を果たす爲めに行つた迄で、拜謁がすみ次第直きに歸るに相違ない位に考へて居られたさうだ、ところが俺の不在が餘り遲滯くので徐々氣を揉み出され、大藏大臣を始め其の他密計に加はつた手間と評議を凝らされた後、一人の高官に俺に對する宣告文を持たせ、大使として遣はせられる事となつた、此の大使先生は海上無事に安着して、ブレフスク國王に俺の宣告文なるものを呈出した。宣告文には國王の寬大と恩惠とに依り、俺の兩眼を只剔出するのみで其の他何等の刑罰も加へない、然し俺が此の至仁至惠なる判決をも免れんとして二時間以內に歸らなかつた時は、直ちにナルダックの爵位を褫奪して叛逆罪に問ふとの事であつた、尙ほ大使閣下は言葉を

附け加へ、兩國間の平和と親睦とを維持せんが爲めに、リ、ブート國王は其の親き事兄弟の如きブレフスク國々王に、俺を叛逆人として扱はれ、其の手足を縛りてリ、ブート國へ送還されん事を望むと述べた。

ブレフスク國々王は閣臣等を集めて三日間凝議せられた後、極めて都雅推讓の修辭の妙を盡した返答をされた、即ち

彼の手足を縛して送還するの不可能なるは、賢明なる不肖の兄弟の知悉せらるゝ所とす、彼は弊國軍艦を掠奪せる者なりと雖も、平和條約締結の際盡し呉れたる彼の盡力を顧れば、不肖なる朕にも亦彼が身上を斜旋し遣るべき大いなる義務あるを覺ゆ、然れども兩王國は極めて近き將來に於て平穩無事なるを得べし、何となれは彼は海上に彼の體軀を搬ぶに適したる巨大なる船舶を海濱に發見せり、而して不肖朕は自己の扶助と指圖との下に其を準備せん事を命ぜり、斯くして不肖朕は數週日の後、兩王國が永遠に此の扶持し難き煩累物より免れん事を希望す。

と言ふのであつた。

此の返答を携へて大使はリ、ブート國へ歸つた、ブレフスク國王は經過の次第を俺に明かし、其と同時に――極めて秘密の仰せであつたが――俺に此國へ奉仕へて呉る氣があれば、隨分目を掛けて庇つて遣るとのお言葉であつた、俺は國王の誠實なのを知らぬではなかつたが、若し出來るなら再び國王や大臣などのお歴々から、忘れても信任は得たく無いと思つたので、國王が折角の親切な御意向にも相當な感謝の辭だけを拂つておき、御好意は忝いが御信任を蒙つて奉仕へるだけは見遁して下さいと切に悃願した、そして俺は前途が幸か不幸かは神ならぬ身の分らないが、最早一旦端艇に運命を任したからには、戀々と此國に呉て二大强國不和の原因とならうより、大海に突進して乘るか反るか當つて碎ける積りだと國王に憚らず述べた、是に對しては修養のある國王の事とて、別段不快の御氣色も見ねなんだが、俺は不圖した偶然の事から、國王も心中では俺の此の決心を萬更喜ばれぬでも無い事を知

つた、優して大臣達は厄病神でも拂ふ程喜んだのは言ふ迄もない。

這麼事情で、俺は思つてゐたより多少出發の期を早める氣になつた、宮廷でも貧乏神が一日も早く退いて呉れるのを待ち遠しく思つてゐるから、總ての準備を目の廻る程手早く手傳つて呉れる、五百人の職工が總掛りで俺の指圖通りに一番丈夫な布を十三重にも縫ひ合せて端艇の帆を二つ作り上げた、俺は又俺で少なからず骨を折り、此の國で一番太くて丈夫なと云ふ繩を十重にも二十重にも三十重にも捩り合せて、航海に必要な索と錨纜とを拵へ、それから濱邊を彼方此方と熊鷹眼で搜し歩き、錨の代用をさす大きな石を漸と捨ふ事が出來た、端艇や其の他船具へ塗る爲めには三百頭の牝牛の脂肪を要した、橈や檣を造る爲めに大木を伐り倒すのが一番の困難であつたが、それでも俺が荒削りした後は國王の船大工が手傳つて呉れ、鉋を掛けて滑かにして呉れたので大いに助かつた。

約一ヶ月を費して用意萬段整つたので、俺は國王に出帆の許可を得ん爲め、二つ

には告別の辭を述べんが爲め使を派した、すると國王は王妃を始め諸王族をお召連になり、態々俺を見送りの爲め御臨幸になつた、俺は地上に臥て顏を伏せ、慇懃にお差出しになつた國王の御手に接吻し、次いで王妃及び其の他の王族の御手にも接吻した、國王は俺に二百スプラグづゝ容れた財布五十個を、御自身の全身畫像に添へて贈物とせられた、俺は有難く頂戴して畫像は破けると不可から手袋の中に入れた、其時出發の儀式があつたのだが、管々しいから述べぬ事にする。

俺は屠殺つた牛百頭と羊三百頭と、其に相當した麪包と飲物とを端艇に積み込み、別に四百人の料理人が庖丁を執つて呉れた澤山な肉も用意し、故郷へ持つて歸つて繁殖さす爲めと、生きてゐる六頭の牝牛と二頭の牡牛と、及び同數の羊とを曳き込み、隨つて船中に飼つて置く必要の爲め、乾草の可なり大きな束と穀物一袋とを準備した、その上俺は此の國の人を十二人連れて行きたかつたが、それのみは國王が如何しても免さなかつたのみならず、若しや浚つて行きはせぬかと案じて俺の衣嚢

を懸命に捜した後、人民が例令俺と同行を承諾しやうが願はうが、一人たりとも遵れて行かぬと俺に誓はしめた。

斯く總ての準備が俺の思つた通りに好都合にいつたので、俺は一千七百一年の九月二十四日、午前六時といふに黎明の空氣を端艇に破つて勇ましく出帆した、四浬許り北方へ進んだ時、半浬許り北西の方角に當つて小さな島を見出した、時は正に午後六時、風位は南東を吹いてゐる、俺は帆を巧みに操つて風を孕ませ、其の島へ到着して風下へ投錨したが全然の無人島であつた、俺は其處で食事をすましてから、疲勞れた身體を睡眠に休養したが、目が覺めて後二時間許りで旭が水平線上に微かに見ゑたのから推すと、少なくも四時間は熟睡したらしい、それは兎に角星の降りさうな靜かに晴れた夜であつた、俺は太陽の昇る前に食事を濟して錨を上げたが、風位が誂向きの好都合であつたので、懷中磁石の指針が示す如く、前日と同方向に舵を向けて進んだ、俺が其の時の意向は、自分の宿運未だ盡きずして何れの陸へ

か達するを得とすれば、必らずヴァン、デーメンス、ランドの東北に散在する群島の一つに到達すると確信してゐた、其の日は眼を遮ざる何物をも見るを得なかつたが、然し翌日の午後三時頃、推算に依ればブレフスク國を去る二十四浬位らしい、南東に進行しつゝある一帆前船を見出した、時に俺の航路は眞東を指してゐた、俺は懸命に大聲を絞つて其の帆前船を呼び掛けたが、何等の聞ゑたらしい信號もせぬ、けれど風が和いでゐたのだから聲は其の船に達したに相違ないと思つたから、腕も折れよと死者振ひに橈を漕いで帆走らしたら、半時許りで其の船は俺を見付け、旗を揚げたり鐵砲を放つたりして救助の合圖をして呉れた、ブレフスク國王に壯語して勇ましく一葉の端艇に身を托したものゝ、際涯もない大洋に今日は魚腹に葬らるゝか、明日は底の藻屑となるかと安き心もなかつた身が、盲龜の浮木を得た樣な思ひも寄らぬ僥倖に、今一度懷しい故郷の土を踏み、其處に殘して置いた可愛の妻や子に遇へる希望の網に絶る事を得た、俺の喜悅は到底筆紙などで述べられやうか。

帆前船は徐々に進行を弛め、俺は九月二十六日午後五時と六時との間に其の船へ着いたが、絶ねて久しき同國人を見た俺の胸は怪しき迄躍つて、我か人かの區別も付かぬ程であつた、少時して俺は生きた牛と羊とを上衣の衣嚢に入れ、食料其の他を容れた小さな荷物を提けで甲板へ登ると、此の船は英國の商船で、南北兩洋を通過して今日本から歸航の途中であり、船長はデブトホード生れのジョン・ピドルといふ大層閑雅慇懃なるが上に、又航海に非常な熟練した士である事を知つた、其の時船は正に南緯三十度、五十名許りの乘組員の中に仕合せ好く舊友のピーター・ウキリアムスがゐて、船長に何吳となく執成て便宜を計つて吳れた、で、船長は俺を痒い所へ手の屆く樣に親切に扱つて吳れ、そして何處から來て何處へ行く目的であつたかと尋ねたから、俺は只手短く小人國へ漂着して、今が其の歸途だとのみ答へて餘り言葉を費さなんだら、船長は俺が一方ならぬ危難に遭遇したが爲めに頭腦の造作が狂ひ、取留めもない譫言を吐いてゐると思つたらしかつたので、俺は早速衣

嚢から黑牛と羊とを取出して、這はして見せたから呆氣に取られて少時は此の不思議な小動物と俺の顏とを見くらべてゐたが、漸と俺の言つたのが事實だと明かに合點する事が出來た、それから俺はブレフスク國々王に頂載した金貨、同國王の全身畫像其の他珍奇な物を殘らず見せ、二百スプラグ入りの財布二個を船長に贈り、尙ほ英國に上陸の後牛と羊とを進呈せうと約した。

概して平穩無事に了つた此の歸航の長々しい叙述は例に依つて拔きとする、我々は一千七百二年の五月十三日にダウンスに目出度上陸した、が、只一つ頗る遺憾に思ふのは、歸航中甲板に飼つて置いた羊を一頭鼠の爲めに引いて行かれ、肉を綺麗に毟り取つた後の骨許りを鼠穴に見出した一事である、殘る他の家畜は安全に上陸させ、細い纖い草の最も多いグリーンウイッチの芝生へ移し、其處で熱心に牧養した、俺は船中で草を喰はせなんだから、事に依ると草は喰はないかしらと心配したが、牧場で育つのを見て安心した、略一年に渉る長い航海中、船長は俺のみならず

家畜迄可愛がつて呉れ、上等の乾麪包を粉に碎いて水を混ぜ、其れを彼等が毎日の食とするのを許して呉れたから良いもの丶、其でなくば此時迄小動物は生きては居なかつたであらう。

英國に暫時俺がゐた間に、身分の高い人や其の他に此の家畜を見せ、隨分莫大な金儲けをしたものだ、二度目の航海をする前に之れを六百磅で人手に渡したが、最後に歸國した時には非常な數に繁殖してゐた、殊に羊の繁殖は目覺しい程で、又其の毛の美しい事は、毛織物にしたら嘸良からうと信じた程であつた。

俺は妻や其の他の家族と二ケ月間は家庭の團欒を樂しんだが、變はつた國々を見たいと云ふ一風變はつた飽く事知らずの慾望は、最早此の上凝として國へ止まつては居らしめなかつた、それで妻には千五百磅の金を與へて衣食の資とさしたのみならず、レッドリフで可なりな家を求めてやり、其の他の財産は其を資本に大釜を起さうと思つたから、半分は金で半分は物品に換へて携へる事にした、ところへ大叔父

が一年三十磅程の收入あるエッピング附近の土地の所有權を俺に讓り、其の上フエッター、レーンのブラック、ブルの永借權が俺の所有としてあつたから、尙更妻子を餓死せしむる樣な懸念はない、俺の息子のジョニーは叔父の名を嗣いで小學校へ通學してゐたが、能く言ふ事を聽く柔順な子であつた、娘のベッテイ――歸つて見たら嫁入りして子供迄あつた――は針仕事を稽古してゐた、俺は流石に涙と涙とで妻や子供に暇乞ひし、リバープールのジョン・ニコラス大尉が船長を勤めてゐたスラト行きの商船、アドヴェンチュアー號といふ三百噸の船の乘組の一員となつたが、此の航海に關する悉い話は次ぎに述べるとしやう。

第二編　大人國

第一節

一千七百〇二年六月十日、俺を乘せて英國の港を出た商船アドヴェンチュアー號の航海は、阿弗利加州の南端喜望岬に錨を投じて飲料水を求めに上陸した迄は、誠に好都合な順風であつたが、圖らず船體に破損した箇所のあるを見出したのと、生憎船長が瘧に罹つたのとで、積荷を悉皆陸上げして了つて同處に冬籠をし、翌年三月の末迄は此の岬を後に見ることは出來なかつた、で、其處をいよ〳〵出帆してマダガスカルの海峽を通過した迄は、誂向の風都合で容易な航海であつた、然し四月十九日船が此の島の北方、南緯殆んど五度の處迄來ると、何時も此の邊の海上では十二月初旬から五月初旬に掛けて、絶えず一樣に北西の强風が吹くのが常であつたのに係はらず、平素よりは更に西に偏つた烈しい暴風雨が襲つて來て、二十日間も海上を暴れに暴れて吹き捲つたが爲め、船はマラッカ群島より少しく東、北緯三度の所まで吹き行られて仕舞つた、船長の觀測に依れば其の日は五月二日でありたとの事だ、其の時さしもの風も和いで海上も穩かになつたから、俺は大いに安堵の思ひをした、けれど船長ジョン・ニコラス氏は此の邊の海に幾度も經驗を重ねた老練な航海者なので、續いて翌日も暴風の襲來するのを知り、我々船員一同に防衛準備を命じた、此の時既に南の季候風――印度洋の時風で五月の末より九月の中頃迄は南西より吹き、十月の中頃より十二月の中頃迄は北東より吹く――と航海の方で呼ぶ南風が吹き始めてゐたのだ。

船長の先見少しも違はず、風は漸々に兇猛の度を增し、天候は益々險惡になつて不穩を加へる、惡魔の如き大波は低く垂れて暗雲を洗はんとする狂瀾怒濤の物凄い中で、帆は悉く寸々に吹き捩斷られて危ふく轉覆せんとした事も少くない、それで

も熟練な船長と健氣な海員とのあつたが爲めに、漸やく暴風の鎮まつた迄船は苦戰奮鬪を續けられたのだ、けれど風位は依然として西南で、船の進路は東北東であつたのだから、如何なる方角へ如何程吹き流されたのか俺には分らなんだ。

嗚呼、無情な天は何處迄吾々を叱責む積りであるのか、船は暴風を喰つて未だ間も無いのに、又々西南西の强風に遇つて矢の如く吹き流され、俺の推測では百五浬も東方へ推し行られたらしい、であるから海上を家とする如何な老練な水夫でも、今此の船が世界の何の邊に在るかを知る者が一人もあらうか、然し貯へた食料品は充分にあり、船體も亦堅牢で破損の箇所はなし、船員も悉く健康で病床に臥せる者もなかつたが、唯飲料水に極度の缺乏を來してゐたのみは辛抱が出來惡くかつた、それにしても寸時も早く陸地を見出すのが捷徑なので、吾々は其處から航路を北方に曲げたら、或ひは大韃靼の北西部か氷海へ行かれたか知れないが、尙ほ同一方向を採つて帆走らした方が善いと決した。

一千七百〇三年七月十六日、第一接檣に見張をしてゐた子供が初めて陸地を發見した、翌十七日には大きな島だか大陸だか――何れであつたか今でも分らない――が吾々の眼界にも入る樣になつた、此の陸地の南岸に海中へ突出た一小半島があつて、百噸以上の船舶を定泊し得られる極めて狹い入江を成してゐたから、此の入江へ一浬程の處に投錨し、船長は武裝した十二人の水夫に各々桶を持たせ、飲料水を見付けに端艇へ乘せて上陸せしめた、俺も此の地で何か珍らしい發見でもしたいと例の癖が叢々と萠して來たので、水夫等と同行する許可を船長から得た、扨上陸して見ると河も泉も無いのみか、人つ子一人住む氣振も見出せぬ、それでも飲料水の缺乏に、實際喉を絞められる樣な苦を忍んでゐる水夫等は、尙ほ不懲に水を求めんと汀近くを彷徨いてゐたが、俺は其と反對に陸地へ深く一哩許り歩いて見たけれど、見渡す限り不毛の地で、唯大きな岩や砂山がある斗り、別段好奇心を滿足さす樣な物は何一つ無いのみか、徐々疲勞も出て來たので元の入江の方へ足を向け、俺

等の船が定泊してゐる海が眼界に入る處迄來ると、水夫達は端艇に乘つて必死に橈を操つてゐる、俺は取遺されたかと喫驚仰天し、何せ距離が隔たり過ぎてゐるので聲は届くまいとは思つたが、それでも乘り遲れては一大事と聲を限りに呼んで見やうとした時、素敵もない巨大きな活物が水夫等の後を追逐けてゐるのが目に入つた、端艇を自由に操縱し得らるゝ流石の海も此の大怪物の膝迄しかない、山でも跨ぐ樣に大股に徒渉つて今にも一握にしさうであつたが、幸ひに水夫等は半浬程も先に進んで居り、其の上其處等邊には嶮しい岩が澤山にあつたから、流石の妖物も端艇に追付く事が出來なかつた、然し之れは後になつて知つた事實で、其の當時の俺は恐怖と驚愕との爲めに魂も身に添はず、怪物が端艇を一握にするか否やを立止まつて見物してゐる樣な度胸は藥にする程も無かつた、で、倉皇と最初の道を夢中に馳せて嶮岨な唯ある小山に這ひ登り、頂上から四邊の樣子を眺めた所が、此邊一體は充分に開墾の行屆いた土地であつたが、第一に俺の目を少なからず驚かしたのは、一

面に生ひ繁つてゐる秣にするらしい草で、長さが殆んど二十尺もあつた一事である。

俺はそれから大道らしい一條の道を一目散に走つたが、如何にも樣子が變なので氣を落着けて能く見ると、小麥畠の畔路であつたには魂消ざるを得ない、今が丁度收穫時なのか小麥の高さが四十尺以上もあるので、俺の身丈を五つ六つ接がなければ兩側を見通す事は出來ない、一時間許りも畔路を歩いて漸と畠の端迄來ると、其處に高さ少なくも百二十尺はある籬があつた、そして附近に澤山あつた樹木の高さに至つては、梢迄幾百尺ある事やら俺には見當もつかなかつた、此の畠から次の畠へは踏段があり、其の又踏段と云ふのが四段もあつて高さ各々六尺、一番上には石があつて高さ約二十尺、詰り其の石を踏み登らねば次の畠へは行かれないのだから、如何して俺に其の絶壁を登る事が出來やうか、けれど俺は最前の怪物が未だ目前に閃いてゐて恐ろしくて堪らず、瀕りに逃場は無いかと籬の隙間を探してゐた時、次の畠から踏段の方へやつて來る雲衝く許りの物があつた、俺は肝を潰して怖々瞳を

上げると、端艇を追駈けた怪物と同じ大きさの人間であつた、恐い物見たさに眼を睜つて能く見れば、身丈の高さは塔程あつて一跨ぎに五間位は容易に歩かれると思つた、俺は極度の恐怖と驚駭とに戦慄き、千里の竹藪の様な麥畠の中へ小さくなつて身を隱し、驚に捉まれた小禽の様に目斗りキョロ〳〵して踏段の方を見ると、巨男はやがて右手の畠を振向きながら仲間を呼ぶ様子であつたが、其の聲が圖抜けて大きかつたのと頭の上であつたのとで俺は雷鳴と思ひ違へ、天氣が變つて來たかと天を仰ひだ程であつた、此の途方も無い大聲を聞付けて同じ様な巨男が七人各自に刈鎌を持つて來たが、其の鎌の大きさは俺の國の大鎌の六倍程あつた、後から來た七人は服裝の粗末なから推しても、先の一人の從僕か日傭取であるらしい、先の巨男が何か二言三言呟听ると皆總掛りで俺の隱れてゐた畠を刈り初めた、俺は大鎌の電光に辟易して出來得る限り遠くに離れてゐたが、何分直徑が一尺もある麥が隙間なく生ひ繁つてゐる中へ身體を挾まれてゐるのだから、周章てれば周章てる程身動

きに仲々骨が折れた、それでも生命の惜しい一念で虫の這ふ様に漸々と前へ逃げ、雨や風の爲めに麥が倒れてゐる處迄來たが、其處から先へは一歩も進む事が出來なんだ、何故となら莖が織つた様に折重つてゐるので這い越す譯にも行かぬのみか、四邊に落ち散亂つてゐた麥穗の刺芒が、俺の衣服の上から槍の様に膚を刺すといふ仕末であつたからである。

すると間もなく刈人の一人が俺の後五十間許りの所迄來た様子であつたが、俺は先程からの苦勞辛酸の爲めに元氣全く沮喪したが上に、悲哀と絶望とに囚れて畝の間に轉手と身を横にした儘、何故氣息は止まつて呉れぬと愬に生命のある自分を呪ひながらも、然し又左様なれば自分に滿腔の愛を棒げて呉れる妻は寡婦となり、可憐い可愛の二兒は孤兒にならねばならぬと萬感交も胸に迫り、二度目の航海を思ひ止まれと、眞心から戒めて呉れた朋友や親戚が無かつたでもないのに、持つて生れた愚かしひ狂人ぢみた强情を立て拔ひて、這廻羽目に陷つた運命を今更の如く悔ん

だ、斯ふ心が煮返る程恐ろしく擾亂してゐながらも、俺は小人國の事を思ひ出さずにはゐられなかつた、彼の國の人々は俺を飽迄世界に出現した中で最も巨大な怪物だと思つた、俺も亦得意になつて全艦隊を片手で引摺つた事も歴々と覺えてゐるのみならず、彼の國の子孫には百萬年の後になつても、到底信ずる事の出來ない樣な俺が遺した幾多の事業は、ガリヴァーなる俺の名と共に年代記に永遠に載せられる事であらう、然るに今其の取るにも足らん玩具の樣な小人國の人が、只一人俺等が國の人々に立交つた如く、此の國の人達から瑣々たる蟲螻のやうに見られるのは、文明國民たる俺の身には終生拭ふべからざる大恥辱である、けれど總て人間は其の大いさに比例して野蠻殘忍の度を增すものだとしてあるから、俺は屹度最初に掴まれた極惡無慙な此の國の大野蠻人に、只一口に喰はれて仕舞ふに相違ない、さすれば愈に生きて赤耻を掻くより優だと思つた、物の大小は比較より生ずるといふ哲學者の學說は眞理である、小人國の民が俺の目に非常に小さかつたと同樣に、其の小

人國の民も亦已等より一層小さな民の住む國を發見し得る運命が來ないとも限らない、又之れと反對に五重塔を見る樣な恐ろしく大きな此國の民も、世界の何れの部分にか未だ發見せられない國があつて、其處に此の大人國の民よりも一層大きな人間が住んでゐないと、誰一人斷言の出來るものはないなどゝ、風前の燈火に等しひ生命をも忘れて種々な事を思ひ浮べた。

這麼取留めもない事を悃亂した頭に浮べながら身を縮めてゐると、刈人の一人が俺の臥せつてゐた畝から五間許りの處迄來て、今一歩で其の者の靴の下に踏み潰されるか、左も無くば鎌で眞二つに切られると云ふ危機一髪に迫つた、腑甲斐ない俺は今更生命が惜しくなり、巨男があはや俺の頭上に足を踏み下ろさうとした一刹那に、恐さに震ゐた聲を振り絞つて根限り助けを叫んだ、すると巨男は少し小跨に足を下し、暫く地上を飽かず搜してゐたが、到頭畝の間に蚤の樣に身を小さくしてゐる俺を見付けた、そこで俺等が國で鼬鼠でも生捕りにしやうとする塲合の樣に、此

の巨男も人間に似た危險な小動物に爬かれたり、咬まれたりする憂目を見ずに生捕りたいと云ふ風で、疑と俺を睨めて考へてゐたが、隙でもあつたと思つたのか後から矢庭に手を出して、俺の胴中を人差指と拇指とで撮み取り、希代な小動物の形態を尙ほ能く見極める爲め、目から一間位な處まで持ち上げた、俺は非常に怖ぢ恐れたものゝ、巨男が何の目的で吊上げたかも分つて居り、幸ひ少しは氣も落着いて來たのとで、両方の脇腹を慮遠會釋もなく挾まれた痛さは隨分苦しかつたが、地上から六十尺も持ち上げられた以上、懲ひ下手に悶いて指の間から滑り落ちては大變だと思つたから、骨節も摧ける樣な苦痛を忍んで身動もせなんだ、そして有つ丈の勇氣を絞つて眼を太陽の方に注ぎ、祈願を籠める時の樣に合掌し、俺の當時の境遇に相應しい低い悼ましさうな聲で二言三言話して見た、それは俺等が憎しい小動物を捕へて殺さうとする時のやうに、矢庭に大地へ敲き付けてお陀佛にはせぬかと非常に恐れてゐたので、窮鳥懷へ入る時は獵夫も何とやらの同筆法から、巨男の

哀憐を買はんが爲めの苦肉の計略であつた、然し何等の幸運ぞや、俺の言葉の何を意味するかゝ分らなかつたは言ふ迄もないが、獸離れのした聲の調子と身振とは少なからず好奇心を動かしたと見ね、珍しさうに莞爾と凝視たのみならず、俺の發音の明晰なのには非常に驚いたらしい、其の内に俺は身内の痛さが追々激しくなつた、で、俺は此の二本の指で壓付けられてるのが、俺にとつては如何に慘酷な刑であるかを知らせ樣と思つて、呻いたり泣いたり頭を左右に動かしたりしたら、流石の巨男にも意味が通じたらしい、上衣の裾を擴げて其の内に俺を窃と入れ、急いで主人のゐる處へ持つて行つた、其の主人と云ふのは雷鳴の樣な聲で下男に何か呟所けた男で、なか〳〵資産のある農夫であつた。

農夫は下男から俺を拾つた一伍一什を聞き——無論俺の推測に過ぎぬが——杖程ある麥藁屑で俺の上衣の裾を捲つて見た、之れは上衣が獸の毛皮の樣に、俺の身體に自然に具つた皮とでも思つたのである、それから俺の額に垂れ下がつてゐた髮

を左右に吹き分け、怪訝な顔で凝と顔を見ながら下男達を呼び集め、何時が日にも此の麥畠で這麼小さい動物を見出した事はあるまいと尋ねた――是れは後から俺が聞いたのである――そして彼は俺を四つん這ひに地上に置いたから、俺は萬物の靈長たる人間であると知らさんが爲め、直ぐと立ち上つたのみならず、決して逃げも隱れもする氣の無ないのを明かにせんが爲め悠々と前に後に歩いて見せた、農夫主從は俺の一擧一動を更に能く注視せんが爲め、俺の周圍を取捲いて座り込んだ、俺は帽子を脱いで農夫に揖禮し、手と目を出來る丈け高く擧げ、聲を張上げて數言話し掛けた後、衣囊から財布を出して金貨を一個恭々しく贈つたら、彼は掌の上に其を受取つて眼球へ擦り着ける程近く寄せて見たが、此の粟粒程の金屬が何であるか分らぬので、留針――彼が袖から出した――の尖端で何遍と無く裏返して見たが、それでも到頭分らずに了つた樣だ、俺は農夫に地上へ彼の手を置いて呉れと手眞似で知らせ、財布から殘らずの金貨を出して彼の掌に載せた、其の貨弊は四ピストー

ル――ピストールは日本の七圓八十九錢一厘に當る――の西班牙金貨四枚と、二三十個の小金貨とであつた、すると農夫は小指の先端を唇で濡し、先づ大きなのから小さいのと次々に點檢したが、依然として何の用途に使ふものかは分らなかつた、で、彼は俺に金貨を再び財布に入れよと手眞似で知らしたから、俺は悃願せん計りに再三受け取つて呉れよと望んだが聞入れて呉れぬので、此の上强ひても如何と思つて再び衣囊へ收めた。

農夫も今や俺が物の道理を辨へた生類と知つて種々話し掛けたが、何分其の聲が水車の音の樣に俺の耳へ響いて鼓膜も破れさうであつたが、語韻の發音は充分明晰であつた、俺は例の身上有つ丈けの諸國語を列べたてゝ出來る丈けの高聲に話し、相手は俺から一間程離れて耳を傾けてゐたのだが、各自言葉が通せぬので全然不結果に了つた、農夫は其の時迄呆氣に取られてゐた下男達を皆仕事に遣つてから、衣囊から手巾を出して二つに折り重ねて左の手の掌に展げ、其の儘其の手を地上に

水平に置いて俺に上れと手眞似した、何故なら其の掌の上迄は一尺より高くはなく、俺の身體で充分に出來る藝であるからだ、俺は今の分際として服從するのが道だと思つたから、早速手巾の上へと上つたものゝ轉落ちてはならぬから、手足を充分に伸して横になつた、すると農夫は非常に注意して俺を手巾の四隅で包み、自分の家へ持つて歸つて内儀さんに得意になつて俺を見せた、所が内儀さんは丁度英國の婦人達が蟇か蜘蛛でも見た時の樣にキヤタと叫んで後退つた、けれど恐い物見たさに遙か離れて俺の擧動を眺めてゐると、俺が能く主人の手眞似を了解んでゐるのに悉皆氣を兎し、追々と俺を優しく扱つて呉れる樣になつた。

時恰も正午十二時頃だつたので、下男が俺のゐた部室へ晝飯を運んで來たが、彼は走は質素儉約な主人の性情に相應しく、單に上等肉を一皿盛り上げたのみであつたが、其の皿の直徑は二十四尺位はあつた、食卓に着いた一座の連中は農夫に内儀さんと、三人の子供と年寄つた祖母さんとであつた、一同が椅子に腰掛けた時亭主

は俺を食卓の上へ撮み上げて呉れたが、其が床上を去る三十尺といふ素敵もない高さなので、俺は目も眩みさうで震々と慄へながら、落ちてはならぬと思つたから成る可く端へは寄らない樣にしてゐた、内儀さんは一口の肉を細く剉し、麪包を微塵に粉にしたのと一緒に碟へ盛つて載の前へ置いて呉れた、俺は内儀さんに鄭寧にお叩頭をしてから、衣嚢にあつた自分の餐刀と肉叉とを取出して食事を初めると、其の樣が非常に面白かつたと見ゐて一同を面白可笑しく笑はした、すると内儀さんは下女に極小さい杯を持つて來させたが、約五升は確かに容る大杯だつたので、俺は滿身の力を兩腕に籠めて辛と抱き上げ、極めて尊敬の態度を以て、英語で出來る丈け大きな聲をして内儀さんの健康を祝ひつゝ飲むだら、一同が心から面白くて堪ゐられなかつたと見ゐ、俺の耳が聾になるかと思ふ程大きな聲で噇と笑つた、酒は一寸林檎酒に似た味で、舌觸りは決して惡くはなかつた、すると主人が自分の皿の方へ來いと手眞似して呉れたので、俺は早速食卓の上を彼方へと慄へる足を踏締めな

から歩いて行つたが、何分可恐喫驚の最中であつたので――思ひ遣りのある讀者は直ぐとお察し下さつてお蔑視もあるまいが――何を隱さう俺は麪包の皮に躓いて俯向けに踣つた、然し幸ひ少しの怪我もなかつたので何喰はぬ顏で立ち上がつたが、皆が非常に心配して呉れてゐるらしかつたから、帽子――敬意を表する爲めに腋下に抱へてゐた――を持つて頭の上で盛んに振り舞はし、少しも怪我をしなかつた事を知らさんが爲め三度萬歳と叫んだ、それから俺が俺の主人――今後は農夫と呼ばずに主人と云はう――の方へ近附かうとすると、南無三寶主人の傍にゐた十歳許りの惡戯盛りの息子が、矢庭に俺の足を掴んで宙へ逆釣りしたから堪らない、俺は戰々と手足を慄はしてゐたが、主人は早速子供の手から俺を奪ひ取つて呉れると同時に、歐羅巴の騎兵一大隊を地上に撲り倒す事の出來る樣な拳を子供の横面に喰はせて、此の座を去れと大聲に命じた、然し俺は世間の子供一般に雀や、兎や、小猫や、小狗などを虐めて樂しむ惡戯癖のあるのを知つてゐたから、俺も此の子供に怨恨を

抱かれては如何な憂目を見るも知れぬと、早速跪いて子供の方を指差しながら、出來る丈け主人に分る樣な手眞似で其の容赦を乞ふて遣つたら、主人も納得して子供を再び椅子に着かしめた、俺も賴み甲斐があつたと喜んで子供の手に接吻したら、主人は子供の手を取つて俺を靜かに撫でさせた。

で、俺が安心して主人の傍で御馳走になつてゐる最中、此家の飼猫が内儀さんの蔽膝の前へ飛びあがつた、朝から未だ何一つ食べんので、夢中になつて食事をしてゐた俺は何にも知らなんだが、背後の方で靴下を織る機械が十二臺も一緒に運轉し出した樣な音がしたから、喫驚して振返つて見ると、其は猫が喉を鳴らす聲であつた、内儀さんが食物を遣つたり、頭を撫でたりしてゐた暇に充分に觀察したが、食卓の上へ兀然々々と出す頭の樣子や足の具合から推測すると、慥に牡牛の三倍以上大きかつた、俺は其の猫から五十尺も離れて隅の方に縮つて居り、内儀さんも亦猫が俺に飛び附いて爪でも立てゝはならぬと懸念し、確り抑へてゐて呉れたにも拘

らず、猫の容貌が如何にも獰猛らしかつたので、なか〳〵落着いてはゐられなかつた、然るに主人は家畜に馴らさうと思ひ、猫から二間位の所へ厭がる俺を据ゑて見たが、相手は少しも知らぬ態をしてゐたから先づ危險は無いと安心した、總て獰猛殘忍な動物に對して、度を失つたり恐怖の色を見せたりするのは、却つて動物の反抗心を買ひ、或ひは隙に乘ぜしむるものだとは日頃から聞いてゐたのみならず、年少の時分から幾多の旅行で其の眞理なる事を經驗してゐたから、俺は平氣の平左を氣取つて悠々と猫の頭の近くを五六回も大膽に往來して見、最後には僅か一尺五寸位しかない處迄大冒險を試みたら、猫の方で俺の無謀なのに恐れを抱くものゝ如く後退つた、そして農家では何處でも能く見受ける事だが、此家にも亦二匹の飼犬がゐて遠慮なく室内へ這入つて來た、然し俺は犬に對しては左程の恐怖心が起らなかつた、一匹の犬は象の四倍程もあり、他の一匹は獵犬で前のよりは脊が高かつたが肥ゐてはゐなかつた。

晝飯が正に終らうとした時、乳母が當歳位の赤坊を抱いて入つて來た、赤坊は目聰くも俺の姿を見るやいな、倫敦橋からシエル海迄聞える樣な途方も無い大きな聲で嗅き、俺を玩具にしたいと駄々を捏ね出した、内儀さんは何氣なく我が子をあやす積りで俺を撮み上げると、赤坊は矢庭に俺の胴中を鷲掴みにし、頭から全嚙りにしやうとしたから堪らない、俺は懸命に聲を振絞つて大きな聲で呻つたら、流石の赤坊も喫驚して手を放して呉れたが、若し内儀さんが前掛を擴げて宙から落ちて來る俺を受止めて呉れなんだら、屹度頸の骨を折られたに相違ない、乳母は赤坊の憤るのを宥め賺さんが爲めがら〳〵を鳴らしたが、此の玩具は中を刳つた椀の樣な物へ大きな石を幾つも入れ、其を赤坊の腰へ鎖で結び付けたのであつた、それでも子供が泣き止まんので乳母は最後の奥の手を出し、乳房を哺ませ樣として巨大な胸を出したが、其の何とも名狀すべからざる醜さは二目と見られぬ程であつた、先づ乳房の高さは六尺程あり、周圍は十六尺より決して狹くはない、乳嘴の大いさは俺

の頭の半分は確にあり、班點やら腫物の痕やら、雀班やら、世に是程嘔氣を催さしむるものは又とあるまいと思つた、其れに就いて一寸思ひ出したのは、英國貴婦人連の皮膚の色が吾々の目に美しく映ずる事であるが、是は同じ位の大きさの人間仲間で各自に見るからの事で、若し物の形態を大きく見せる鏡の前へ立つたなら、極めて肌理の細い乳白な皮膚も、粗糙な厭に病人染みた色に見ゐるのは、俺が以前に經驗して知つてゐるのである。

で、小國人に漂流した時は、彼の六寸にも足らぬ小人種が、俺の目に世界中で最も綺麗な人種の樣に見ゐたのを記憶してゐる、而して此の事に關して彼の國で俺の親友でもあり博識家でもあつた人と話をした時、其の先生が言ふには、俺の顏も地上から見上げると肌理も細かく綺麗に見ゐるが、俺の掌へ載つて近寄つて見ると、忌まはしい程醜く見ゐ、皮膚一面に大きな穴たらけで、髯の根は猪の剛毛の十倍より太く、顏の色だつて名狀し難い程可厭な色だとの事であつた、それでも俺は自惚

ではないが、長の旅行に多少日にこそ焦けては居るものゝ、英國の男子では一流の好男子なのである、其は兎に角此の博識の親友と、小人國の宮廷内に仕ゐてゐる女官達の品定しをした事があるが、此の先生は否彼女は雀班があるの、口が餘り大き過ぎるの、鼻が何やら天狗樣のやうだと、種々口に稅が要らぬ丈けに無遠慮な評を密に下した事があつたが、實を云へば俺には皆一樣で醜美の區別は出來なかつた、即ち小さいものゝ美しく見ゐ、大きなものゝ醜く見ゐるのは上述の實例で分る、若し讀者が此の大人國の人を見たら、定めし不具とお考へになるであらうが、彼等とても皆相應に美しい人民なのである、殊に俺の主人の容貌の如きも、六十尺下から仰向いて見上げると、なか〳〵隅には置けぬ好男子であつた。

食事が全く終つた時、主人は――無論其の聲と身振りとで推側したのだが――内儀さんに能く俺を注意せよと云所け、再び下男等の見廻りに出て行つた、俺は腹の虫を承知さしたのと安心したのとで、一時に疲勞が出て瀬に睡氣を催して來たら、

内儀さんは能く察して呉れて俺を自分の寢床へ入れ、上から清潔な白い手巾で覆つて呉れたが、其の手巾は軍艦の大帆よりも一倍大きくて粗いのであつた。

俺は二時間許りも睡つたが、其の間に可愛い妻や子供と自分の家で温かい家庭を樂しんだ夢を見た、雀躍する程喜んで目を醒ましたら何の事だ、水より淡い夢を結んだ自分は高さ二百尺廣さ六十坪もある大きな部屋の内に、長さ十間に餘る寢臺の上に只一人淋しく臥せつてゐたので、悲哀と寂寥の情が犇々と胸に迫つて來た、内儀さんは俺が能く寢込んだのを見澄まし、俺を置き去りに部屋へ錠を下して出て行つたのである、然るに寢臺の高さは床上四間もある、下りるにも下りられず、呼んだとて此處から臺所迄聞ゐるではなし、瀕りに心細くなつて泣き出しさうにして居た時、二疋の鼠が幕を攀ぢ上つて寢床の上へ飛び下りた、恐るべき此の二大動物は好き餌やあると彼方此方倉皇と躾いでゐたが、やがて一疋の奴が俺の頭を噛りさうにしたので、俺は驚きながらも跳ね起き、腰なる一刀の鞘を拂つて身構へた、然

るに此の獰猛なる動物は大膽にも二疋左右より俺を挾擊し、一疋の奴の如きは無禮千萬にも領子へ前足を掛げた、然るに俺が手練の早技は拳も通れと敵の腹へ一刀お見舞ひ申したので、未だ何等の惡戯をせぬ前に斃れて仕舞つた、他の一疋は仲間の悲酸な運命を見るや、大きな身體を耻しくもなく逃げ仕度をしたので、俺は此奴逃がしてなるものかと一刀浴せ掛け、脊中に可なりの深傷を負はしたが、それでも鮮血を滴らしながら逃げて行つた、此の比類なき功積を擧げた後、俺は寢床の上を彼方此方悠々と歩きながら、呼吸を平かにし精神を鎮めんとした、鼠は何れも大きな猛犬の一種程で、敏捷と兇暴とに於ては遙かに優さつてゐた、若し俺が寢る時に滯を解いて横になつたら、此奴等に咬み裂かれて生命は疾うに亡かつたに相違ない、殺した鼠の尻尾を度つて見たら、一間が僅かに一寸足らなかつたのみである、今度は未だ鮮血の流れつゝある死骸を力一杯で持ち上げた所、俺の胸迄は充分にあつたが、何だか未だ生きてゐる樣な氣がしたから、頸の邊へ止めを刺して全く安心した。

すると、間も無く內儀さんが部屋に入つて來たが、俺が全身血塗れになつてゐるので喫驚して掌へ載せた、俺は鼠の死骸を指差し、愉快氣に笑つて身に少しの怪我も無いのを手眞似で知らせると、內儀さんも殊の他喜んで呉れ、下女を招んで早速鼠を火箸で挾んで窓から捨てさせ、次いで掌から俺を食卓の上に置いたから、俺は切先から鍔元迄血に染まつた刀を內儀さんに見せ、上衣の裾で勇ましく得意な顏で拭つて鞘に收めた。

第二節

內儀さんには今年取つて九才になる娘があつたが、年齡の割合には素直で針仕事も至極性質が良く、家の赤坊に衣服を着せるのが上手な娘であつた、內儀さんと此の娘とで俺が夜寢る搖床を拵へて呉れたが、例の又鼠の襲來が恐ろしいので、此の搖床は吊棚の上へ置いてあつた單筒の抽出へ入れる事とした、是ぞ即ち俺が此家に

養はれてゐた間の寢床であつたが、尤も迫々此の國の言語を覺へて、自分の不足や要求が訴へられる樣になつてから、少しづゝ自分の便利なやうに拵へ直した、そして此の娘の人並よりも器用な事は、俺が一二度衣服を脫いで見せたら、直と俺に着せたり脫せたりする事が出來る樣になつたのでも明かだ、然し俺は自分の事は出來る丈け自分にして、成るべく此の娘を煩はさぬ樣にした、此の娘は一番地の詰んだ布を求めて來て俺に襯衣など澤山縫つて呉れたが、其の一番布目の詰んだと云ふのが、俺の國で囊にする麻布より一層目の粗いのであつた、洗濯なども絕わず此の娘が手づから爲て呉れ、又親切な敎師となつて俺に此の國の言葉を敎へて呉れた、で、此の敎師の敎授法は俺が何か身邊の品物を指差すと、一々此の國の語で敎へると云ふ方法を採り、四五日の後には何でも心に思つてゐる物の名は云へる樣になつた、這麼具合に親切で優しくて氣の利いた此の娘は、年齡の割合には少し身丈が低く、四十尺には少し足りなかつた。

此の娘は俺にグリルドリッグと云ふ名を付けた、家の者も以來は此の名で俺を呼び、後には全國を通じて誰知らぬ者なき名となつた、元來此の名は羅甸語のナスンクラス伊太利語のホムンセルチノ英語では先づ矮人とか又は一寸法師とでも譯すべき語であつた、そこで俺も此の娘をグラムダルクリッチ即ち小さいお守さんと呼んだ、俺は實際此の國に滯留中は此の娘に一方ならぬ世話になり、殆んど其の傍を離れた時が無いと云つても好い程である、だから俺が若し此の娘の深切や愛情を忘れたり、罵詈惡口する樣な事があつたら、大いなる忘恩罪を犯したのである、俺は其の受けた洪恩に對し、必らず報ゆる所なかる可からずと衷心から思つてゐる。

以下順序として俺が最寄近所の人々に如何に知られたかを少しく述べて見やう、俺の主人が麥畠で奇妙不思議な動物を生捕つた、其の大きさはスプラックナッグ―此の國特產の一小動物で身長約六尺、一寸恰好の整つた奴だ――程の大いさで、手足の具合は宛然人間其儘なのみならず、動作身振りもなか〳〵巧者に眞似が出來、

何でも自分の國語もあるらしく、其の上今は此の國の言葉も少しは分り、二本の足で眞直に立つて歩き、馴れてゐて性質も柔和いから呼べば直ちに來る、命ずれば如何な事でもやる、其の又手足の滑々と美しく、顏の色艶の佳いのは高貴な家の三才位のお嬢さんよりも優しだと云ふ評判が、忽ち近所界隈へ擴まつた、すると俺の主人と極懇意な友達で、直ぐと目と鼻との間に住んでゐた一農夫が、其の評判の實否を確めにやつて來たから、俺は早速此の客の前へ引出されて食卓の上に載せられた、そして俺は面白い氣は無論しなかつたが、目下の境遇致方無いと思つたから、命ぜらるゝ儘に歩いて見たり、劍を拔いて見たり鞘に收めたり、それから小さいお守さんから敎はつた通り、『御機嫌は如何』『よくお出下さいました』と此の國の言葉で挨拶した、然るに此の客人は老人であるが上に眇目であつたから、俺を能く見物する爲め眼鏡を掛けたところが、其の眼鏡の玉が二つの窓から室內へ射込む滿月の樣であつたから、俺は可笑しくて堪らず笑つて仕舞つた、然るに此の老人は頭腦の少

なからず足りない人丈けに、俺が何を面白がつて噴出したかも分らず、主人を始め家中の者も笑つてゐたのに、何と取違へたのか眞赤に怒つて可壓な顏をした、それに性質の至つて下劣な奴であつたから、俺が笑つた復讐に耻を搔かせる積りであるらしい、此家から約二十二哩、即ち半時間程で行かれる次の市日に、俺を觀世物に出したら嘸儲かるであらうと主人に勸めた、で、主人と此の客人とは何か俺に好くない企圖を爲てゐるのだと見ね、暫く額を鳩めて密々と囁き合ひ、時々俺の方を指差した、俺は其の言葉の二三を洩れ聞き、幸か不幸か其の意味が分つたので、彼から此へと想像を馳せて種々悲しい思ひに耽つた、然るに翌朝になつてグラムダルクリッチ即ち小さいお守さんが、内儀さんから巧みに其の話を聞出し、昨日の相談の一伍一什を俺に聞かして呉れた、氣の毒な程氣の優しい此の娘は俺を胸に犇と抱き占め、俺が觀世物に出される運命を悲しみ耻ぢて心から泣いた、此の娘は俺が無作法な亂暴者共に玩具にされて壓潰されはせぬか、手や足を捥取られはせぬかと

心配した、そして俺の性質が愼深くて遠慮勝ちで、又方正に名譽を重んずるのを知つてゐるから、金錢の爲めに公衆の前へ暴露され、何な卑賤な見物人の前へも引出されるのを、嘸侮辱されたと感ずるであらうと察して呉れた、そして此の娘の話すには、此の娘の兩親がグリルドリッグ――即ち俺のことだ――を彼女に與つたと約束した、けれど先年羊の仔を彼女に呉れておきながら、其の羊が充分大きくなつたら、肉屋に賣拂つて仕舞つた例から考へると、此度も只俺を觀世物に出す迄、世話をさしておく積りで欺したのだと恨み嘆いた、然し實を云ふと、俺は小さいお守さん程氣には懸けなんだ、と云ふのは別でもない、若しや這麼事が動機になつて、自由を回復する事が出來やしなかいと、例の俺には附物の大野心があつたからと、それから又豆の樣に小さい俺の身體を、小禽か蟲螻の樣に巨男達の間に引張り廻はされるのは、成程公然の侮辱には相違ないが、然し俺は此の國に對しては正眞正銘の異國人である、俺の目下の境遇にあつては、如何な大英國の君主なりとも、同

じ憂目に遇ふより他何とも手の出し樣はあるまい、だから萬一に俺が英國へ歸る日があつたとしても、此の不幸な災厄が俺の耻辱であつたとは非難も出來まいと思つたからである。

俺の主人は昨日來た頭腦の足りない老人の勸告を容れ、次の市日には俺を箱に入れて、自分の娘即ち小さいお守さんと一緒に鞍に乘り、附近の町へと連れて行つた、そして俺を入れた箱は四方皆板を打付け、只俺の出入りする潛戸と、空氣を通はせる爲め錐で穿けた僅かな孔があつたのみだ、お守さんは俺が箱の中で寢られる樣に、氣を利かして赤坊の蒲團を入れて呉れた、此の旅行は約二十二哩即ち半時間位の道程であつたが、俺は不安と恐怖との念に打たれて慄へてゐた、馬の一歩は殆んど四十尺、暴風雨を喰つた船の樣に動搖する、しかも其の動搖の度數が船より多い丈け此の方が苦しい、主人は日頃往來する宿屋の前で馬を下り、何か亭主と暫く相談をした後必要な準備に取掛り、一人の廣告屋を雇つて町中を脱漏なく廻らせ、青鷺の

旗印ある所――主人は此の宿屋の店前へ如上の印を畫いた旗を立てた――で、スプラックナックよりも少し小さく、身體の具合は宛然人間其の儘で、言葉も種々話すことが出來、面白い藝をする奇妙不思議な動物を御覽に入れると觸れ歩かしめた。

そこで俺は三百尺平方もあらうと思はるゝ、此の宿屋で一番の大廣間の食卓の上に載せられた、小さいお守さんは此の食卓の直ぐ傍へ低い腰掛を持つて來て其の上へ立ち上り、俺に藝當の指圖をする序でに萬般の世話をした、主人は込合ひを避ける爲めに、見物人を一度に三十人づゝと限つて入場せしめた、で、俺の藝當はお守さんの指圖に從つて食卓の上を歩きながら、俺の知つてゐる此の國の言葉の範圍内で、お守さんの問に應じて出來得る丈け大きな聲で答へたり、見物人の方を振向いて恭々しく揖禮し、皆々樣お早々の御入來、有難き仕合せに存じますと口上を述べた後、敎はつた二三の短い話をしたり、お守さんが酒杯の代はりに手渡しゝて呉れた酒の入た管を高く捧げ、見物人一同の健康を祝して飲んだり、劒を拔いて英國の

劍術使の眞似をしてから無闇に揮り廻したり、お守さんの手渡す藁の切屑で子供の時分にやつた槍術の眞似をやるなどであつた、俺は初日に以上の藝當を十二組の見物人に見せ、愚にも付かぬ事を慈悲容赦もなく幾回も繰返へさせられたので、其の疲勞と苦惱との爲めに半死半生の體となつた、然るに町に於ける俺の評判は凄じい程で、黒山の如き群衆は各自の番が來るのが待ち切れず、一時は戸を破つて闖入せんとした者もあつた、主人は此の好景氣に喜びながらも亦利益上の打算からして、お守さん以外の者には俺の身體へ觸らせなかつたのみならず、危險を防ぐ爲めに見物人の腰掛を遠退けて、俺の身體へ手が屆かない樣にした、然るに見物人中に惡戯盛りの學校生徒がゐて、俺の頭を目蒐けて榛子を投げた、幸ひに辛くも逸れて當らなんだで宜かつたものゝ、若し其が當つたとしたら南瓜位な大いさは殆んどあるのだから、俺の頭は木片微塵になつたに相違ない、それでも其の惡戯小僧が可厭と云ふ程撲たれた後、部屋の外へ引摺り出されるのを見て俺も少なからず留飲が下つ

た。

俺の主人は最初の興行が案外の上首尾だつたのに味を占め、次ぎの市日にも亦俺を觀覽に供する旨廣告して家へ歸つた、然るに俺は此の最初の旅行に暴風雨を喰つた船の樣な大動搖を受けたのと、八時間許り絶間なく觀客諸君の御機嫌を伺つたが爲め、最早立つ事も一言も話す事も出來ない程になつたから、主人は大切な金儲けの道具に死なれてはならぬと思ひ、俺の身に相應しい車を拵へて呉れた、そして俺は元の健康に復する迄には少なくも三日を要したが、世間の評判を聞いて百哩位の近所最寄から、身分のある人々が俺を見物せうと犇々と詰掛けたから、家にゐても落々と身體を休める暇などは少しも無かつた、此の人々は妻子眷屬を悉く引連れて來るのが例であつたから、一組三十人より少ないのはなかつた——此の國はなかなか人口稠密であつた——そして俺の主人は假令數組の家族を一緒に一室中に入れる事が出來ても、一家族毎に一室丈けの見料を貪つたから、大分懷中を暖かくした

に相違ない、這麼調子で一週間と云ふもの毎日――但し此の國の安息日としてある水曜日を除きて――町へ連れて行かれなくても、身體の休まる暇は藥にしたくも無かつた。

主人は俺が愈々金儲けに好望なのを見て、國中に名ある諸都市を興行し廻つたら面白からうと決心した、で、長の旅路に必要な總ての仕度を了し、家事向き萬段の用事を取り片付け、內儀さんに暫時の別れを告げて首府に向け出發したのは、俺が此の國へ上陸してから二ヶ月後、一千七百〇三年の八月十七日であつた、そして首府は此の國の殆んど中央に位し、此家から約三千哩の道程だとの事だ、主人はグラムダルクリッチ孃を自分の鞍へ一緒に乘せて行つた、孃は腰へ箱を括り付け、其の中へ俺を入れて更に蔽膝の上へ載せて行つた、其の箱は此の娘の丹精で極柔かな布を以て內面を覆はれ、殊に底は綿を入れて縫ひ合せ、其の上赤子の蒲團を入れたり襯衣や其の他の必要品も取揃へ、出來得る丈け俺の便宜を計つて用意して呉れた、

一行は俺と主人と此の娘と、行李を積んで後から乘つて來る小厮との四人であつた。

主人の企圖は、首府に行く道すがら途中の主なる町や、五十哩や百哩位の寄路なら、勸進元のある村や乃至富豪の家へは俺を勸せながら旅をするのであつたから、隨分手間が取れた樣であるが、それでも一日に百五十哩內外は容易に旅をしたから、一寸考へた程には日數を要せなかつた、グラムダルクリッチ孃は俺が先度の樣に疲れはせぬかと氣遣ひ、『鞍が搖れるので妾疲れて困る』と父に苦情を鳴らしながら、俺の爲めに休んで呉れたのも少なくはない、それから俺の希望で箱から度々出して呉れ、新鮮な空氣を吸はせたり、四邊の景色を見せて呉れたりしたが、其の時は引繩で緊り俺を括つて置いて蔽膝から落ちぬ樣にした、一行は五つ六つの河を渡つたが、何れもナイル河やガンジス河よりも一層廣くて且つ深く、倫敦橋附近のテームス河の樣な小さな流れは一つも無かつた、一行は十週間かゝつて十八の大都市と、他に澤山の村と一個人の家とで興行した。

十月二十六日、吾々の一行は首府ロルブ、ルグラッド即ち「世界の誇り」に安着した、主人は市で最も目抜きな町で、しかも王宮に程遠からぬ處へ宿を取り、俺の姿と藝當とを精密く記載した引札を配つてから、三百尺に四百尺位な大廣間を借りて、其の中央に俺の藝をする直徑六十尺程の食卓を据え、其の食卓の周圍へは端から三尺許りの處へ、俺の落ちない位の高さで柵を結ひ繞らした、で、俺は日に十回づゝ觀客諸君に初御目見得をする事になつたが、諸君は悉く驚愕の目を睜り、滿足を買はずに歸られるのは一人も無かつた、其の頃は俺も最早可なり話すことが出來、聞く方は何でも完全に分る樣になり、文字も嚙つてゐたから簡單な文章は飛び〳〵に說明の付かぬ事はなかつた、之れも偏にグラムダルクリッチ敎師が家にゐた頃から親切に敎へて呉れ、旅行中でも暇さへあれば倦まず敎授して呉れたからである、孃は常に俺等が國の大地圖位な大いさの小本を衣囊に入れてゐたが、これは此の國で少女用敎科書として用ふる宗敎上の短かい話說を蒐めたもので、孃は此の本で俺に文字を敎へ、又は字義を說明して呉れたのである。

第三節

主人の懷中加減は日に日に善くなつたけれど、俺は激しい骨折を容赦もなくさせられるので、日に日に弱つて數週間の後には著しく健康を害した、然るに慾に目の無い主人は調子に乘つて益々俺を働かせるので、俺も遂には全く食慾が無くなつて宛然骨と皮ばかりになつた、農夫は之れを見て最早近い內に俺がお陀佛になるに相違ないから、今の內に出來る丈け儲けて置かねばならぬと決心した、兎角する間に宮廷から一人の式部官が來て、王妃や女官達のお慰みに供する爲め、速刻主人に俺を連れて伺候せよとの命が下つた、これは式部官連の二三が旣に俺を見物して、眞に美しい希代な小動物で、藝も出來れば智惠もあると奏上したからである、それで早速宮廷へ伺つて見ると、王妃を初め供奉の女官達は俺の樣子や擧止が可笑しいと

云つて、殊の外の御喜悦であつた、で、俺は跪いて王妃の足に接吻するの光榮を得たいと願つた所、此の仁慈にして寛大の德を兼ねさせ給ふ王妃は、足どころかお手の小指を差出して下すつたから――無論俺が食卓の上へ載せて貰つてから――俺は有難さに其の小指を緊と兩手に抱へ、無上の敬意を表して唇を當てた、そして王妃は俺の生國は何處だ、何の爲めに航海したなど、二三の御質問があつたから俺は出來る丈け簡單に而して明瞭にお答へした、すると今度は俺に宮廷内に住む氣はないかとお尋ねなさつたから、俺は食卓の上で鄭寧に稽首をして、主人の奴隷たる身の元より任意に御返答する事は出來ぬが、然し箇人としての希望を述べるなら、一身を捧げて陛下に御奉仕するのを誇りとすると恭々しくお答へした、すると王妃は俺の主人に賣る氣はないか、隨分高價で買上げてやるとお掛合ひになつた、主人は最早俺の生命が一月は難しいと考へてゐた矢先だから、今が丁度見切り時だと思つたので、早速お請けして一千兩なら手離さうと切出した、すると王妃は其の大金を即

席拂になすつたが、其の又一兩貨幣の大きさと云つたら、葡萄牙國の八百圓金貨位はあつた、そこで俺は王妃に今日唯今から陛下の最も卑しい家來の一人になつた、就いては彼のグラムダルクリッチの儀であるが、當人は今迄俺に對して注意と親切とを怠らず、俺の身邊の世話も能く心得てゐるから、引續いて俺のお守兼教師としてお抱へ下さる譯には行きますまいかとお願ひした所、陛下は快く御承諾下すつたのみならず、農夫とても自分の娘が一足飛びに宮廷へ薦められたのだから、無論嬉しくない筈はなし、肝腎な娘は娘で最早樂しくて堪らず、無邪氣な丈けに心中の喜悦を隱すことは出來なんだ、それで前の主人は御前を退去る時、俺に最後の告別を述べた末に、良い所へ世話してやつたと一言云つたが、俺は其には一言の挨拶もせず、只輕く頭を下げておいたのみだ。

王妃は俺が殊外冷淡なのを御注目になり、農夫がお居間を去つてから其の理由を御尋問になつた、俺は大膽に少しも惡れず、彼の以前の主人は自分の畠で偶然にも、

俺といふ此の哀れな惡意のない小動物を發見した時、能く頭を踏潰して呉れなんだと云ふより外、又何等の恩も德も蒙つては居らぬ、今迄養はれてゐた恩義があるとしても、全國の半分も興行し歩いて儲けた莫大な所得と、陛下から受取つた俺の身代金とで充分に償はれてゐる、それに觀世物に出されてからの俺が身は、俺に十倍する體力のある動物を充分に虐め殺す程の悲慘を嘗めて來た、隨つて俺の健康は毎日毎時民衆等の御機嫌を伺ふ爲めの苦役で目に見えて害はれた、そして彼の貪慾な主人が、俺の餘命も最早長くないと見切を付けなんだら、陛下とても一千兩の廉價ではお買上げ下さる事は出來なんだであらう、然るに今や俺は何等の光榮ぞや、全宇宙の華飾、全世界の愛の化身、全國民の渴仰の中心、全生物界の大女王なる、至大至善の陛下の保護を受くる身となつたから、不安の念は少しもないのみならず、斯く端麗壯嚴なる至尊の御前に咫尺するを得て、已に精神の復活を感ずるに至つたからには、無事長久に齡を重ねる事であらうと奏上した。

以上は俺が卓上演說の大意で、無論非常なる措辭の間違ひやら、吃者の樣に口籠つて漸と述べたのである、そして演說の後半陛下の德を稱へた部分は、此の國特有の修辭に依つた常套文句であるが、之れは宮廷へ來る道すがら女敎師グラムダルクリッチ孃に敎はつたのである。

王妃は俺の演說中の缺點や無禮の言辭はお赦し下さるのみか、斯く眼の中へ入りさうな小動物に、人間相應な頓智や常識があるものだと今更の如く驚嘆された、それで王妃は直ぐと俺を掌に載せ、國王のお居間へと連れて行かれた、國王陛下は大層莊重嚴肅な君主で、何かお仕事中であつたか王妃の方を一寸お回顧きなさつた斗りで能くは御覽にならず、何時から王妃にはスプラックナックが好きになつたのだと不愛相に問はれた、それも無理はない、俺が王妃の左の掌の上で胸に手を當てゝ屈んでゐたから左樣見えたのである、然し王妃はなか〳〵頓智もあり且つ滑稽の才に富んだ方であつたから、密と俺を寫字臺の上に立たせ、國王のお聞きに入れる

爲め身の上話をせよと命ぜられた、依つて俺は命の如く極めて簡單に話を始めた、其の時俺の姿が見えぬので心配してお居間の外迄捜しに來たグラムダルクリッチは、内へ入る事を許されたので、俺が農夫の家へ拾はれて來てからの一伍一什を悉くお二人に話した。

國王は此の國の學者に劣らぬ學識があり、哲學の研究に就いては既に其の奥を極められ、特に數學は最も其の得意とせらるゝ所であつた、然し俺の躰格を能く御觀察になり、二本の足で眞直に歩くのを御覽になつても、未だ俺が一言も口をきかなんだ前には、大分器用な細工人の手に成つた轆轤細工——此の國では轆轤細工が殆んど其の完成の域に達してゐた——と思つてゐられた、ところが俺が聲を出すのみならず、秩序正しく道理に適つた話をしたもんだから、其の驚愕は一通りや二通りではなかつた、けれど何しても國王には俺が此の國へ上陸した一伍一什の話では御得心にならず、何でも農夫親子が少しでも高價に賣付けんが爲め、俺に教へ込んだ架空談に相違ないと思はれたので、國王は種々な質問を俺に掛けられたが、俺の答辯は只外國訛が少し抜けなんだのと、未だ日が淺いので言葉に不充分な點があつたのと、何分農家で學んだのだから隨つて野鄙な言葉が雜つて、優美な宮廷語に相態はなかつと云ふのみで、其の他は一々條の立つた堂々たるものであつた。

そこで國王は此の週當直の學者三名——此の國の習慣として、大學者連が一週間交替に宮廷へ宿直するのであつた——をお呼び寄せになつた、三人の學者は暫時の間俺の身體を精細に檢査した後、名自に意見を述べたが區々で一つも符合してゐなかつた、然し俺なる小動物は自然の法則に從つて生れたものでないと云ふ一點だけは三人共一致してゐた、何故なれば此の小動物には動作の敏捷を缺き、又樹に攀ぢ上る事も地に穴を堀る事も不可能であるから、自分で自分の生命を維持する丈けの能力がないと云ふ理由からださうな、それから學者は俺の齒を精しく檢べて、此の動物は肉食獸であるのは明かだが、然し大多數の四足獸は此の動物よりは力が優つ

てゐる、又優らぬとしても野鼠其の他は此の動物より遙かに敏捷である、左すれば生命を維持する必要上から、蝸牛や昆虫類を常食としてゐなければならぬが、齒の學術的研究よりすれば、其等の虫類を食とする動物でもないらしいと論じた、すると三人の中での考古學者が、俺を胎兒であらうかとも考へた、然し此の說は俺の四肢を見れば完全なる發達をなし、又俺の髯の根株が明かに此の世に數年間は既に生息してゐたことが、顯微鏡に照して判然したから採用されなかつた、左ればとて又侏儒だとは無論云へぬ、何故なれば王妃が徒然の折に御鐘愛になる此の國有名な最も小さい侏儒でも、優に身丈三十尺はあるから其と比較して見ても、度外れに此の動物は小さいからだとの論だ、で、學者達は銘々勝手な熱を吐いた後、結句俺をレルプラム、スカルカス即ち造化の惡戲であると云ふ事で皃をつけた。

學者達は此の結論を下してから俺に二三の質問を掛けた、俺は造化の惡戲に心中少しく穩かならんから、國王にも何卒お聞ゝを願いたいと前置して、俺は俺と身丈

の同じ男女の人間が數百萬も集まつてゐる國から來た者で、故國の動物、樹木、家屋などの總ては其の住民の大いさに比例し、日常生活の狀態も陛下の臣民と大同小異で、自己防衛の必要もあり、又生計の資も求めねばならぬ事をお答した、そして學者達の意見に對しても、俺は自分の所存を極めて大膽に吐露して見たが、此の人達は最初から相手にならずに輕蔑の笑を含んで、農夫が俺に能く言草を敎へ込んだものだと云つた、然し國王は人並勝れた理解力を持つてゐられたから、三人の學者をお退けになつた後、幸ひ未だ首府に滯留中であつた農夫をお召出しになり、俺の身上に就いて詳細に御下問あり、其と俺や俺のお守さんとの話を對照して御覽になつて、俺が虛言を吐かぬと云ふ事に信を措かるゝ樣になつた、斯くして始めて御疑念が解けたから、國王は侍女達が俺に對して粗忽のない樣にさせよと王妃に御指圖あり、そして又小さいお守さんと俺とが非常に深く相愛してゐるのを御注目になつたから、俺の世話役は引續いて此のグラムダルクリッチにさせよと改めて御命令

になつた、そこで孃は便宜の一室を宮廷内に宛行はれた上に、孃の教育を擔任する女教師が一人と、仕立物や裁縫に從事する女が一人と、下働の下女二人とを附けられた、然し俺の世話一切は悉皆孃が引受けて、決して他人の手を借りなんだ、王妃は宮廷の指物師にグラムダルクリッチと俺との意に適ふやうな、俺の寢室を拵へよと命ぜられた、此の指物師は非常に器用な人で、俺の注文通りに僅か三週間の内に縱横十六尺宛で高さ十二尺の木造建築を仕上て呉れたが、窓もあれば戸もあり二つの厠迄あつて、宛然倫敦にある俺の家の寢室の樣であつた、天井の板は二つの蝶銃で自由に開閉が出來る樣に成つてゐて、其處から王妃の室内裝飾師が既に拵へて置いた寢床を入れた、其の寢床はグラムダルクリッチが毎朝俺が起きると日光に晒して呉れ、夜になると再び天井の開閉口から入れて呉れて鍵を掛けるのであつた、小細工物の得手な腕利の職工が、象牙に似た質の木で二脚の椅子と、俺の所持品を入れる抽斗附きの食卓二臺とを造つて呉れた、そして部屋の内側は床も天井も、此の

家を持運ぶ者の粗忽から意外の事變が起きてもならず、又馬車で家ごと旅行する際動搖を少なからしむる爲め、一面に綿や毛などを塡めた柔かい布で張り詰めた、俺は鼠に懲りてゐるので鍵を一つお願ひしたら、鍛冶屋が種々と工夫を凝らした末、此の國では未だ見た事のない最小のを拵へて呉れたが、それでも英國の紳士顯門の邸で門鍵にしか使はない程の大きさであつた、其をグラムダルクリッチニ失はれては困るので、俺は自分の衣嚢に大切に入れておく事にした、それから王妃は俺の衣服を仕立てる爲め、出來る丈け薄い絹布を織らせられたが、それでも英國人の毛布よりは厚かつたから、着慣れる迄は羞痒い樣で辛かつた、けれど其の衣服は此の國當時の流行を追ふたもので、波斯人と支那人との衣服を折衷した樣な、至極眞面目な中に優美な所もある物であつた。

王妃は俺がお側にゐなければ御食事もなさらぬ程御寵愛下さつた、それで御食事の折は俺も常に御食卓の上へ自分の食卓と椅子とを載せ、王妃の左のお肘の方へ席

を占めるとグラムダルクリッチが御食卓の傍へ踏臺を持つて來て其の上へ立ち、俺の世話萬歳をするのであつた、俺は銀製の皿一組と其の他の必要品を所持してゐたが、王妃のと比較べて見ると、倫敦の玩弄店に列べてある子供の飯事のよりも小さかつた、此等の食器はお守さんが銀製の小箱に入れて衣嚢に入れておき、食事の度毎に自から清潔にして俺の前に手渡して呉れた、王妃は何時も二人の王女とお食事をなさつたが、お一方は十六歳でお妹の方は十三歳と一ケ月であつた、で、王妃は常に俺の皿へ肉を一口づゝお入れ下さると、俺は其の肉を又餐刀で切つて幾口にも食べたから、約に少しづゝ食べるとお考へになつて非常な御滿足であつた、王妃――非常に小食な方であつたが――は英國の百姓共が十三人も寄つて漸と食べる程の肉を只一口に召上るので、俺も始めの内は其を見て嘔氣を催した程である、隨つて雲雀などは骨ごとお嚙碎きになる、其の又雲雀が充分生長した七面鳥の九倍の大きさがあるのには驚くではないか、麪包の一口が約五斤、黄金の盃で召上る一

度の御酒の量が一石五斗八升六合三勺餘、餐刀は大鎌を二倍して刀を眞直にした程、匙も肉叉も其の他の器具一切これに準じた大きさであつた、俺は或時好奇心に驅られて、グラムダルクリッチに宮廷の食堂へ連れて行つて貰つた事を記憶してゐるが、十も十二も斯種の餐刀や肉叉が一緒に振上げられた時の物凄い光景は、今でも目前に閃いて身の毛が立つ樣である。

毎水曜日――前にも述べておいたが此の國の安息日――には國王と王妃とが男女の王族達を集め、王のお居間で食卓を共になさる習慣であつた、俺も今では國王にも非常な御寵愛を蒙り、其際には國王の左の鹽皿の前に、例の如く小さな食卓と椅子とを持出すのであつた、で、國王は俺と對話するのを大層面白い事にせられ、歐羅巴の風俗習慣、宗教、法律、政治、學術等に關して種々御下問があつたから、俺は出來得る限り明細にお答した、元來國王は頭腦も明晰で判斷力も明確であつたから、俺の話を能く會得せられた、俺も圖に乗つて少々は法螺も雜ぜたが、自分の親

愛るな故國の貿易、海陸の戰爭、宗教の門派、政治上の黨派、教育上の偏見など云ふ太問題を提ねて滔々と演說したら、國王は耐へ切れなくなつて矢庭に右の掌に俺をお載せになり、左の手で密と撫でながら心から愉快さうにお笑ひになつて、お前は民黨かそれとも亦王黨に屬するかと問はせられた、そして國王は御自分の後にゐた宰相をお回顧きになり、人間の偉大だとか權威だとか騷いでも、斯んな小動物に摸倣される樣では實に哀れなものだ、然し此の小動物も生がある以上は、やれ名譽の稱號だとか爵位だとか有難がり、巢を造つたり穴を堀つたりして、家だとか市だとか勝手な名を附け、衣服や道具類に模樣を附けたり、戀もしたり、戰爭もしたり、議論もしたり、詐欺もやつたり、裏切りもするに相違ないと仰せられた。

俺は世界に誇る我が神聖な大英國が、斯くも散々に輕侮された時には心中憤怒の情に堪へなんだが、然し冷靜に考へて見れば、我が親愛なる故國が侮蔑を受けたのか奈何かは頗る疑はしい、何故となら數ヶ月間此の國の巨大い人民の姿を見たり

聲を聞いたり、又其に相應した大きな物象に目が馴れて仕舞つた今日では、上陸當初に少なからず膽を冷した恐怖の念は何時か消ねて痕跡も無い、却つて其の當時故國の紳士淑女等が華麗に着飾つて優美禮讓を鼻にかけ、大いに氣取つて歩んだり稽首をしたり、喋々と饒舌つたりしてゐる宴會の光景でも見たならば、俺は屹度此の國の國王や重臣等が俺を嘲笑した樣に、其の紳士淑女達の連中を腹を抱ねて笑つたに相違ない。俺自身でも王妃に度々掌の上に載せられて、二人の全身が寫る鏡の前に立たゝれた時には、大人一疋の俺の姿が如何にも可憐なので、腹の底から込上げて來る譏を抑へることは出來なんだ、鏡面に寫つた對照の馬鹿らしさは、之れを嘲笑せずに又何の他に嘲るものがあらうか、俺は其の時許りは實際平素より非常に身體が縮んだ樣に覺ねたのであつた。

俺を怒らせたり恥を搔かせたりした、彼の王妃の御用を勤めてゐた侏儒程癪に觸る奴はない、此奴は此の國始まつて以來の最も身丈の低い奴——實際俺が見ても三

十尺以上は無いらしかつた――であつたのに、自分よりは飛離れて一層小さい俺と云ふ者が現はれたから、今迄よりか大變に傲慢になつて、俺が王妃のお居間の食卓に載つて宮廷の方々と話をしてゐると、左も自分は大きいぞと云はぬ許りに傲然と大股に歩いて見せたり、哀れな一寸法師だと諷して一言二言皮肉な洒落を云つたりした、それで俺も餘り腹が立つので言葉仇にして、何だお前だとて人並の身體ではなし、五十歩百歩の兄弟分ぢやないかと調戯つて遣つた事もある、或日食事の時であつた、此の惡意のある小さな無法者は何か俺が云つた言葉に激したと見ゐて、俺が食卓の上で何の氣なしに座つてゐたら、窃と王妃の椅子に上つて俺の胴中を掴み、銀製の乳酪を容れる大鉢の中へ投げ込み、後をも見ずに逃げて了つた、其の時グラムダルクリッチは部屋の隅の方で何か爲てゐたし、王妃は王妃で餘りのお驚愕に度を失はれ、俺を助ける事も忘れて呆氣に取られて居られたから、頭迄鉢の中へ漬つた俺が若し泳を知らなんだら、哀れや溺れて悲慘な最後を遂げた事であらう、

然し程なく俺の小さなお守さんが氣が付き、飛んで來て救ひ上げて呉れたもんだから、俺は乳酪を六合餘呑んだ丈けで別條は無かつたが、折角の衣服は悉皆汚されて了つた、で、侏儒は早速捕へられて手嚴く鞭打たれた上、尚ほ追刑として俺を投げ込んだ乳酪を無理に呑ませられた、それから以後此奴の寵は次第に衰へ、間も無く姿は宮廷内に見えなくなつた、這麽腹黑い無法者の事であつたから、俺に對して非常な怨恨を抱いてゐたであらうと思つて、俺は大いなる安心と滿足とを覺ゑた。

斯う述べ立てると、俺と此の侏儒とは平素から仇敵の仲であつた樣だが、俺は隨分仇を恩で報つて遣つた事もある、無論以前の事であるが、此奴が卑怯陋劣な惡戯を俺にした事がある、王妃は其を見てお笑ひにもなつたが、又同時に心からお怒りになり、即座に放逐なさらうとしたのを、俺が種々と執成して漸やく無事に濟んだ事がある、それは王妃が脊骨付きの肉を皿へお盛りになり、其の肉を骨と離して骨許りを前にあつた鉢の中へ入れておかれたら、此の侏儒はグラムダルクリッチが側

棚へ用があつて行つた隙を窺ひ、孃が平素俺の食事の世話をする際用ふる踏臺に上り、兩手で俺の兩足を締め付けて、骨許り入れてあつた鉢の中へ俺を胸まで押込んだ、俺は無樣な形で少時骨の山へ突刺さつてゐたが、何分救ひを呼ぶ譯にもゆかず、漸の事で見付け出されたのは一分程後であつた、然し高貴の方達は肉を餘り熱くするのがお嫌ひであるから、靴下と股引とを汚した許りで幸ひ湯傷はしなかつた、這麼性質の善くない惡戯をしても、俺が寛大の心で執成して遣つたから、鞭で嚴しく打たれたのみで放逐の憂目を見ずに免れた事もある。

俺は王妃に折々臆病だと笑はれて、お前の國の人は皆お前の樣に臆病なのかと尋ねられた、其の理由は俺が蟲螻迄も怖ぢ恐れたからである、が、此の國の夏は蠅が實に人々を窘める、此の憎むべき昆蟲は大きさが雲雀位あつて、絶えず耳元で營々遣られるので、食卓に着いても落々食事が出來なかつた、此奴等が幾羽も一緒に俺の食物を襲つて、胸の惡くなる樣な糞をしたり、卵を粘着けたりする、身體に比例して大きな物象しか見ねぬ此の國の人々には宜いけれど、小さな物迄見ねる俺は嘔氣を催すのであつた、又時としては俺の鼻や額へ棲つて刺したり厭な息氣を喫がせる事がある、動物學者の說では斯種の昆蟲が天井を倒に歩くことの出來るのは、粘著性の液があるからだとの事だが、成程俺は其の粘著性の液なるものを認むることが出來た、此の忌むべき昆蟲に對して自己を防衛するのは、決して一通りや二通りの辛勞ではなかつた、で、顏の先きへでも營と來られると、思はず跳立たづには居られなかつた、彼の前に述べた侏儒の奴が俺等が國の學校兒童の爲る樣に、俺を喫驚さして王妃の笑ひを買はんが爲め、手に二三羽の蠅を握つて來て俺の鼻先で放した事がある、俺は其の時心中大いに驚いたものゝ直ぐと氣を鎭め、蠅が空中へ飛去る所を物の見事に餐刀で眞二つに斬り、それで幾分侏儒に面喰はして遣つたが、其の斬り方が如何にも巧妙だと云つて非常なる喝采を博した。

或る天氣の良い朝の事であつた、グラムダルクリッチは俺に新鮮な空氣を呼吸さ

せる爲め、俺の住家とする箱を窓の上に――英國で鳥籠を掛けると同じ樣に、窓の釘へ俺の家を掛けるのは何だか危險に感せられたので、俺には敢て試みさせる丈けの勇氣が無かつた――置いて呉れたから、俺は椅子の代はりに俺の家の窓框へ腰を掛け、食卓を据ゑて朝餐の菓子を食べてゐたら、二十疋許りの蜂が其の香を嗅ぎ付け、澤山な風笛を一緒に吹き立てたより大きな聲で營々唸りながら家の中へ舞ひ込んだ、其の内の二三疋は俺の菓子を掠めて逃げ去つた、他の奴等は頭や、顏の周圍を蒼蠅く飛び廻るので、俺は鐘の中へ頭を突込んだ樣に其の聲で悃惱し、又刺されはせぬかと極度に恐れたから、滿身の勇を振つて蠶と起ち、劒の鞘を拂ふやいな敵を宙斬りにした、斯くして俺が手練の早技で彼等の四疋を退治したら、殘る奴等は恐れをなして倉皇と逃げて了つたので、俺は再度の襲來を氣遣つて直ちに窓を閉ぢた、彼等は皆鷸鴠位の大きさがあり、蟄も縫針の樣に端が尖つて一寸五分位あつた、俺は土產にと思つて悉く其の死體から蟄を拔いて大切に藏つておいた、其を英國へ

戻つてから他の珍奇な物品と共に、歐羅巴中を隨分多くの場所で公衆の觀覽に供した後、三本をグレシヤム大學へ寄附し、殘り一本は俺が今でも好箇の紀念品として珍藏してゐる。

第四節

俺は今から俺が旅行した上陸地より首府ローブルグラッドに到る二千哩以内で見聞した事實より、此の國の概略を讀者にお話せうと思ふ、宮廷に入つてからも俺は平素王妃と御一緒に旅行するの光榮に接したが、王妃は御自分のみの時は言を要せず、國王と御一緒の時でも餘り遠くへは行かれない、國王が國境御視察に行かるゝ際にも、王妃は中途でお歸りになるのをお待ちになると云ふ有樣であつたから、俺の旅行は入府以來先づ無いと云つても宜い程である。

全王國の長さは約六千哩、幅は約三千哩乃至約五千哩、大いなる半島より成る國

であつて、東北境を限る蜒ゐたる山脈の高さ三十哩、其の絶頂は噴火山なるが故に越すことは不可能である、故に其の山脈の向ふには如何なる人種が住むか、或ひは又住まざるかは該博なる智識を有する大學者も知る由がない、他の三方は悉く漂渺たる大洋に圍繞せられながら、全王國に一つの港もない、河口には險しい岩石が蠹然として列び、海は一般に怒濤狂瀾凄じくて此の國最小の端艇をも泛べる事は出來ない、故に世界の何れよりも絶縁せられて、交通貿易の事などは夢にも知らぬ、けれど國内には大河到る處に流れて舟楫の便普く、又食用として賞玩するに足る魚が獵れる、海からも決して魚が獵れぬではないが、歐羅巴近海のものと同一の大きさであるから、漁獵する丈けの價値がないと顧みもせぬ、然らば何故此の國の陸上に許り素敵もない巨大は動植物が生産して、何故海産物は吾々と同じだと云ふ理由は、門外漢の俺の知つた事でない、宜しく學者達の研究に任せて置くけれど、此の國の人民は折々岩に撞衝つた鯨を捕獲する事があり、中流以下の者は喜んで食用とする、

鯨は無論歐州のものと同一で其の大いさは諸君も御存知であらうが、此の國の人は只一人で辛うじて荷ふことが出來た、偶には單に珍らしい物として籃詰とし、首府ローブラルグラッドの魚屋の店頭にある時もある、國王の食卓に鯨の丸料理が上つてゐるのを見た事もあるが、只珍らしい物として御覽になる許りで、好んで召上つた樣には思はぬ、其の時の鯨は俺が嘗てグリーンランドで見たのよりは稍や小さかつたが、高貴の方の常として、無樣に大きな食物は民衆と違つてお好みにならなかつたらしい。

此の國は隨分人口稠密で、市の數は、五十一、町の數は百に近く、村に至つては無數である、俺は好奇心に富む讀者を滿足せしめんが爲め、首府ローブル、グラッドの概略をお話せう、街衢は中央に大河が貫流して二區域に別れてゐる、戸數八萬以上人口約六十萬人を包含す、全市の長さ三グロムグラング――一グロムグラングは英國の五十四哩に當る――幅は二グロムグラング半である、此の測量は國王が調製せ

しめられた百尺許りの地圖を地上に擴げ、其の上を數回歩行して其の直徑と周圍とを計算し、其の比例尺から精密に調べたのだから決して間違ひのある筈はない。

國王の宮殿は決して規矩井然たる建物とは云へぬ、其の一部の屋宇でも周圍が約七哩ある、主なる室々の高さは概算して二百四十尺、其の長さと幅との之れに準ずるは勿論である。

グラムダルクリッチ嬢と俺との特に專用の馬車が一臺あつて、嬢に附いてゐる女教師は折々嬢と其の馬車を驅り、町々の見物や種々の買物に出るが常であつた、俺も其の時は例の箱の儘馬車に運び込まれ、一緒に見物に連れて行かれた、嬢は時々俺の願望の儘に箱から出して掌に載せ、行く〳〵市街の光景や、人民の風俗や、家屋の構造などを見せて呉れるのであつた、ところが前にも一寸述べた如く、俺の眼も頭腦も既に巨大な物に馴れてゐるから、何だか倫敦のウエストミンスターホール附近でも馬車を驅つてゐる樣な氣がして、何を見ても別段高いとも大きいとも思は

なかつた。

今迄俺の住家とした箱は、グラムダルクリッチが蔽膝の上に載せるには少し大き過ぎ、馬車の中へ持込むにも扱ひ惡かつたので、王妃は別に今迄のよりは少し小形の、專ら旅行用として工夫を凝らした縱横各々十二尺高さ十六尺のを指物師に命じて下さつた、そこで以前の箱を拵へた指物師が一々俺の呟所通りに、巧妙な腕の有らん限りを盡して造り上げた旅行箱は、正四角で三方には各々其の中央に窓を開け、三つの窓は長の旅路に不慮の事變があつてはならぬと氣遣ひ、其の外部に鐵の線を以て格子を附け、窓の無い一方の側には二つの丈夫な肘鈕を打附けた、此の肘鈕の用は俺が馬に乘りたいと思ふ時は、俺を持ち運ぶ者が革の帶を其の肘鈕に通し、鞍に跨つた儘其の帶を胸の處へ扣子で締めておけば宜い爲めである、それで國王や王妃の御巡幸にお供する時や、庭園内を遊歷したい氣になつた時や、宮廷内の女官や閣臣連を訪問する際などに、此の箱を胸に締めるのは無論グラムダルクリッチ嬢の

役目であつたけれど、孃が若し病氣の時は致方なく、俺の信任した最も忠實なる從者にさせる事にした、斯く俺は交際訪問を怠らなかつたので、程なく顯官要路の人々に知られるのみならず、又尊敬を拂はれぬのでも無かつた、然し其は俺の器量が優つてゐるのではなく、國王や王妃に寵愛されてゐるからだとは承知してゐた、旅行の道すがら俺が馬車に疲れた時には、馬に跨つてゐる從者が例の俺の箱を扣子で胸に締め、鞍の前にある座蒲團の上に載せて呉れたから、俺は前に述べた三つの窓から四邊の景色を愛でる事が出來た、そして此の箱の中には天井から吊床を懸け、二脚の椅子と一臺の食卓とを以て両方から挾み、馬車や馬脊の動搖を防いだ、それに長い間の航海で隨分暴風や巨濤に鍛えた俺は、折々甚豪い動搖も喰つたが、左程に困じなかつたのは幸である。

何時でも俺が町を見物せうと思ふ時は、グラムダルクリッチが例の旅行用の箱に俺を入れて蔽膝の上に載せ、此の國當時の流行であつた無蓋の轎に乘り、王妃の揃

の法被を着た四人の男に舁かせ、同じ服裝をした二人を後から供にするのであつた、府民は俺の噂は既に能く知つてゐるので、珍しさうに轎の周圍へ黑山の樣に集まつて來る、すると修養のある小さいお守さんは轎夫を立ち止まらせ、俺を大勢の人に能く見せる爲め、手で高く差し上げるのが常であつた。

俺は此の國で一番主な會堂、殊に其の會堂に附屬する塔は、國内最高の建築物だと聞いて是非見物せうと思つた、で、或日お守さんに其處へ連れて行つて貰つたが、然し實を云へば俺は失望した、何故とならば成程高いには高いが、地上から塔の尖端まで三千尺以上は有るまい、此の國の民と吾々歐羅巴人との大小の比較から推せば、別に感嘆に價する程の建築物とは申せまい、のみならずサリスベリーの尖塔に比較べても——俺の記臆に相違がなくば——割合から云へば一層高くとも宜い理屈である、此の有名な塔も高さに於てこそ斯く故障は云ふものゝ、其の結構の美麗なると堅牢なるとの二點に至つては、俺が此の國で非常な世話になつたからとて贔負

にする理由では無論ないが、可厭にも驚嘆の辭を吐かずにはゐられぬ、壁の厚さ約一百尺、悉く方四十尺程の砍石で積上げてあり、其の又壁の四方にある壁龕には、等身よりも大きい諸々の神や歴代國王の伏理石像が安置してあつた、すると其等の像中の一つの指が缺け落ちて、塵に埋まつてゐたのを俺が拾ひ上げて度つて見たら、正確に長さ四尺一寸であつた、グラムダルクリッチは此の小指の碎片を大層喜び、同じ年配の小娘が平常する樣に、他の玩具と一緒に藏つておく爲め、手巾に包んで衣囊に入れて歸つた。

宮廷の厨房は實に宏大な建物で、圓天井で高さ約六百尺、其の大きな竈はセント、ポールの圓天井と何れが大きいと思つて、歸國後最近に計つて見たら、竈の方が天井より十歩程小さかつた、若し俺が正直に此の厨房の格子や、素敵もない鍋や釜や、鐵釵に刺した大きな肉の切身の事や、其の他目新しい幾多の事物を述べ立てゝも、讀者は眞に受けては下さるまいと思ふ、否讀者は俺の言葉を信じて下さるとしても、

彼の嚴密な批評家先生とやらは、旅歸りの者が能く遣る手で、又俺が針程の事を棒程に法螺を吹くと思ふに違ひない、俺は此の迷惑な非難を避ける爲め、餘り深く立入つて細く述べるのは廢さうと思ふ、然し俺の此の書がプロブディングナグ――これは此の國の名である――語に飜譯せられ、此の國の王や人民の目に止まつたら、却つて實際よりは小さく書いて侮辱したと小言を受けるかも知れない。

國王の厩には六百頭内外の馬が繫いであつた、何れも身の丈五十尺乃至六十尺、そして國王は祭典儀式などの莊嚴を要する出御の際は、五百の騎兵を從へさせられ、威風堂々實に目覺しい限りであつた。

第五節

斯く俺は此の國で自由氣儘に暮らしてゐたものゝ、何が偖山の樣な大きな人間の中へ豆種な俺がゐる事とて、隨分捧腹絶倒に堪へぬ不時の事變や、又至極厄介な目

に遇つた事が無いでもない、餘り名譽な事でもないが其の二三をお話しせうと思ふ、

グラムダルクリッチは時々俺を小さな方の箱に入れてお庭へ持出し、箱から出して自分の掌へ載せたり、地上を彼方此方歩かせて呉れた、話は彼の前に述べた侏儒が未だ王妃に放逐されない以前の事である、俺等二人が平素の如くお庭で遊んでゐると後から跟いて來たので、俺は此の侏儒と一緒に連立つて丈の低い林檎の木の近くへ來た時、實つてゐた林檎と此の先生とを對照し、此の國の言葉で愚にも附かぬ風誣を思ひ付いたから調戯つて見たところが、全體俺に對して惡意を抱いてゐる奴だから、俺が丁度其の樹の蔭へ差掛つた機を見計らひ、力を極めて樹を搖つたから堪らない、忽ち樽の樣な大きい林檎が十二許り眞上から落ちて來て、其の一つが脊中に當つたが爲め俺は俯向に打ち倒された、然し俺は仕合せに怪我も受けなんだから、侏儒が王妃に嚴しいお叱責を蒙つた時、元來喧嘩は俺の方から賣つたのだからと散々佗を入れてやり、別に罰も受けんで濟む事にして遣つた。

又或日の事である、グラムダルクリッチが俺の氣分を晴させ樣と思つて、滑かな草地へ俺一人を遊ばせておき、自分は自分の女教師と少し離れた所を散歩してゐた、すると急に空模樣が變つて來て雹が夥多く降り、俺は其に打たれて突蹌つた、其の突蹌つて蹠いてゐる上から、引切りなしに降る雹が庭球戯の球の樣に落下して、俺の全身を慘酷に亂打する、俺は生命からく〳〵四つ這になり、檸檬の樹の蔭迄辛と逃げ込み、風下の處で俯伏した儘大災難を避けたが、それでも全身に受けた打傷の爲めに、十日間は病床に頭も上らぬ次第であつた、然し如何に大きな雹が降つたとて決して驚き怪む事はない、萬能の造物主が既に途方途轍もない大人國の存在を認めらるゝからは、其の大さに比例して總てを造つたのは當前ではないか、其は兎に角後學の爲め、俺は其の後面白半分に雹の量目を量つて見た事があるが、歐羅巴の雹の千八百倍に近かつた、これは俺の實驗だから充分信を措くに足る。

けれど此の降雹事件より更に危險な事變が同じお庭で起つたことがある、俺は自

分獨りで我儘勝手に歩いて見たいのと、出る度毎に箱を持出す面倒を避ける爲とで、お守さんに遠方から見張らせて一人散歩するのも珍くなかつた、で、或日俺のお守さんは俺が危くない處で遊んでゐるのに氣を許し、自分の女教師やお友達の女官等と連れ立つてお庭の向ふへ歩いて行つた、お守さんの姿も見えず聲も聞えなくなつた時、お庭番の白い小さい飼犬が率爾とお庭へ顔を出し、其處等を少時彷徨いてゐたが、やがて臭を嗅ぎながら俺の後を跟いて來たと思ふと、矢庭に俺を銜へて主人の處に持つて行き、尾を振りながら密と地上に置いた、仕合せと此の犬は馴れてゐたので、少しの怪我も受けず衣服も破られずに濟んだ、するとお庭番は俺を能く知つてゐるのみならず、日頃から大層親切にして呉れる人であつたから喫驚仰天し、兩手で俺を持ち上げて介抱しながら、何かなさらなかつたかと尋ねた、俺は驚愕の餘り氣息が止まつて暫く返辭も出來なかつたが、數分の後漸やく正氣附いた時には、俺の小さいお守さんの處へ連れて行かれてゐた、お守さんは俺を遊ばせておいた處

へ戻つた所が、俺がゐないので氣を揉み出し、聲を限りに呼んでも應答は愚か姿も見せぬから、小さい胸の張裂ける程心配してゐた所であつた故、何故犬を擊いで置かないのとか何とか、お庭番に嚴しい小言を喰はした、然し此の事件は王妃に知れるとお守さんは叱られると心配したし、俺も亦這麼評判を吹聽されるのは餘り名譽でもないと思つたから、一切沈默の間に葬つて宮廷内の誰にも知らさなかつた。

此の不時の大事變があつた爲め、グラムダルクリッチは二度と自分の見ない處へは俺を遊ばして置くまいと決心した、これには俺も少なからず閉口したから、俺が單獨でゐた時に起つた二三の小冒險は隱してゐた、其はお庭を舞つてゐた鳶が急に下りて來て俺を掠つて行かうとした時、俺が勇ましく劒の鞘を拂つて振舞はしながら、生ひ茂つた籬の下へ逃げ込んだから宜いものゝ、其でなくば確に敵の爪に掠はれて仕舞ふ所であつた事と、今一つは土龍の起した山の頂上へ登つた時、穴の中へ首迄陷つた事である、尤も其の時は餘り面目無さに、今は最早記臆には無いが何

とか虚言を設けて、衣服を汚した辯疏をしておいた、又蝸牛の殼に躓いて右の頰に怪我をした事がある、これは故郷の事を彼や此や追懐しながら歩んでゐた時の事變である。

俺が一人歩きをしてゐると、小禽の連中が少しも怖ぢ恐れず、否寧ろ俺がゐたとて何の頓著する必要があるかと云つた顔で、三尺位の近さ迄來て虫や其の他の餌を求食られるには、俺は嬉しかつたと云はうか、又堂々たる男子が耻辱を與へられたのだと云はうか、一寸判斷に苦しむのである、何でも一羽の鵜が俺の朝餐にグラムダルクリッチの呉れた菓子を俺の手から嘴で掠め様とした事のあるを記憶する、這麼場合に俺が勇を振つて小禽を捉まうとすると、彼等は大膽不敵にも人間に襲つて來て、俺の指を啄いて俺を近寄せず、太平樂な顔をして不關焉と地蟲や蝸牛を求食つてゐた、然し或日の事、俺は太い棒に滿身の力を籠めて一羽の紅雀を旨々と打倒し、兩手で頸を掴みながら凱歌を揚げ、お守さんの處迄持つて行つた事がある、と

ころが鳥は一時眩暈したのみであつたから直に正氣附き、俺の頭や身體の嫌なく羽搏を喰はした、俺は充分に兩手を伸して其の爪で引掻かれない様にはしてゐたが、何分羽搏される痛さに閉口し、二十度も放してやらうかと思つた程であつたが、それでも仕合せ善く一人の從僕が駈けて來て鳥の頸を絞めて呉れた、そして翌日の午餐には王妃の命に依り、其の鳥が俺の食卓に上る事となつた、何でも英國の鵠より多少大きかつた様に記憶する。

王妃は屢々俺から航海の話を聞かれた、そして俺が鬱ぎ込んでゐる時には、お前は帆や橈を操る事を知つてゐるか、少し船でも漕いだ方が健康にも宜くはないかと、何時も親切に慰めて呉れられるのであつた、俺も帆や橈を操る位は存じてゐます、俺の本業は船醫であるのだが、危急に際しては水夫の役割も致さねばならぬので、船の操縱は能く心得てゐる旨を答へた、然し此の國では最小の脚船が吾々の最大軍艦程はあるのだから、無論俺の漕げる様な端艇が有る理由もなし、此の國の船は如

何なに漕いで可いかは知らなんだ、すると王妃は俺の乘る端艇を俺自身で設計すれば指物師に造らせてもやり、又其を泛べる場所も拵へてやるとの仰せであつた、此の指物師は前にも述べたが眞に器用な人で、八人の歐羅巴人を容易に入れられる位の遊艇と、其に附屬する船具總てを、私の設計通りに十日で造り上げた、王妃は端艇が出來上つた時に大層喜ばれ、其を蔽膝の中へ入れて國王の所まで見せに行かれたら、國王は先づ試驗の爲めに俺を其の中へ入れ、水を一杯に容れた槽へ泛べられたが、然し場所が俠過ぎたので二挺の橈を自由に操る事は出來なんだ、それで王妃は是ではならぬと再び指物師に御命令があり、縱三百尺に横五十尺、深さ八尺の水漕をお造らせになり、漏泄を防ぐ爲めに瀝青を塗り、宮殿の一番外部の部屋の床に置かせられた、水槽の底には水か古くなつた時に流し出す爲めの栓があり、二人の從僕が三十分で容易に又汲込むことが出來た、俺が其の中で王妃や女官達のお好みに應じて端艇を漕ぐと、見物の方々は俺の熟練なのと快捷なのとに見惚れて喜んで

ゐられた、それで時としては俺が帆を張ると女官達が扇で風を吳れるので、俺は只舵を向けて進路を定めるのみであつた、そして女官達が疲れた時には小姓が息で帆を前の方へ吹いて吳れたから俺は右舷や左舷へ心の儘に舵を把り、充分に卓越した技倆を示す事が出來た、そこで平素端艇遊戯がすむと、グラムダルクリッチが端艇を自分の部室に持つて歸り、釘に引懸けて乾かしておくのであつた。

此の遊戯で俺は一度意外な事變に遇ひ、危く一命を亡くなす所であつた、それは小姓の一人が俺の端艇を水槽に泛べやうとした時、グラムダルクリッチの女教師が物好きに手出しゝて、俺を端艇へ乘せやうと撮み上げたが、過つて指の間から滑らしたから堪らない、床上迄四十尺も宙から墜落する所であつたが、女官の胸に刺してゐた留針に俺の襯衣と股引の帶が引懸ゝり、宙に吊下つて蜿いてゐた所をグラムダルクリッチに救はれた。

又或時こんな事があつた、水槽の水は三日目に清潔なのと吸み換へるのであつた